

全道中

No.90

2021.3



北海道中学校長会

No. 90

全道中

2021—3

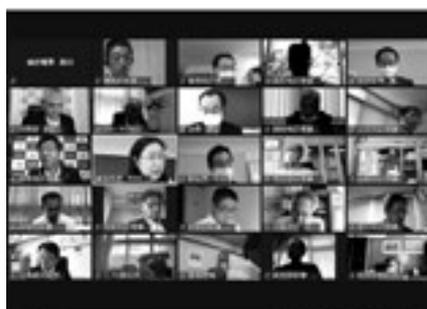


運 営 方 針

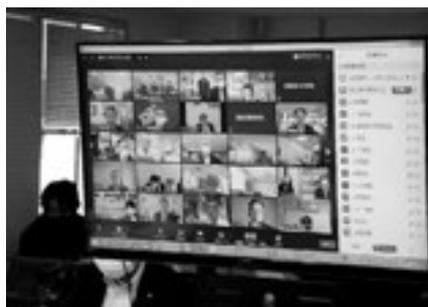
- 1 校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、今後に向けた組織の充実・強化を図り、会の総力を結集して活動の効率化と諸問題の解決に努める。
- 2 道教委をはじめ、全日中、四種校長会等の教育関係諸機関やPTAをはじめとした諸団体と緊密に連携して教育課題の解決に当たるとともに、家庭や地域に信頼される学校づくりに努める。
- 3 校長の学校経営力の向上に寄与し、道民の信託にこたえる中学校教育の創造に努める。

北海道
中学校長会

理事研修会



第71回 全日本中学校長会 総会・研修会 (5/21)



北海道小学校中学校校長会合同事務局研修会学習会 (7/17)



地区別教育経営研究会



事務局研修会



新型コロナウイルス感染症に関連した 道教委と校長会・教頭会との意見交換会（8/11）



全日本中学校長会会長来道 意見交換会（10/30）



巻頭言

◎今年度を振り返って……………北海道中学校長会会長 鎌田浩志…8

潮流

◎中学校教育の一層の充実を願って……………北海道教育委員会教育長 小玉俊宏…10

◎コロナ禍において道研に求められていることは……………北海道立教育研究所所長 鈴木淳…12

論考

◎心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ学校経営……………江別市・中央中 佐々木一友…14

経営ビジョンの実現のためのマネジメントによる学校経営……………名寄市・智恵文中 妹尾洋美…15

令和二年度本校の学校経営について……………弟子屈町・弟子屈中 木村郁夫…16

凡事徹底・前向き・笑顔の学校経営……………札幌市・篠路中 岡田直也…17

自己肯定感を育む学校経営の在り方……………札幌市・篠路中 岡田直也…17

◎心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ生徒指導……………札幌市・篠路中 岡田直也…17

豊かな心を育む、学校・家庭・地域との連携……………豊富町・兜沼中 黒木敏郎…18

スキル習得とその活用を基盤とした生徒指導の充実……………浦臼町・浦臼中 杉田嘉雄…19

地域総ぐるみで行う教育活動……………音更町・駒場中 島村雅樹…20

主体性を育てる教育活動……………紋別市・紋別中 可児幹博…21

◎心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ体験学習……………旭川市・東陽中 尾崎朋子…22

コロナ禍に対応した、地域とつなぐ体験学習……………せたな町・大成中 清水勝也…23

体験活動を通じた伝統芸能「久遠神楽」の継承……………北斗市・石別中 鏡水勝也…24

異年齢集団や障がいのある生徒との交流を生かした体験学習……………伊達市・光陵中 田仲英明…25

地域に根ざす『だて学』……………釧路市・音別中 成瀬剛慈…26

豊かな心と創造性を涵養する親善交流事業……………釧路市・音別中 成瀬剛慈…26

特集

テーマ

◎学校教育の今日的な課題から ～更なる学校力の向上を目指して～

小中一貫教育二年目（前半）の取組

～コロナ禍においても、小規模の強みを生かして～

社会で貢献できる資質をもった生徒の育成を目指して

～社会に開かれた教育課程編成を通して～

体力、運動能力・運動意欲の育成に向けた取組

～運動することの楽しさや喜びを味わうことや

地域との連携を通じて～

釧路市・鳥取中 土江田 亮 一 …… 34

稚内市・潮見が丘中 塩崎 由 雄 …… 31

幕別町・糠内中 田 中 幹 也 …… 28

今年 の 道 中

◎第七一回全日本中学校長会研究協議会和歌山大会提言概要

「主体的・対話的で深い学び」の実現

～「課題探求的な学習」を取り入れた授業の充実～

「主体的・対話的で深い学び」の実現

～組織的な研究体制と小中一貫教育を通して～

◎各部門の活動

令和二年度の活動及び当面する課題への対応について

各部の活動

各地区の活動

事務局長 木村 佳 子 …… 45

千歳市・北斗中 小川 満 …… 41

札幌市・元町中 和泉 明 一 …… 37

各地区の活動 …… 54

各部の活動 …… 50

北海道風土記

小さな村の意外な歴史

昭和期における小樽の横顔

「風車の町」苦前町～クリーンな食とエネルギー～

一度は訪れてみたい食と夜景の魅力

～歴史にあふれ縄文文化の息づく街・函館～

自然豊かで壮観な「室蘭八景」より

開拓の原動力が生きる街・帯広市

置戸町風土記

札幌市・琴似中 國島 孝 夫 …… 82

置戸町・置戸中 石原 邦 彦 …… 81

帯広市・西陵中 福田 茂 …… 80

室蘭市・東明中 笹原 正 明 …… 79

函館市・榎法華中 齊藤 淳 一 …… 78

苦前町・古丹別中 沼倉 修 …… 77

小樽市・望洋台中 伊藤 仁 弥 …… 76

泊村・泊中 浦寄 昌 明 …… 75

事務局長 木村 佳 子 …… 45

文 芸

進路の実現に向けて……………江別市・江別第三中 小泉 寧……………83

あったか職員室……………島牧村・島牧中 豊田 一……………83

北の産業革命「炭鉄港」……………小樽市・松ヶ枝中 黒川 裕……………84

身近な旅の楽しみ……………占冠村・占冠中 富永 浩……………84

アニサキス症……………旭川市・愛宕中 日比野 正……………85

今の誇りが過去と未来をつなぐ……………礼文町・船泊中 本間 到……………85

やりたいことを徹底的にやる……………天塩町・天塩中 関根 智……………86

奥尻祈漁太鼓の伝承に思う……………奥尻町・奥尻中 宮腰屋 由……………86

「聴くこと」の大切さ……………七飯町・大中山中 横山 佳……………87

コロナ禍……………函館市・赤川中 小林 徹……………87

明日も笑顔で！一歩前へ！……………奈井江町・奈井江中 菅原 理……………88

「お稲荷さん」の今昔……………苫小牧市・凌雲中 前田 辰……………88

テレビドラマを見てふと感じたこと……………平取町・振内中 小西 昭……………89

当たり前に感謝……………芽室町・芽室西中 久保 睦……………89

コロナ禍のコミュニケーション……………帯広市・八千代中 嶋 健……………90

忘れてはいけない記憶……………釧路町・昆布森中 青木 栄……………90

阿寒の母（ハポ）前田光子に学ぶ……………釧路市・鳥取西中 小玉 功……………91

絶望的でありながら、同時に希望を感じさせる本……………別海町・上春別中 赤木 弘……………91

生まれ故郷……………北見市・東相内中 比留間 信……………92

ハンコがお辞儀できない!?……………札幌市・新川西中 渡部 浩……………92

資 料

◎令和二年度 一般会計予算……………函館市・本通中 仲井 靖……………93

◎令和二年度北海道中学校長会役員・理事……………函館市・本通中 仲井 靖……………94

表紙に寄せて「旧赤煉瓦の郵便局から望む臥牛山」……………函館市・本通中 仲井 靖……………95

編集後記……………函館市・本通中 仲井 靖……………96

北海道中学校長会の歌……………函館市・本通中 仲井 靖……………96

題 字 「全道中」……………元北海道中学校長会会長 本間 均……………96

巻頭言



今年度を振り返って

北海道中学校長会 会長 鎌田浩志

新型コロナウイルス感染症の猛威に見舞われた令和二年度の北海道中学校長会の活動が終わろうとしています。いまだかつて経験したことのない緊急事態宣言、また全国一斉の臨時休業、そういう事態に私たち校長の誰もが日々迷い、考え、そして判断をし行動するなど、振り返ってみると、今までひたすら走り続けてきたように思います。この「日々迷い、判断し」ということは今もなお続いていますが、その状況下で、全道全ての中学校において日々教育活動が行われ、再び臨時休業措置がとられる事態にならなければ、今年度実施すべき教育課程をほぼ終えられるであろう状況になっていることは、とても尊いことだと思います。これもひとえに全ての校長先生方の努力であり、そのことを共にねぎらい合い、そして今後に向けて更に気を引き締め合っていきたいと思います。これまで、「叡智を結集し 羽撃く 道中」のスローガンのもと、本会の活動を支えていただいた全道五六九人の会員の皆様に心より感謝を申し上げます。また、本会の活動に多大な御理解と御支援をいただきました北海道教育委員会をはじめとする教育関係機関、関係団体の皆様に厚くお礼を申し上げます。

間もなく新学習指導要領が全面实施となる新しい年度に引き継ぐときを迎えようとしています。また、前倒しで実現するIGAスクール構想元年の到来でもあります。

今年度を振り返ったときに、今後対応すべき課題は様々あります。北海道中学校長会という全国ともつながる全道レベルで見たときに、特に重要且つ喫緊の課題として、この四月から全面实施となる新学習指導要領の理念に基づいた教育活動の展開、整備されたICT環境の日常の授業等での効果的な活用、この先も継続した取組が予想される学校における働き方改革への具体的な対応等があげられます。各学校ではその趣旨や背景を再度確認し、自校の学校経営や教育課程へ反映させていかなければなりません。

また、全国的な視点では、国の動きへの対応があります。十月七日に「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(中間まとめ)」が公表されました。非常に膨大な量ですが、ここに書かれていることの理念は、一斉授業か個別学習か、履修主義か習得主義か、デジタルかアナログか、遠隔オンラインか対面オフラインかといった二項対立に陥らず、教育の質の向上のために、発達の段階や学習場面等により、どちらのよさも適切に組み合わせ生かしていくことだと思えます。とても大事なことであり、このこと自体に異論は全くありませんが、これを今後の私たち学校教育においてどのように具現化していくかと

いう点では、難題を課せられているようで、様々考えていかなければなりません。さらに、学校の働き方改革を踏まえた部活動改革の第一歩として、休日に教師が部活動の指導に携わる必要がない環境を構築していく、部活動の指導を希望する教師は引き続き休日に指導を行うことができる仕組みを構築する、生徒の活動機会を確保するため、休日における地域のスポーツ・文化活動を実施できる環境整備ということで検討が行われています。このような、国が大きく動こうとしていることに対して、能動的に私たちが関わっていく必要性を強く感じています。

現在、新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない状況から、来年度の教育課程の平準化について悩まれていることと推察されます。今年度の修学旅行は、延期したところ、行き先を変更したところまた限定的な形や泊数を減らしての実施等々あります。また、体育大会についても、中止や実施。規模を縮小したり保護者の入場を制限したところや学校祭との同時開催等々。学校により、この二つの行事を例に取り上げただけでも様々な形ができています。これは、新型コロナウイルスに対して不明な点が多く、何をどうしたらいいのか正解が分からない中での判断でしたので、ある意味致し方ないことと思います。では、来年度の教育課程の編成はどうするべきなのか、隣同士の学校で全く違う、あるいは隣の市町村と全く違う対応となった場合、保護者や生徒の意識に立ったときに、感染状況に地域差があるため、ある程度広域の地域間で差が出ることは致し方ないことですが、公教育に求められる一律性という観点では、決して好ましい状況とは言えないのではないでしょうか。このようなことに対して、全道の校長先生一人一人の考えなども酌みながら、全国の状況も踏まえ、北海道としての方向性を模索していく必要性を感じています。

そのためにも、今後更に道中と各地区校長会の関係性を密接にし、全国的な課題、国の動向への対応や今後の教育課程編成に向けての平準化等について、全日中での動きや情報が各地区、市町村の校長会一人一人の校長先生方に伝わり、逆に個々の課題、困難が逆のコースを使って道中から全日中へ届け、国に対しての働き掛けへとつながる図式が図られるよう、全日中とともに模索しているところです。

各地区にとって必要な情報の発信や共有、連携を通してより一層主体者意識の醸成を図り、つながりを深めていくことが重要です。次年度の地区別教育経営研やブロック研、道中諸会議等が形は違っても開催できることを期待し、そのことが各地区や各学校が抱える課題や取組を交流できる機会となり、同じ校長という職責を担う者同士が意見を交わし思いを共有し合うことが、道中という組織をより確かで強固なものにしていくものと考えます。

結びになりますが、新年度は新型コロナウイルス感染症が収束を迎え、普段の日常を取り戻せる状況に進んでほしいと願っています。また、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を研究主題とする四年継続研究の二年次目を迎えます。九月二十四日・二十五日の両日、稚内市で第六三回道中研究大会宗谷・稚内大会が開催されますが、今年度、会同による開催ができなかった函館大会の分まで、全道各地区校長会の実践の共有と地区を越えた校長同士の交流を通して、北海道の中学校教育の振興に果たしてきた本会の足跡・役割を再認識し、新しい時代の教育に向けた方向性を内外に示す大会となることを大いに期待しています。「教員が笑顔になり、その先にいる子供たちも笑顔になる学校」を目指して、今後とも皆様の御理解と御協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

潮流



中学校教育の一層の充実を願って

北海道教育委員会 教育長 小玉俊宏

北海道中学校長会におかれましては、本道の中学校教育の改善・充実
はもとより、本道の教育行政の推進に特段の御理解と御協力をいただ
いていることに心から感謝申し上げます。

急激に変化する時代の中で、今、求められる中学校教育の充実に向
け、大きく三点にわたり、述べさせていただきます。

一 社会で活きる力の育成について

(一) 教育課程の適切な編成・実施

教育課程の適切な編成・実施については、新学習指導要領の全面実施
を踏まえ、各学校において、生徒の実態や地域の方々の思いや願いなど
を適切に把握した上で、学校の教育目標を明確化し、教科等横断的な
視点に立った資質・能力の育成や、教科等の枠を超えた横断的・総合的
な学習の推進など、教科等間のつながりを意識して教育課程を編成・実
施・評価し、改善を図るカリキュラム・マネジメントを確立することが
重要です。なお、本年度、新型コロナウイルス感染症の影響による臨時
休業からの学校再開後に、教育活動や時間の配分等を再検討し、学習活
動を工夫したことなどを生かし、次年度の教育課程編成に当たっても学
習の効果を最大化できるよう取組をお願いします。

(二) 学力向上の取組

各学校においては、全国学力・学習状況調査の問題冊子等を児童生徒
の教育指導の改善・充実に資するよう、有効に活用していただいたとこ
ろです。

市町村教育委員会から任意で提出いただいた質問紙調査の結果を取
りまとめた結果からは、各学校が、臨時休業の長期化による影響がある

中にあっても、自分の考えを深め広げる主体的・対話的で深い学びの実
現に向けた授業改善に取り組んでいることや、家庭学習において生徒が
主体的に取り組むことができる学習課題を示すなど、きめ細かな対応を
行っていることが伺えました。

今後も、チャレンジテストの結果等も活用しながら、検証改善サイク
ルを一層確立させるようお願いいたします。

(三) 英語教育の充実

道教委では、令和四年度までに、中学校卒業段階において英検三級
相当以上を達成した生徒の割合を五割以上を目標とし、児童生
徒が、四技能のバランスの取れた英語力を身に付け、主体的にコミュニ
ケーションを図ることができるよう、小中高一〇年間の系統的な指導体
制の整備に取り組んでいます。各学校においては、生徒の英語力の向上
に向けて、校種間連携を図るとともに、英検 I B A の結果を活用するな
どして、授業改善の取組をより一層進めていただくようお願いします。

(四) G I G A スクール構想の実現

G I G A スクール構想により、一人一台端末環境の整備が急速に進ん
でおり、今後は、これらを活用しつつ、「個別最適な学び」と、「協働
的な学び」を一体的に充実していくことが求められています。各学校に
おいては、各教科等において I C T 機器を積極的に活用し、これまでの
実践と最適に組み合わせることにより、主体的・対話的で深い学びの実
現に向けた授業改善を進めていただくようお願いいたします。

(五) 特別支援教育の充実

新学習指導要領解説において、各教科等の学びの過程において考え

られる困難さに対する指導の工夫の意図、手だての具体例が示されました。各学校においては、こうした例示を参考に、個々の生徒の困難さに応じた指導内容や指導方法を工夫するとともに、個別の指導計画に必要な配慮を記載し、他教科等の担任との共有や、翌年度の担任等への引継ぎなどにより、生徒一人一人の指導の充実に努めていただくようお願いいたします。

二 豊かな人間性と健やかな体の育成について

(一) 道徳教育の充実

道徳教育の充実については、道徳教育推進教師を中心に全教職員が協力し、道徳科の特質を生かした授業改善や評価の工夫・改善を図るとともに、道徳科を要とした学校の教育活動全体を通じた道徳教育の一層の充実を図っていただくようお願いいたします。なお、「道徳教育校内研修パッケージ『考え、議論する道徳』の充実に向けて（北海道教育庁学校教育局義務教育課）」等を参考に、道徳教育の全体計画や別業、道徳科の年間指導計画の不断の見直しを行っていただくようお願いいたします。

(二) 生徒指導の充実

本道の不登校の現状については、生徒数の増加、欠席日数の長期化とともに小六と中一の比較で約三倍増加する傾向も継続するなど、憂慮すべき状況です。各学校においては、欠席し始めた初期段階から「理解・支援シート」を作成し組織的・計画的に支援するとともに、現に不登校の生徒へのスクールカウンセラー等と連携した教育相談、自宅等でのICT活用による教育機会確保等に積極的に取り組んでいただくようお願いいたします。

また、自殺予防については、「SOSの出し方に関する教育」を含む自殺予防教育への理解を深め、日常の取組を進めていただくようお願いいたします。

(三) 体力向上の取組

各学校において任意で活用及び提供いただいた「新体力テスト分析ツール」のデータにおいて、あくまで参考ではあります。新型コロナウイルス感染症の感染拡大による臨時休業等の影響により、生徒の体力・運動能力については、特に、中学校において、スピード及び全身持久力が低下傾向にあることが分かりました。

各学校においては、自校の課題を把握・分析するとともに、その課題を家庭や地域と共有し、自校の課題や地域の感染状況を踏まえた体力向

上の取組を効果的に推進していただくようお願いいたします。

三 連携・協働に基づく学校づくりについて

(一) 地域学校協働活動の推進

地域学校協働活動の推進については、学校と地域が相互にパートナーとして取組を進め、地域全体で子供たちの学びや成長を支えることが重要です。各学校においては、地域と目標やビジョンを共有する中で、学びの質を高めるために必要な体制を整備するなどして、地域とともにある学校の実現を目指していただくようお願いいたします。

(二) 学校における働き方改革

これまで北海道アクション・プランに掲げる取組を推進していただきましたが、今後も、各学校において、学校における働き方改革は新学習指導要領の理念の実現に必要なマネジメントであると捉え、手引（Road）の積極的な活用や部活動方針の遵守等に取り組み、組織として機能する体制を整えていただくようお願いいたします。

(三) 服務規律の徹底

服務規律の徹底については、わいせつ行為などの重大かつ悪質な事故が発生するなど、教職員による不祥事が後を絶たず、道民の信頼を大きく損なう事態となっております。職員を指導する立場にある皆様には、自らを厳しく律するとともに、これまで以上に危機感をもち、教職員の服務規律の徹底に取り組んでいただくようお願いいたします。

終わりに、社会の急激な変化に加え、一般の新型コロナウイルス感染症の影響等により、予測困難な状況が続く中、生徒一人一人が、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成するために、校長のリーダーシップの下、組織として教育活動に取り組む体制を整備し、学校組織のマネジメント力の強化を図るとともに、学校内、あるいは学校外との関係で、連携と分担による学校マネジメントを実現しながら、新学習指導要領を着実に実施することが重要です。

道教委といたしましても、こうした様々な教育課題の解決に向け、貴校長会との絆をより一層深めていく必要があると考えております。今後とも引き続き、緊密な連携・協力をお願い申し上げますとともに、貴校長会のますますの御発展を心から祈念申し上げ、会誌の発刊に寄せる言葉とします。



コロナ禍において道研に求められていることとは…

北海道立教育研究所 所長 鈴木 淳

一 はじめに

令和三年二月十七日に新型コロナウイルスのワクチンが我が国に到着し、医療従事者から段階的に接種が始まる報道を目にしながら今後の感染状況の収束を願うばかりです。

振り返ってみますと、ちょうど一年前に国や道・道教委から新型コロナウイルス感染症拡大防止等に関わる数多くの通知文書等が発出され、今までの経験則では計り知れない中、子供たちの安全・安心な学校生活や家庭生活を確保するため、各校長先生方が先頭に立って家庭・地域・教育委員会と一体となった教育活動に取り組みられてきたのではないのでしょうか。改めて、この場を借りて、北海道中学校長会をはじめ、校長先生方一人一人に対し、これまでの学校経営に関わる御労苦に心から敬意を表したいと思います。

私も昨年度、教育指導監として、当時の佐藤教育長からの命を受け、手探りの中、校長先生がリーダーシップを発揮しながら分散登校に取り組みられている様子や感染対策を講じた卒業式準備に向けた取組の様子など学校訪問を通して拝見させていただき、頭の下がる思いでした。

今年度は、各学校において、これまで通常に取り組むことができていた教育活動が、感染対策等の条件により制約される中で、目の前の子供たちの「学びを止めない」「心を近づける」創意工夫のある取組を組織的に行われてきたのではないのでしょうか。

私ども北海道立教育研究所（以下「道研」）においても、教員研修機関として、加えて教育研究機関として少しでも北海道の教職員の皆様や

子供たちのために支援できることを模索しながら取り組んできました。その中で、少しずつではありますが、

道研としての役割、とりわけ、コロナ禍におけるこれまでの道研の取組を振り返る中で、是非、校長先生方と二つのカテゴリー（研修と研究）について、この紙面を通して共有し、今後の学校経営戦略の一助になればと思えます。

二 新たな教員研修の取組への提案①

まずは、コロナ禍において先生方へ安全・安心な研修の場の提供が第一優先、併せて、業務が錯綜する中で効率的な研修時間の確保と内容の質の担保が道研に課せられた役割でした。これまでの道研の研修講座は御承知のとおり、道内各地域から道研に参集して

いただく集合対面型様式と、道研から各地域に出向く出張対面型様式を中心にってきました。いずれの様式も対面型のため感染対策等を十分に配慮するなど様々な課題が浮き彫りになりました。先生方にとって「安全・安心」かつ、この時期だからこそ「効果的・効率的」な内容で教職員の皆様に参加してもらええるかが大きなハードルでした。既に予定



していた講座内容等を再検討・再整理を行い、「新しい研修様式」を五つのモデルで提案させていただき、併せて、一つの様式ではなく複数の様式を組み合わせた複合型で研修講座を提供してきました（前頁図参照）。そのときの検討してきた観点として、例えば、①このタイミングで学校現場の求めるニーズは何か↓情報収集の重要性②新たな研修様式において質的向上を図るには↓構想・企画の柔軟性③広域分散型の北海道に対応可能な教員研修形態とは↓即時性・先見性が伝わる発信力などが上げられます。

①～③の観点は、学校経営マネジメントを円滑に進めるエンジンの一つと考えられます。今年度の取組については、事業アンケートや担当者間のリフレクション等で検証・評価を行い、そのエキスを凝縮した内容を次年度の研修事業に盛り込んでいきます。是非、令和三年度の事業案内通知がお手元に届きましたら、経営ビジョンを確立する方策の一つとして積極的な関わりをお願いします。

三 不易と流行の調和のとれた教育研究の提案②

道研では、今年度から三か年計画で「『未来の教育』の在り方に関する研究」を立ち上げ、四つのミッション（A～D）に分けてプロジェクト研究に取り組んでいます。目的は、GIGAスクール構想が強力に推進される中で先端技術を活用し、地域格差の少ない子供たちの新たな学びの構築や各地域・学校におけるICT環境整備等に係る教育支援が核となる研究になります（A：「遠隔授業」B：「教員研修」C：「キャリア教育」D：「ICT環境整備」）。

これまで、コロナ禍において計画通りに進んでいない中、例えば、プロDでは、①市町村教委や学校を対象とした遠隔研修の実施②クラウドを活用した授業モデルの共同開発に取り組んできたところです。研究の進捗状況等は道研ホームページや成果交流会等で各学校に発信していきますので、是非、学校経営戦略の一つに加えていただければと思います。

各学校においては、既に、PCやタブレットが整備され、各教科にお

いてどのような活用が効果的かなどの校内研修も行われているかと思えます。本年二月の文部科学大臣の記者会見の中で「学校のICT化における校長の役割」についての質疑応答があり、その中で「校長には時代の変化をしっかりと受け止め、よいリーダーシップを発揮してほしい」旨のコメントがありました。今後効果的な活用等の議論が加速化していく中で道研の役割の一つとして、これまで各学校が確実に積み上げてきた教育活動（不易）と、これからの学校教育に求められる流れ（流行）の程よいバランスを見極めながら学校や教職員の皆様に提案できる教育研究の充実を図っていきたいと思います。

四 終わりに

令和三年一月二十六日に「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」（答申）が中教審から示されました。答申は、複雑化する現代社会、新型コロナウイルスの感染拡大を含めた予測困難な時代の到来を見据え、情報通信技術（ICT）の活用や、新学習指導要領の着実な実施を通じて、子供たちの資質・能力を確実に育成するため、従来の日本型学校教育の果たしてきた役割やその成果を振り返りつつ、この先の学校教育の姿を具体的に描かれています。

校長先生方は、どのような経営戦略やビジョンで令和三年度に向けて学校経営マネジメントに取り組まれていくのでしょうか。

是非、そのプロセスに道研を加えていただき、道研はどのようなミッションをもつて役割を果たしていくべきかなどについて、リアルタイムに情報交換させていただき、常に学校現場のニーズを肌で感じながらタイムリーな各種事業展開に努めていきたいと思えます。

結びに、「つながる」「ひろがる」「深まる」の三つのキーワードを会員である校長先生方お一人お一人と共有させていただくとともに、北海道中学校長会の御発展と会員の皆様の御健勝を心から祈念し、貴会誌に寄せる言葉といたします。

論考

心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ学校経営

経営ビジョンの実現のためのマネジメントによる学校経営

江別市・中央中 佐々木 一 友

一 はじめに

本校は、平成五年に新設校として開校し、令和四年度に開校三〇周年を迎える市内でも歴史の浅い学校である。校区は江別市の中央に位置するとともに広く、今年度五七六人の生徒が在籍している。また、学校選択制により、校区小学校以外からの生徒も少なからず入学している。特に、部活動では、全日本中学校大会で全国優勝を果たしているバレー部をはじめ、体育系部活動では近年の中部連大会や各種大会においても、全道・全国大会に出場している部が多い。また、文化系部活動においてもこれまで実績を残しており、部活動が盛んな中学校である。

本稿では、本校のこれまでの実践経過も踏まえ、生徒たちが主体的に生きる力を育むための学校経営の方策について二点述べたい。

二 学校経営ビジョンに基づく学校組織・学校体制づくり

学校は、社会的意識や積極性をもった子供たちを育成する場であり、学校が社会と接点をもちつつ、多様な人々とつながりを保ちながら学ぶことを大切にしている。

本校においても、様々な地域課題の解決に向けて、地域とともにある学校での学びや気づきを、子供たち自身の生きる力に結び付くものの方や価値観、生き方や課題解決力につなげていくことを重視している。地域が総がかりで子供たちの成長を応援し、そこで生まれる絆を地域活性化のための基盤とすることで、好循環をもたらすと考える。学校経営ビジョンに基づく学校経営の在り方として全職員があらたな姿を共有理解した上で、見通しをもつて具体的な組織や体制を見直しながら、整えているところである。

- 1 実際の校務実態を踏まえた分掌や役割の見直しと機能調整
- 2 学校公開や開放などによる外部人材、地域との積極的な連携充実
- 3 学校運営委員会(コミュニティ・スクール)の効果的な活用

4 課題の重点化による校務分掌等の適切な分担と組織化・機動化
三 具体の実践を積み上げるマネジメントによる学校経営

校長の仕事は、結果を出すことであり、成果を確認することにある。そのために、企画した方策を実行するにあたり、ステップを大切にしている。ビジョンとは、方策が実行され、成功したときに最終的に実現されている状態であり、その方策を実行する根拠としてある目指す状態を分かりやすく描いたものである。ビジョンをときに率先垂範し、熱意をもって、いろいろなときや場面を活用して定着させている。方策(手段)ではなく、ビジョン(目的)のレベルでの訴えが必要である。

そのために、細かな(一年後二年後などの達成状態などの)経過目標を示し、成果や課題を共有したり、賞賛したり、見直したりすることが求められる。常に状況を見える化し、見直しながらマネジメントを構成して共有しているところである。

1 学校経営プログラムの活用(調査分析)短期取組確認(学年分掌実践)評価(改善)とPDCAによる学校経営管理

2 具体の成果や課題状況の校内共有や外部発信(説明した責任)

3 当該年度における教育課程の実施状況の評価改善 等

四 成果の確認

各種調査や検査、アンケート、児童実態などの適切な分析の全体共有により、教職員が課題を明確に捉えることができるようになり、意識してその課題解決に取り組むようになる。また、中期的短期的な学校経営ビジョンに基づく学校経営を意識して進めることで、学校教育目標や目指す子供像の実現に向けての見直しをもてるようになり、教職員が目標をもって取り組むという実践を適切に評価することにより、成果を求める教育実践を心がけるようになってくる。学校経営プログラムによる短期的なPDCA実践サイクルのスパイラルな積み上げ活用により、教職員の学校経営方針を踏まえた実践意識とともに、チームとしての学校経営への参画意識も高まっていく。保護者や地域、関係者への啓発も含めた学びや気づきの意図的な発信や教育活動、教育状況などに見える化に努めることで、学校教育への理解や関心が高まり、説明責任を果たすための教職員の実践力や指導力などが向上することを期待している。

令和二年度 本校の学校経営について

名寄市・智恵文中 妹尾 洋美

一 経過と現状

- 1 新採用教職員が六割を占めており、協働体制の確立と教員の資質能力の向上が課題となっている。
- 2 平成十一年度より名寄市指定の特認校となっており、全校生徒の四割が、特認生徒として校区外より通学している。
- 3 同じ校区の智恵文小とともに、平成二十九年度より学校運営協議会制度を導入し、平成三十年より小中一貫教育を開始している。

二 小中一貫の教育目標・目指す学校像、本校の年度の重点教育目標等

- 1 教育目標 「自ら学び、未来をたくましく生き抜く智恵文の子」
新しい時代に生きる子供たちの力を育成することをねらいとする新学習指導要領を基礎として、小・中学校の教職員の思いと保護者・地域住民の願いを込めて設定されている。
- 2 目指す学校像 子供たちが主体的に学ぶ学校
学校・家庭・地域が一体となって支え合う学校
教職員がともに学び合い、高め合う学校
- 3 目指す児童生徒像 自ら学び、進んで学習する子（知）
思いやりと豊かな心をもつ子（徳）
粘り強く、心身を鍛える子（体）
- 4 本校の年度の重点教育目標
学ぶ意欲をもち、自らの力で課題を解決することができる（知）
自他のよさを認め、高め合うことができる（徳）
自ら心身を鍛え、健康的な生活を送ることができる（体）

三 年度の重点経営方針

- 1 コミュニティ・スクール、小中一貫教育の取組の充実
- 2 目標や課題の共有、コミュニケーション、協働を重視した校務の推進
- 3 社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善
- 4 年度の重点教育目標の具現化を図る学年・学級経営の推進
- 5 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の工夫と努力
- 6 教室や職員室・教具室など校舎内外の日常的な美化・整理整頓の推進
- 7 子供や保護者、地域住民の信頼に応える教育公務員としての自覚の向上や服務規律の厳正な保持
- 8 諸帳簿及び文書管理の徹底
- 9 年度の重点教育目標と関連を図った自己目標の設定
- 10 学校力向上に関する総合実践事業における学校の検証改善サイクルの実質化・迅速化の取組の推進

四 年度の重点教育目標の達成状況（第一学期）と今後に向けて

- 1 「知」の達成率：六八％
目標値を十分に達成している項目は、学習規律の徹底である。家庭学習の習慣化は、教務部学習係が中心となり、生徒に振り返りを通して効果的な学習について見直させる取組を始めている。
- 2 「徳」の達成率：七二％
教職員が生徒のよいところを認めるということについて、最もよい結果が出ている。どんなときでもいじめは許さないという指導については、全教職員が一丸となり、徹底していく必要がある。
- 3 「体」の達成率：七五％
重点教育目標の根幹となる基本的な生活習慣の育成は、家庭・地域と一体となり推進している。昨年度の課題であった粘り強さについては、子供一人一人に、何事も最後までやり遂げる経験を積み重ねて身に付けさせる。

凡事徹底・前向き・笑顔の学校経営

弟子屈町・弟子屈中 木村 郁夫

一 はじめに

本校は、弟子屈の中心校として生徒数一三六八人、八学級（特別支援学級二学級を含む）、教職員数二二人の規模である。教育目標である「生活の向上に役立つ学力を身につけよう」「人と自然を思いやる心を持つよう」「強い身体と正しい心で結びあおう」の実現のため、学校・家庭・地域が一体となった教育活動に取り組んでいる。生徒はとても素直で落ち着いた学校生活を送っている。部活動や地域の少年団等で活躍する者も多い。また、今年度は合い言葉として「凡事徹底 ビー・ポジティブ！ ビー・スマイル！」を掲げた。新型コロナウイルス禍にあつて世界中が先の見えないう厳しい状況下にあるが、当たり前のようにやらなければならないことをしっかりと行うこと、何事も前向きに考えて行動すること、そしていつも笑顔でいることを周知した。

二 生徒の課題と今年度の重点

現状における本校生徒の課題は以下の四点である。

- 1 家庭学習の時間が短いこと。
- 2 読書の習慣づけを行うこと。
- 3 TPOをわきまえた正しい言葉遣いと、態度・行動をとること。
- 4 やらなければならないことを進んで行う自主性は身に付いているが、その場その場での判断が必要な主体性を育むこと。

学校課題である「明確な夢や目標を持ち、その実現に向けて主体的に学び続ける生徒の育成」を目指し、次の三つの重点を立てて各教育活動を推進している。

- 1 社会で活きる力の育成、明確な夢や目標を持ちながら、社会の変化に対応していく力を育むために、主体的な学習や活動に取り組む生徒の育成を目指す。

- 2 豊かな人間性の育成、道徳教育や読書活動の充実を図り、豊かな心を有し内面に根ざした道徳的実践力を自ら育み続ける生徒の育成を目指す。

- 3 健やかな体の育成、食育を含めた健康教育の充実を図り、自己の健康に留意し主体的に体力・運動能力の向上を図る生徒の育成を目指す。

三 具体的な取組

- 1 教職員の学校経営参画意識の高揚

(1) 学校経営方針を分かりやすい表現で作成するとともに、「チーム弟中」の意識づけと、それぞれのもち場で自分の力量を十分発揮できる校内体制を組織した。

(2) 効率的な校務運営として、「朝打ち」「職員会議」「フォルダの作成」による諸会議のペーパーレス化、及び事前入力と閲覧可による共通理解の迅速化を図った。また、各定期テスト後にリトライ・テストを実施し、本番で失敗しても更にもう一度チャンスを与えることで、生徒の学習意欲向上とアフターフォローの充実を実現させた。

- 2 授業改善と教師としての力量アップ

(1) 校内研修の充実を図るため、「課題提示」から「まとめ」までをやりきる授業づくりの推進、「見通す・振り返る」学習活動の徹底、一人一回以上全員必修の校内授業研の実施、そして副担任による学級道徳、学年道徳の実施を進めている。

四 おわりに

校長が年度当初に提示する学校経営方針には、学校教育目標の具現化と学校課題の解決に向けて取り組むべき項目が、多岐にわたって掲げられている。その中から重点を更に絞り、分かりやすく紐解いて何度も説明し、PDCAのサイクルに基づいて検証していくことが大切であると考えられる。実際の学校運営に当たっては、教頭を中心に、教職員個々の仕事に対する有用感と達成感を大切に、学校経営参画意識の高揚を図ってきたい。

自己肯定感を育む学校経営の在り方

札幌市・篠路中 岡田直也

一 はじめに

私は本校に今年度着任した。前任校長から、「地域も生徒もしつかりしている。しかし、生徒は自身を過小評価し、自己肯定感の低い傾向が強い。」と引継を受けた。そこで、これまでの経営方針を引き継ぎつつ、自己肯定感を育むことに主眼を置いて経営方針を策定することとした。

ただし、今年度については、新型コロナウイルス感染症対策のため、生徒の安全・安心、学習機会の保障を最優先しつつ取り組むこととなった。

二 学力の向上について

(一) 学習に係る生徒の自発的な取組を推進する指導の充実

授業の組み立てや教授方法だけではなく、評価方法（算出法ではなく）を交流し、各教師がそれをシェアすることで、生徒自身が「何を頑張れば良いのか」が分かる評価を目指したい。

(二) 教育活動における特別な支援・配慮について

実技試験や発言等の指名について、不安の強い生徒に寄り添い、評価規準を改めて確かめ、身に付けさせたい力について、人前で表現する場面以外にも、評価する方法を含めるよう努めたい。

三 命に関わる指導及びゲーム・ネット依存や不登校の対応について

(一) 生徒がつながることのできる人数を増やすこと

生徒が関わりをもつことのできる大人を一人でも多くもてるように、教職員自らアウトリーチ的な関わりをもつことやそのスキルアップにつながる研修に努めたい。

(二) 失敗回避を求めず・促さず、意欲的に挑戦する人づくり

失敗の繰り返しを叱責せず、生徒個人の生育背景や特性を鑑み

た適切な助言を行うことにより、生徒が次への工夫や挑戦に意欲的に取り組むことができるよう努めたい。

(三) 将来に向けての自立を主に考えた不登校支援

登校や授業参加など学校生活に対して消極的な生徒に対しては、不安解消を主眼に置き、生活環境や生育背景のアセスメントを丁寧に行い、生徒個々に応じた支援に努めたい。

四 従来の危機管理の見直し

(一) 真の備えとは何かをあらためて検討する

東日本大震災の津波、北海道東部胆振地震によるブラックアウト、新型コロナウイルス感染症など未曾有の経験をもとに、これまでの備えを検証して改善することに努めたい。

(二) 有事シミュレーションを丁寧に行い、備えること

避難必要時、生徒自らの意思・判断で、声を掛け合いながら、整列よりも避難開始を何よりも優先し、移動開始や移動速度をいかに上げて避難するかを考えることのできる生徒を育てたい。

五 校長室運営を居場所の「か所」として

生徒たちは担任教諭をはじめとした教職員、保健室、心の教室やカウンセラーなどに関り、中学生として思春期特有の悩みを乗り越えていく。ボランティアさんや空き時間教職員が対応しているが、増加する生徒の相談に対して絶対的な教職員数は不足しているため、校長室を機能させることを模索している。

(一) 校長室の壁に落書きボードを設置

昼休み、放課後に開放し、ベニヤに白く塗装した落書きボードを設置し、ストレスコーピングとつながり感の確保を期待している。

(二) 不登校生徒への積極的なアウトリーチ

年度末の校長による進級・卒業面談に加えて、年度初めから保護者を含めて面談活動を進め、きっかけづくりとして一定程度の成果をあげることができている。

論考

心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ生徒指導

豊かな心を育む、学校・家庭・地域との連携

豊富町・兜沼中 黒木敏郎

一 はじめに

本校は、利尻・サロベツ国立公園の北端に面し、広大な丘陵地帯にある小中併置校である。昨年、小学校は一・二・三年、中学校七・三年を迎えた。児童は小学生四人、中学生四人で全校児童生徒八人が学ぶ。今年度小規模特認校の認定を受けた。児童生徒は明るく、純朴で礼儀正しい。学習規律は定着しており、落ち着いた学校生活を送っている。保護者・地域住民の教育に対する期待は大きく、子供たちを地域の宝として大事に育てている。学校が地域コミュニティの中核を担っており、地域にとっても大切な存在にもなっている。

二 生徒指導の基本方針

- 1 学校目標、各指導計画の共通理解のもとに、一致した協力体制で小中一貫した指導に当たる。
- 2 各自の役割を自覚のもと、生徒理解に努め、集団の一員として自己を高め合う指導にあたる。
- 3 長所の発見、励ましを基本に、優しさと厳しさのけじめある指導に努める。
- 4 家庭・地域および関係諸機関との連携を図り、関連を重視した指導に努める。
- 5 学級・学年活動の充実を図り、学級、学年に基盤をおく児童生徒会活動を推進する。
- 6 児童生徒会活動の充実を通して集団行動を身に付けさせ、自主的に活動できる態度を育てる。
- 7 日常生活における保健安全指導の推進と育成に努める。

三 豊かな心を育てる具体的な取組

- 1 学校の取組
- 朝会、職員会議での児童生徒交流 ○教育相談、教科相談の実施

○QUの活用 ○道徳の授業参観の実施 ○一日防災学校、避難訓練の開催 ○ミニ縁日の開催 ○特別参観日の開催 ○臨時休業中にZOOMを活用した朝の会、健康観察、授業の実施

2 児童生徒の活動

○あいさつ運動、新入生歓迎会、卒業生を送る会、いじめ防止標語の作成といじめ撲滅宣言(中学校)、長期休業明けの読書交流会。児童生徒会主催レク、小学校で行う夏休み自由研究発表会に中学生参加。

3 PTAの取組

○PTA広報誌の作成 ○サマーフェスティバル、秋の運動会、冬の運動会の企画・運営(参加者を幅広く呼び込む) ○小規模特認校座談会の開催

4 地域の取組や協力

○学校運営協議会の開催 ○兜沼地区合同大運動会の開催

四 おわりに

本校は、へき地にある小規模の学校である。児童生徒数が少なく、集団性を学ぶには、厳しい環境にあるが、保護者や地域は子供たちのことを大切に見守ってくれている。今年度から特認校となり三人の小学生が新たに本校に通うことになった。昨年まで一人で生活していた五年生に、後輩ができた。五年生の児童は先輩から学んだことを後輩たちに教え、見守りながら生き生きと学校生活を送っている。自由研究発表会のように小学校五年生と四年生が中学生、教員が見守る中で、司会を最後まで立派に務めた。中学生からたくさんの拍手をもらっていた。小学四年生が挨拶でこう言った。「中学生が読書交流会で立派に司会をしていたのを見て、勉強して今日頑張ることができました」と。小中併置校の良さをしっかりと感じた。子供たちの心にしっかりと寄り添いながら、学校・家庭・地域が連携し、心豊かな優しさあふれる子供たちに成長できるように児童生徒と心と心をつなぐ教育活動を展開していきたい。

スキル習得とその活用を基盤とした

生徒指導の充実

浦臼町・浦臼中 杉田 嘉雄

一 はじめに

本校は、昭和四十五年に、浦臼中学校・鶴沼中学校・晩生内中学校の三校が統合した今年度五〇周年を迎える全校生徒三九人の小規模校である。真面目で素直な生徒が多く、自然豊かな環境に育った子供たちが元気づく登校している。その反面、幼い頃からの固定化された人間関係の中で成長してきているので社会体験の不足や対人的な表現力、コミュニケーション能力に課題がある。

二 本校の取組

(一) 生徒指導の充実

- ・ 生徒指導の三機能を活かし丁寧で組織的な指導を推進
- ・ 正しい判断力や実践力を基盤としながらより良い人間関係をはぐくむピア・サポートの考え方を取り入れた指導

- ・ Q・Uテストやその他客観的な資料等を活用した生徒理解の充実
- ・ 校内外の危機管理・安全教育の推進

(二) 道徳教育・特別活動の充実

- ・ 道徳教育推進教師を中心に道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度の育成
- ・ 指導と評価の一体化
- ・ 道徳の授業公開
- ・ 自分のこととして落とし込める授業の展開
- ・ 各種行事のねらいの達成を踏まえながら、望ましい集団活動を通じて人間形成を図る教育活動

(三) 総合的な学習の時間における汎用的な能力の育成

- ・ IT・ゲストティーチャー等を活用した指導方法の工夫

- ・ ICT機器を駆使したプレゼンテーション活動
- ・ 個の考えを更に深めるための集団における討議活動の充実

(四) 特別支援教育の充実

- ・ コーディネーターを中心に生徒の実態・特性を踏まえたインクルーシブ教育の推進
- ・ パートナーティーチャー制度や巡回相談の活用による専門的視点からの生徒理解

- ・ 他校腫との連携を深め、情報交換やきめ細かな取組・対応

これらの取組全てに、『アクション・シンキング・チームワーク』の実践を取り入れ、まずは行動を起こす、困れば考える、それでもうまくいかなければみんななどと一緒に話し合う。これらを本校教育の重点として未然防止と早期対応に取り組んでいる。僻地小規模校にありがちな高校進学後における大集団での悩みやミスマッチを少しでも未然に自ら対策できるようスキルアップを目指している。

本校は生徒数が少ないので授業中でも学校行事の取組の中でも、班や学級、全校生徒の前で発言することが多い。その意味では様々な役割に当たる機会に恵まれており、人前で話すことについては慣れしている。しかし絶対的に多くの人間(何百人以上)に囲まれる機会などはなく、そんな環境で話をするかもしれない。将来どのような場面でも自分を失わず、考えをしっかりと発言できる生徒の育成が課題となる。

三 おわりに

日本型教育の功罪について語られるようになって久しい。画一化された一斉授業が主体と揶揄されることもあるが、規律正しい全人的な教育を目指してきた主旨は継続すべきと考える。学び手が学ぶことを絶対的に必要だと認識させること、学んだ知識技能を活用する機会を多くつくることを目指して今後の学校経営に邁進したい。

地域総ぐるみで行う教育活動

音更町・駒場中 島村雅樹

一 はじめに

本校は、音更町役場まで5km、1km圏内には保育園・小学校・高等学校が立地している閑静な地域に位置している。地域住民や保護者は本校に対して期待感・信頼感・愛着心が極めて高く非常に協力的である。

今年度、全校生徒は八〇人で通常学級三学級、特別支援学級四学級の構成となっており、生徒たちは落ち着いて日々の学校生活を送っている。

二 コミュニティ・スクールの活動

本校は平成三十年度に、音更町内のモデル校としてCS制度を導入し、昨年度の主な取組は以下である。

(1) 生徒の成長に寄与する取組

① 調理実習

多くの方々にそば打ちを指導されている地域在住者を講師に招いての調理実習で、十勝管内の産物を再確認し、食への関心や興味を高めた。

② 校内駅伝大会

駒場市街地を駆け巡る本大会では、交通安全指導員等の協力のもと、安心・安全に走れる環境が整い、自分とチームメイトのために力走し好成績が続出した。

③ 先輩からの御講話

地域活性化のために活動されている方から歴史と今後に向けての熱いメッセージを聞いたことで、希望をもち、今まで以上に地域のことを思うようになった。



(2) 地域に喜ばれる取組

① 駒場神社秋季祭典

地域全体に装飾される行燈準備と片付け作業を手伝い、高齢化が進んでいる地域の方々から喜ばれた。また、神輿担ぎにも参加し、地域の行事を盛り上げた。

② 駒場地区清掃・草取り

通学路や交通量が多い道路のゴミ拾いや草取りをすることで、地域をきれいにしただけでなく、生徒自身の公共意識の高揚につながった。

(3) 伝統芸能の継承

① 駒太鼓

昭和五十一年に有志の熱意によって設立された駒太鼓を音更駒太鼓保存会の方に教えていただき、駒場夏祭りや参観日で披露し、来校者から喜ばれた。

② 駒踊り

大正五年に活動が始まり、平成十二年には町の指定文化財に指定された駒踊りを経験者から学び、神社秋季祭典で奉納され、文化財への関心が高まった。

三 終わりに

音更町では、令和四年度までに町内全一七校で学校単位のコミュニティ・スクールを導入し、その後、中学校単位への収れんを目指している。本校も昨年度から中学校区での導入に向けて校区の小学校四校との協議を続けているが、各地域の実情が異なり、関わりが難しい現状がある。また、今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため地域の諸行事も中止の事態となり、連携・協働も足踏み状態が続く。しかし、地域とともに歩む学校づくりのためには、立ち止まっては行かない。従前の取組の踏襲にとどまることなく、この時世ならではの連携・協働を模索し、行動に移していく必要がある。今後もこの恵まれた環境に感謝しながら、生徒たちの健やかな成長を願い、地域の期待にも応えていきたい。



主体性を育てる教育活動

紋別市・紋別中 可児幹博

一 はじめに

本校は、雄大なオホーツク海の青と、大山の緑の間に広がる南ヶ丘の丘陵に建ち、発展を続ける紋別の街並みを見渡す場所にある。学校教育目標を「学びを未来につなぐ」、今年度の教育目標達成のためのキーワードを「実感」として、全校生徒二二三三人を職員はもちろん、いつも温かく御協力をいただいている保護者の皆様や、優しく生徒たちを見守り様々御支援をいただける地域の皆様とともに紋別市の未来を担う人材育成に取り組んでいる。

二 生徒指導の方針

本校の今年度の方針は「主体的に行動できる生徒を目指して」とし、経験によって実感をもち、自主的な行動を体験し、主体的に生活を創造できる生徒の育成を目指している。

1 具体的な指導の視点

- (1) 目指すゴールを持ちつつ、それぞれの段階に応じた指導
- (2) 学級活動を基盤にルールとシステムの構築
- (3) 全ての前提となる信頼関係を大切にし、親和的関りと楽しみがある学校生活の構築
- (4) 自分や集団が成長した実感を持てるような適宜の評価

2 これまでの取組の経緯

表現や使われている言葉には差はあるが、中学校を卒業するまでに「主体性を持つ」「主体的な行動ができる」生徒の育成を目指して、学級づくり・学年づくりを行うことで、かつての荒れを乗り越えてきた経緯がある。(学年目標やスローガン、学年通信のタイトルにも反映されている。)いわゆる「紋中スタイル」といえるような、「活発な話し合い活動を基盤とした自治的諸活動」「文化的諸活動の充実」、その前提としての「暴力性の否定と平等性の確保」、

そのピークやエンドとしての「運動会」「学校祭」「三送会(卒業式)」を通して、生徒の主体性を育み、所属感・充実感を育む指導が行われて成果をあげている。

3 学校としての指導仮説

(1) 「主体的に取り組む」主体性とは、「自らの意志で判断し責任を持って行動する姿」、具体的には「当たり前のことに疑問を持ち、自分たちの手で自分たちの生活を創り上げる」姿であり、「すべきことが明確でなくても、試行錯誤を重ねて最後までやり遂げる姿」である。

(2) 「自主的に取り組む」自主性とは、「自らの意思で率先して行動する姿」、具体的には「当たり前のことを当たり前に取り組む姿」「すでにやるべきことが明確となっている事柄に対して、自分から取り組む姿」である。また、自主的に行動することができてから、主体的に行動できるようになる。

(3) そのためには、考え方や行動基準を身に付ける必要があり、様々な手段・場面で経験・挑戦させることが大切となる。様々な手法・技法・取組方と、成功・失敗を含めて「実感」を伴って経験することで「当たり前」の線引きができ、二年生では自分から(自主的に)、三年生になれば創造的な(主体的な)行動になる。

三 おわりに

学校の教育活動を軸として生徒に主体性を身につけさせるためには、当たり前のことであるが全職員、保護者、地域と目標を共有しながら全教育活動を通じて取り組まなければならない。そのためには今後、学校運営協議会が肝となることは間違いない。また、決して新たな取組を行う必要はないと考える。どの学校にもこれまで大切にしてきた学校文化があるはずである。続けてきたことを否定するのではなく、これまで積み重ねてきた様々な学びそのものが主体性を育んでいるという価値づけを行うことが校長として大切な視点であると考える。

校長のビジョンの中でそのことを明確に打ち出し、自信をもって全教育活動に取り組ませることが重要と考える。

論 考

心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ体験学習

コロナ禍に対応した、地域とつなぐ体験学習

旭川市・東陽中 尾崎 朋子

一 はじめに

本校は生徒数三四三人、普通学級数一〇、特別支援学級数六の中規模校である。保護者はサラリーマンが多く、教育への関心が高い。学校の教育活動への理解もあり、協力的である。生徒は明朗で落ち着いた生活を送っており、学校行事等にも積極的に取り組み、部活動の加入率も高い。学力はある程度の水準を維持しており、自己肯定感も高い。

二 本校の取組

本校はこれまで一年生は地域の方を招いて地域交流学習を行い、二年生は職場体験学習を行ってきた。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、高齢者や乳幼児とのふれあいを控えるとともに、少人数での実施を余儀なくされた。そのため、今年度は感染防止対策を講じながら、例年とは違う方法での体験学習を実施することとなった。ここでは、昨年度と今年度両方の取組を紹介させていただくこととする。

(1) 地域交流学習（一年生）

① 令和元年度

校区在住の方を講師に招き、「心肺蘇生法」「マジック」「書道」「ロシア語」「写真」「華道・茶道」「けん玉」「キンポウール」「着物教室」「手話」「ラップニング」「ギター」「手芸」の一二講座を開設し、生徒が希望する講座を受講する活動を実施した。

② 令和二年度

市の「あさひかわ子ども学び人材リスト」と「あさひかわ出前講座リスト」を活用



心肺蘇生法

(2) 職場体験学習（二年生）

① 令和元年度

販売業、製造業、医療関係、保育園、学校、理美容関係等三二の事業所に受け入れをお願いし、職場体験を実施した。

② 令和二年度（上級学校訪問）

理美容関係、IT関係、医療関係等、七校の専門学校において一四の講座を開設していただき、体験を含めた学習を実施した。

(3) 家庭科の授業における取組

① 令和元年度（幼児とのふれあい体験授業）

一般社団法人「旭川ウェルビーイング・コンソーシアム」と旭川市が共同で実施している事業「私の未来プロジェクト」の一環として、妊娠や出産、子育てについて〇〜三歳児の赤ちゃんとのふれあいを通し、命の大切さや命を育くむことの楽しさや責任について学んだ。

② 令和二年度（和装授業）

地域から講師を招き、和服の歴史や特徴等を知るとともに、浴衣の着方を学んだ。

三 終わりに

コロナ禍における体験学習のあり方について試行錯誤した一年であった。校区だけでなく、旭川市を広く「地域」と捉え、気づいたり学んだりしたことを「活かした知性」として育てていきたいと考える。



和装授業



理美容専門学校



海外の文化

体験活動を通じた伝統芸能「久遠神楽」の継承

せたな町・大成中 清水勝也

一 はじめに

檜山管内に所在するせたな町は平成十七年、旧大成町・旧瀬棚町・旧北檜山町の三つの町が合併し誕生した町である。久遠神楽はその旧大成町の伝統芸能であり、その伝承に北海道大成高等学校（現在は廃校）が取り組み、様々なイベントで披露されていたものである。しかし、合併に伴う閉町と大成高校の廃校を機に存続が危ぶまれたのである。そこで、当時の大成町立大成中学校の職員が自校の生徒に久遠神楽を体験させ、伝統を継承していくと考え、久遠神楽保存会と協力し合い、指導体制等を整え、中学生に取り組ませるに至った。

二 取組の具体

1 ねらい

・様々な場面で、地域に披露することによって地域住民を励ます活動をを行う。

・自分たちの手で、上級生から下級生へ継承する活動を行う。

・これら二点を通して生徒に自己存在感、自己有用感を育てる。

2 教育課程上における久遠神楽の位置付け

「総合的な学習の時間」（練習・発表や披露）

一学年／二九時間 一学年／三〇時間 二学年／三〇時間

3 地域社会とのつながり

当地区に在住する久遠神楽保存会の方々を本校にお招きし、

・久遠神楽の歴史についての講話

・演舞や衣装の着付けの指導

をしていただき、久遠神楽の知識を深め、演舞の完成度を高める。さらに生徒による演舞披露を通して、より一層学校と地域とのつながりを深める。

4 年間活動計画（通常時における）

(1) 五月、二・三年生による話し合い。薙刀・刀・杵・鐘・太鼓の五つのパートの割振り人数の決定とリーダー等の選出。

(2) 二・三年生の模範演舞後、全校生徒での話し合いを設け、新一年生が五パートいずれかを選択。

(3) 三年生のパートリーダーの指導のもと練習を開始。（先輩から後輩への伝承活動）

(4) 久遠神楽保存会の方々の一回目の指導・講話。

(5) 六月、せたな町大成区太田地区の「太田神社宵宮祭」で初披露。

(6) 久遠神楽保存会の方々の二回目の指導・助言。

(7) 九月、大成区敬老会での披露。

(8) 十月、本校の学校祭の演目として発表。

その場で三年生の引退セレモニーの実施。

(9) 十一月、せたな町町民文化祭芸能部の演目として全学年で出場。

三 おわりに

※但し、今年度に関しては様々な制約等があったことを申し添える。

今後の生徒数の推移は、令和四年度の二四人をピークに、一八人→二二人→二一人→九人と減少し、一つのパートを一人で担当し、先輩から後輩への伝承活動ができにくくなるなど久遠神楽への取組も困難な状況になることが想定される。しかしながら、先人の様々な努力によって代々受け継がれてきたこの伝統芸能を体験活動を通じて継承させることが、地域を支える担い手としての学校の役割であると確信して、末永い存続を願っている次第である。



異年齢集団や障がいのある生徒との交流を生かした体験学習

北斗市・石別中 鏡 晃

一 はじめに

本校生徒の半数は特認校制度を利用して校区外から通学しており、人との関わりが得意でない生徒も少なくない。現在、体験活動は子供たちの豊かな人間性の形成に重要であることが指摘され、体験活動の機会を創出することが求められている。そのため、本校は地域にある多様な教育資源を活用して意図的・計画的に体験学習を創出し、教育課程に位置付けて不断の評価・改善に努めている。

本校の体験学習は異年齢集団や障がいのある生徒との交流や対話、共同学習を継続的に実施できる環境に地域の特色がある。

二 地域の特色を生かした体験学習

1 四者合同行事

四者合同行事は町内会、保育園、小学校、中学校で行われる行事である。行事には運動会、文化祭、餅つき祭りがある。生徒にとつて、これらの行事は保育園児、小学生、地域住民との交流を深め、地域の一員としての自覚を養うことのできる大切な行事となっている。生徒は企画、準備、運営に励み、協働を通して達成感や自己有用感を味わっている。

2 職業体験学習

本校ではキャリア教育の一環として、総合的な学習の時間に職場体験学習を行っている。生徒は実際の職場で仕事を体験したり、質問したり、自分で調べたりして新聞形式にまとめ発表している。生徒には、働くことの意義について考え、さらに自分の将来について深く考えるよい機会となっている。今年度からはキャリアパスポートの活用を導入した。

3 ゆうわ交流体験

本校は毎年恒例の行事として、人と関わる力を身につけることを

目的に、敬老の日を前に地域在住の高齢者を学校に招いて交流会を開催している。生徒は高齢者と一緒にレクリエーションや会食を楽しみながら、他人を思いやる気持ちや気遣うことの大切さを学んでいる。

4 広域防災訓練

毎年九月一日、防災の日、本校は地域住民とともに広域防災訓練を行っている。当日は災害を想定し、地域住民が学校へ避難してくる。生徒は受付や誘導、非常食の配布など、それぞれの役割を果たしながら互いに助け合うことの大切さを学び、災害に対する意識や関心を高めている。生徒と地域住民は外部講師による応急手当の体験学習も受講している。

5 JOI交流

地域にある養護学校の生徒と相互に学校を訪問し合い、ミニ運動会、ゲームや合唱などで交流や共同学習を深めている。本校生徒には、同じ社会に生きる人間として、相互理解を図り、共に助け合い、支え合って生きることの大切さを学ぶよい機会になっている。

その他に、本校ではぶどう苗植え、老人クラブとの地域清掃、小中連携海浜清掃、花壇整備、福祉体験、ヨガ体験など、ものづくり・生産活動、ボランティア活動、教科指導の体験学習を積極的に取り入れている。

三 おわりに

本校に転入学した生徒には登校日数の増加や元気に活躍する場面の増加が見られることから教育成果を看取することができる。とりわけ、異年齢集団や障がいのある生徒との交流は生徒の変容に大きく影響していると推察される。今年度は新型コロナウイルス感染症対策で内容の変更、延期や中止になった体験学習もある。今後、体験学習は環境に順応する形で進化させ、感染症対策下で持続可能な学習に改善することが急務である。同時に、本校の体験学習には自然体験が含まれていないため、多様性を推進する観点から、その創出と教育課程への位置付けも今後の課題である。

地域に根ざす『だて学』

伊達市・光陵中 田 仲 英 明

一 はじめに

伊達市は一八六九年、亘理伊達家臣団が開拓以来、一五一年を数える。道内有数の田園都市として、今日まで堅実に歩んできた。また、「北の湘南伊達」と称される温暖な気候であるため、他の地域からの移住者も多い。市内小中学校を中心に二〇一八年、現教育長が地域に貢献できる人材を育てる「だて学」を提案し、全市を挙げて推進している。

二 本校の特色

本校は伊達中学校の生徒数の増加によって、昭和五十四年に分離独立した学校であり、開校四二年目を迎える。開校時より、自ら理想を希求し鍛練する気概を育てることに力を入れてきた。その伝統は、三魂(志・青雲・鍛)に重きを置く『青雲』教育として、受け継がれている。昭和五十年代には、生徒数五〇〇人余を維持していたが、その後生徒は減少の一途を辿り、二〇〇人を割る時期もあった。しかし、近年、関内中・有珠中・長和中との統合により生徒数が増加し、本年度は二二学級(含特別支援学級四)、生徒数二五五人となった。また、近年の学校の雰囲気は、穏やかでまとまりがあり、素直で明るい生徒が中心となっている。

三 本校の「だて学」の取組

1 一年生の取組「伊達市の地域調べ」(総合的な学習の時間)

生活・産業・文化・福祉・教育の五テーマについて、グループで課題を決め、調査活動を行った。

「生活」 伊達市民の生活を守る消防署について

「産業」 伊達野菜・道の駅で人気の珍しい野菜について

「文化」 伊達で盛んなスポーツ・健康増進事業について

「福祉」 福祉の町 伊達・障がい者福祉について

「教育」 伊達の食育について・食育センターの施設について

2 二年生の取組その一「道内の他地域について、学ぶ」(宿泊研修)

見学地である北海道開拓の村にて、五つのテーマ(西洋技術・ふ

るさと調べ・仕事・環境・民家)ごとにコースを決め、北海道発展の歴史を探った。

また、札幌市内自主研修では、伊達市の知名度調査を実施し、課題探求をした。道内、道外、海外在住の方々に、①伊達市を知っているか②伊達市の何を知っているか③伊達市は地図上でどこにあるか④伊達市に対してどんなイメージをもっているかを質問し、回答をまとめ、伊達市の今と未来について考察した。

3 二年生の取組その二「市内職業体験」(総合的な学習の時間)

伊達市内で事業を営む方から、「働く意義、社会人として必要なこと」と題して講演いただき、生徒は職業観や勤労意欲をもってから、職業体験学習に臨んだ。生徒各々が体験先の事業所の方に「伊達市で働く魅力」、「伊達市で事業を展開している理由」を質問し、勤務地としての伊達市の魅力について考える機会となった。

4 三年生の取組「道外の他地域を学ぶ」(修学旅行)

今年度初の試みとして、修学旅行中に、姉妹都市宮城県亘理町にある亘理中学校と交流し、「未来のふるさと」について、同年代と意見交流をする企画を立てていた。北海道と異なる文化に触れ、多様な価値観で物事を捉えるための貴重な機会としたいと考えていたが、今年度はコロナ禍のため、中止となった。

しかし、亘理町の郷土資料館の見学は実施し、伊達市開拓の歴史を学び、ふるさと伊達の理解を深める一助とした。

仙台市内自主研修では、市内、県外、海外在住の方々に、北海道伊達市について、二年生の札幌市での調査と同様に、前述の項目①④を質問し、伊達市の未来をより広い視点で考察した。

四 おわりに

伊達市は、地球規模の視野で考え、地域の視点で行動できる「グローバル」な人材や、これからの地域社会を担う人材の育成に向けたキャリア教育及びふるさと創生教育の一環として、「だて学」の実践を進めている。共に学び育ち合う絆を強くし、地域が人を育み、人が地域を創る社会の実現のために、故郷を愛し、故郷の未来を切り拓く生徒の育成を今後も目指していきたい。

豊かな心と創造性を涵養する親善交流事業

釧路市・音別中 成瀬剛慈

一 はじめに

本校は釧路市西部に位置する、全校生徒二九人の小規模校である。音別町時代（現在は釧路市）の平成五年より徳島県鷲敷町（現在の那賀町）との親善交流事業が続いている。

夏季は本校生徒が徳島県を訪問し、冬季は鷲敷中学校生徒が北海道を訪れる。交流を通して、「異なる環境への理解や親睦と友情を深めるとともに、体験的な学習を通して見聞を広め、郷土愛や愛校心の高揚を図る」ことを目的としている。

二 交流事業の取組

1 夏季交流（七月下旬）

七月下旬、本校二年生が徳島県を訪問する。交流初日は、鷲敷中学校生徒会主催の歓迎会が開かれる。互いに作成した名刺交換やプレゼント交換を行い、その後は保護者の方々による地元食材を使った夕食をいただく。夕食交流会後は、地元愛好家による阿波踊りの演舞（後半は生徒も共演）や地域の方々による筒花火の打ち上げが行われ、学校・保護者・地域が一体となった歓迎を受ける。

二日目は両校二年生生徒が徳島県南部牟岐地区の海へ出かけ、牟岐自然の家でシュノーケルの使い方をプールで指導していただき、その後インストラクターの案内で、海水浴、磯の生物観察を行う。多くの本校生徒にとって初体験となる海での活動後、四国八八ヶ所霊場の二一番札所「太龍寺」を訪ねる。空海を開基とする七九三年創建の伝統ある建造物の佇まいに触れる貴重な機会となる。

2 冬季交流（二月下旬）

一月下旬、鷲敷中学校二年生生徒が北海道を訪れ、夏季同様、今

度は本校生徒全員が、セレモニー会場の飾り付けなどの準備を行う。本校主催の歓迎セレモニーでプレゼント交換、音別地区に伝わる「落祭り音頭」を演舞する（地域落祭り音頭保存会の協力により事前講習を受けている）。その後、生徒全員でスケート体験（昨年度は地元アイスホッケーチームのひがし北海道クレインズの選手による指導、デモンストレーションの協力を受けた）を行い、本校保護者による北海道の食材を用いた夕食交流会で更に親睦を深める。

二日目は、スキー体験教室を実施し、ほぼ未経験者の鷲敷中学校生徒を本校生徒が技術サポートする。その後は「阿寒国際ツルセンター」で特別天然記念物のタンチョウを間近に観察し、その後お別れセレモニーを行い交流事業が終了する。

三 終わりに

本年度はコロナ禍により、夏季・冬季交流とも中止となったため、リモートによる対話の交流を行うこととなった。約三〇年続く交流は、互いの地域で深く認知され、活動を支え合う雰囲気十分に醸成されている。

大きく風土・文化が異なる地域を相互に訪問し、双方生徒が探求課題の解決を目指して深く語り合う経験は何物にも代えがたい。今後も更に保護者・地域との連携を密にし、地域全体で交流活動を支え、次代の地域の担い手となる生徒の育成に努めたい。



テーマ

学校教育の今日的な課題から

～更なる学校力の向上を目指して～

1 小中一貫教育二年目（前半）の取組

～コロナ禍においても、小規模の強みを生かして～

幕別町立糠内中学校 田中 幹也

2

社会で貢献できる資質をもった生徒の育成を目指して

～社会に開かれた教育課程編成を通して～

稚内市立潮見が丘中学校 塩崎 由雄

3

体力、運動能力・運動意欲の育成に向けた取組

～運動することの楽しさや喜びを味わうことや

地域との連携を通じて～

釧路市立鳥取中学校 土江田 亮一



小中一貫教育 二年目（前半）の取組

「コロナ禍においても、小規模の強みを生かして」

幕別町立糠内中学校 田中 幹也

一 はじめに

「CSとオリンピック年の町」幕別町は、十勝地方の中央部から南部にかけて位置する人口約二万六、〇〇〇人の町である。人口の推移は、地区により差があるものの、全体としては多くの自治体と同様に減少傾向にある。まちづくりとしては、農業をはじめとした活気に満ちた産業振興、災害時の情報提供等の防災・減災の取組、スポーツ交流やアスリートの育成等を大きな柱としている。

中学校は五校（生徒数七二二人）、小学校は九校（児童数一、三二二人）である。

幕別町では小中一貫教育とコミュニティ・スクールに力を入れており、中学校区を区域とした五つの併設型小中一貫校（学園）がある。昨年度から本格的にスタートしており、今年度は二年目となる。

本校が属する糠内（ぬかない）学園は、中学校の本校（生徒数一七人、教職員一三人）と、道路を挟んで向かい合っている糠内小学校（児童数二一人、教職員数二一人）、約六kmの距離にある明倫小学校（児童数七人、教職員数三人）の三校で構成され、合わせて

児童生徒数四五人、教職員数二七人という小規模の併設型小中一貫校である。「機動性」という小規模の強みを生かして学園経営に取り組んでいる。

二 糠内学園の取組

小中一貫教育の本格的なスタート年度であった昨年度は、学園の経営方針及び組織体制を整備し、小中共通のスタンダード（糠内学園スタンダード）を作成するなどの取組を進め、小中合同行事にも取り組んできた。

今年度は、小中合同運動会や地域清掃ボランティア、学園教育実践交流会、対面での学園運営協議会などを予定していたが、新年度早々から新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、全てが中止を余儀なくされるなど、小中一貫教育の推進にとって困難な状況となり、それは執筆時の現在（十一月月上旬）においても続いており、冬を前に更に懸念が広がっている状況である。

このような状況の中、児童生徒の学びを保障する小中一貫の取組を前進させるために、コロナ禍においてもできることを探った。児

童生徒の交流が制限される中、小中の教員間でできる取組に重点を置くこととして次のような取組を行った。

1 学園経営方針のアップデート

新しい生活様式、新学習指導要領の本格実施、GIGAスクール構想による学びの質の向上など、昨年度から大きく変化した社会状況や教育施策を踏まえ、臨時休校中の四月・五月にかけて、昨年度の経営方針のアップデートを行った。

(1) 学園教育目標

子供たちが大人になって生きていく社会（二〇三〇～五〇年）を見通して、どのような力が育っていれば幸せ（ウェルビーイング）に生きていけるのか、その視点でアップデートした。

○ 「次代を拓く」～郷土糠内に誇りをもち、自分をよりよく変え、他者や地域とつながり、次代を切り拓く力を育てる教育の創造

(2) 目指す児童生徒の姿

昨年度のものを、よりイメージを共有しやすい具体的な姿として見直した。

- 学びに目的・価値を見いだし、主体的に取り組む児童生徒
- 自分や身の回り、地域の幸せのために自ら提案し、行動する児童生徒

(3) 育成を目指す資質・能力

昨年度は、目指す児童生徒の姿に含む形で示していたが、より明確に示すことにした。二つの大きな資質・能力を掲げ、下位区分として、より具体の資質・能力を四つずつ、計八つを設定し、授業等の教育活動において教員と児童生徒が意識できるようにした。

- 変える力
 - ① 自己管理能力
 - ② 自己変革力
 - ③ 継続力
 - ④ へこたれない力
 - ⑤ 共感力
 - ⑥ 声かけ力
 - ⑦ 当事者意識
 - ⑧ 企画力



2 組織体制のアップデート

昨年度の「学習指導部会」、「生徒指導部会」などの組織体制を、育成を目指す資質・能力に対応して、「『変える力』部会」、「『つながる力』部会」、そして管理職を主として構成する「経営部会」にアップデートすることにした。

(1) 「変える力」部会（一〇人）

「変える力」を「学び」で育成する視点と、「生活」で育成する視点という二つの視点から取組を検討する部会である。

「学び」の視点からは、「学習スタンダード」の改善や目指す児童生徒像である「主体的に提案し、行動できる」力を育む指導過程の工夫、さらにICTを活用した指導の工夫等について取組を進めている。また、「生活」の視点からは、「生活スタンダード」の改善等について取組を進めている。

(2) 「つながる力」部会（一一人）

小学校と中学校とで「タテ」でつながる視点と、小学校間や地域・社会と「ヨコ」でつながる視点という二つの視点から取組を検討する部会である。

「タテ」の視点からは、発達段階に応じた育成したい資質・能力の具体化や総合的な学習の時間の系統的なカリキュラムの開発、小中乗り入れ授業等について取り組んでいる。「ヨコ」の視点からは、小小乗り入れ授業、地域や社会の教育力を活用した教育活動について検討している。

(3) 経営部会

管理職と事務局校の事務職員の六人で構成される部会で、上記の「『変える力』部会」と「『つながる力』部会」を支え、進行管理を行っており、月に一度の定例会を開催している。月によつては、部会の部長も同席した拡大会議を開催し、各部会との連携を図っている。また、危機管理マニュアルやいじめ防止基本方針など、学園として統一する規定等を作成する場でもある。

3 学園評価のアップデート

評価の再考にあたっては、方針として①学園共通、②教職員・保護者・児童生徒共通、

③育成を目指す資質・能力に正対、の三点を意識してアップデートを図った。評価回数については前期、後期の年二回とした。

評価内容については、大きく「学校経営」に関する評価と「教育活動」に関する評価、計二項目と記述欄で構成した。

(1) 学校経営の評価

評価の観点については、「目標・方針」「組織体制」「地域・社会との協働」「危機管理」「働き方」の五つのカテゴリ、一四の設問項目を設定した。保護者については、「目標・方針」「地域・社会との協働」「危機管理」の三つのカテゴリのみ評価していただき、児童生徒については評価しない。

(2) 教育活動の評価

個々の教育活動の取組について評価するのではなく、育成を目指す資質・能力について、児童生徒に身に付けさせたかという成果について評価することとした。評価項目は、育成を目指す資質・能力に合わせ八項目とした。教育活動の評価については、保護者及び児童生徒も全項目評価する。



4 具体の取組〜コロナ禍でできること

五月中に経営部会において学園経営方針のアップデート案を作成し、六月にかけて各校の教職員による検討、七月に運営協議会（書面会議）の承認を得て、八月から各部会での取組が始まった。

執筆時（十一月上旬）までの取組の中から二つを紹介する。

(1) ICT活用研修（「変える力」部会）

喫緊の課題となつているICT活用に関する教員研修を小中合同で二度開催した。

一回目は八月に、JICA北海道（帯広）の協力を得て、オンラインによる国際理解に関する授業を子供の立場で体験した。

二回目は十月に、米国の日本語講師の協力を得て、オンラインを授業で行う際のスキルや推奨コンテンツについて研修を行った。

また、ICTは日常的に活用することが重要との認識から、学園内でクラウド型グループウェア（G suite for Education）を試行導入し、学園の全体会をオンラインで実施したり、ファイルを共有したりしている。学校によつてはClassroom機能を活用して、朝の打合せや職員会議を行っている。乗入れ授業（「つながる力」部会）十月から十一月にかけて、小学校六

年生が中学校に来校し、外国語科の単元（七時間配当）を中学校の英語科教諭が指導している。今後、中学校美術科教員による小学校五・六年生の図工指導も計画している。

三 最後〜成果と課題

小中一貫教育の二年目前半の成果としては、目標、目指す姿、資質・能力がより焦点化、明確化され、ベクトルを合わせた教育活動を推進できる体制がより整備されたことである。

一方、課題としては、経営方針のアップデートの作成過程について、関係者全員で共有・協議する場を十分に実現できなかったことである。そのため、今後の具体的な教育活動において成果を出すことで共通認識を深めることが重要だと考えている。

コロナ禍にあつて、リアルなつながりながらもにくい状況の中、地域の小・中学校がどのように連携して子供たちの学びや成長を共に保障していくか。形だけではない実質的な小中一貫教育を目指していきたい。





社会で貢献できる資質をもった生徒の育成を目指して

社会に開かれた教育課程編成を通して

稚内市立潮見が丘中学校 校長 塩崎 由雄

一、はじめに

宗谷管内は、一〇市町村からなる北海道の一四ある振興局の一つである。日本最北端の地として宗谷岬がある他、管内は利尻島、礼文島の二つの島を有しており、毎年多数の観光客が訪れる。また、利尻昆布やホタテ、タコ、毛ガニなどの水産業が盛んであるほか、酪農業も管内至る所で営まれている。

一〇市町村の合計で人口はわずかに六万三、〇〇〇人ほどとなり、この一〇年で約四万人減少した。ともなう昭和後期に九六校あった小中学校は現在五三校と、毎年のように閉校が相次いでおり、学校規模もほとんどが小規模校化している。本校は普通学級七、特別支援学級三、全校生徒二三五人の中学校であるが、この規模で宗谷管内一規模の大きい中学校となる。

そんな状況ではあるが、児童生徒はここ数年落ち着きを見せ、人間関係形成能力が十分などの課題はあるものの、どの市町村でも穏やかな学校生活を送っている。また、保護者・地域も学校に対して協力的であり、自治体単位で子育てにおける協働の取組が長年

展開されている地域でもある。

特に稚内市においては、昭和六十年に「子育て平和都市宣言」がなされて以来、「家庭教育力」「地域の教育力」「学校の教育力」を、相互理解、相互作用の取組を通じて、市民全体で高めていくことを目指した「子育て運動」を展開している。

二、生徒指導課題解決につながる教育課程

中学校において来年度より本格実施される学習指導要領では、子供たちが予測困難な社会の激しい変化に対応し、未来社会を切り拓けるようにするために、より一層確実に資質・能力を育成することが求められている。

しかし本校では、明るく素直な面をもつ生徒が大多数である一方、ひ弱さを抱えている生徒も多く、ここ数年不登校生徒が増加傾向にある他、別室登校の対応をとっている生徒も増えている。学習指導要領が目指している未来社会を形成する主体者として生徒を育てようとする中、困難さを抱えている実態があり、生徒の人間力向上は急務の課題である。

こうした課題を解決するために、平成三十年年度、本校で取り組んだ教育課程編成作業で

は、以下の点を重視した。

I 社会に開かれた教育課程につながる学校経営重点目標の設定

社会に開かれた教育課程をつくり上げるためには、学校の目指すべきものが、社会のニーズとマッチしていなければいけない。本校では、「社会で貢献できる資質をもった生徒の育成」を重点目標に定め、この目標を軸に教育課程編成を進めた。

II キャリアの視点を軸にした教育課程編成

学校経営の重点目標を更に具体的なものにするために、キャリアの視点を重視し、文部科学省で示されているキャリアの基礎的・汎用的能力をベースに、「人間関係の力」「自立の力」「課題解決の力」「人生設計の力」の育成を小目標に設定し、教育活動の充実につなげた。

III 各教育活動を相互に作用させる教育課程

本校生徒の課題解決をはかる教育課程編成につなげるために、各教育活動の計画を相互に作用させることを意図した。教科において資質・能力の基礎を身につけ、総合的な学習の時間で更に資質・能力を深化

させながら、特別活動を「社会の縮図」として位置づけ、身につけた資質・能力を土台に集団による課題解決に取り組みさせること。また、道徳科においては、道徳的諸価値の自分事化に力点を置きながら、資質・能力を生き方との関連で深める指導を重視した。

このように、全教育活動の関連を重視する計画を作成した。このことを通じて、様々な生徒指導上の課題に対し、取り立てた指導で対処するだけでなく、教育課程の整備による教育活動の充実をはかりながら、ひ弱さに起因する様々な課題を解決し、生徒の人間性を育てる視点を大事にした。

三、具体的な取組

①平成三十年度の取組

平成三十年度の主な流れであるが、年度当初に、学校経営の重点目標を示し、重点目標の具体化として、学校の学びと社会とのつながりを重視するキャリアの視点を中核に位置付ける経営方針を提示した。さらに、一年をかけて重点目標達成につながる教育課程編成に取り組んだ。

一学期は徹底して学習指導要領の研修に取り組んだ。学習指導要領の全体像をつかむ研修、主体的・対話的で深い学びを手法とした教科指導のあり方を学ぶ研修、教科で学んだ力を生かして学びの主体性を育む総合的な学習の時間の研修、学校行事の精選も含みながら

らの実社会の縮図としての特別活動の研修、次年度から道徳科の教科書が採用されることによる道徳科の授業研究や評価の研修など、計五回の研修に取り組んだ。

二学期に教育課程編成作業に入った。校長として組織と日程の概略案を示し、教務主任と研究主任を教育課程編成作業のリーダーに位置づけながら編成作業を開始した。具体的には以下の組織体制で作業を進めた。

- (1) 管理職と教務主任、研究主任による教育課程推進会議
- (2) 管理職、教務主任、研究主任（兼教科指導リーダー）、総合的な学習の時間部会のリーダー、特別活動部会のリーダー、道徳科部会のリーダーによる全体調整会議
- (3) 各部会

・管理職と教務主任による年間の教育活動推進計画

・教科部会による資質・能力育成を目指した年間指導計画の書式見直しと各教科の計画作成

・総合的な学習の時間におけるテーマ設定と年間指導計画の作成

・特別活動における行事の大幅な精選と学級活動、生徒会活動、学校行事の指導重点作成

・道徳科における全体計画、年間指導計画、別葉の作成及び三学期の教科書研究推進計画案作成

こうした組織体制で重点を置いたのは、各

教育活動の教育課程編成を役割分担主義にしないことである。各部会の実施前後で必ず全体調整会議を開催し、進行状況を交流した他、随時検討内容の方向性にずれが生じていないかを相互に確かめあった。結果としてどの部会も、学校経営の重点目標である「社会で貢献できる資質をもった生徒の育成」につながる教育計画を作成することができた。

②平成三十一年度・令和元年度の取組

平成三十一年度・令和元年度は、平成三十年代に行った教育課程を実践化する年度であった。各教育活動において、学校経営の重点目標「社会で貢献できる資質をもった生徒の育成」に直結する活動が展開された。その中でも特徴的な活動になったのは総合的な学習の時間である。総合的な学習の時間においては、「自己の人生設計」と「地域貢献活動」という二つのテーマを設定して探究学習を進めたが、特に地域貢献活動においては、あらかじめ決められたボランティア活動に取り組むのではなく、生徒自らが「稚内に貢献できることは何か？」といった課題設定をして取組を進めた。そのことで、生徒の地域に対する見方が大幅に深まった他、質の高い課題解決学習により、学びの主体性が育ち、地域の方々との頻繁な関わりから、人間関係形成能力の向上にもつながった。詳細は令和二年一月三日付の地元紙「日刊宗谷」にまとめられている。記事の概略は次のとおりとなるので、参照していただきたい。

潮見が丘中

生徒が考えた地域貢献活動

潮見中では今年度から、総合的な学習の時間の中で「自分の生まれた故郷のためにできることは何か」という課題設定をし、取組を進めている。生徒たちが自分の住む稚内市で抱えている課題を探し出し、その課題解決につながるような地域貢献活動を学年毎に実施。同校では地域や社会の人たちとコミュニケーションをとり、自分たちで決めた活動をする取組を通して、「社会で貢献できる資質をもった生徒の育成」を図りたいとしている。

同校は昨年度に教育課程を精査。古紙回収など決められた活動をするのではなく、生徒たちがより主体的に地域や社会と関わり、探求的な学習につながるものとしてこの取組を始めた。自分の地域に住む住民にインタビューし、稚内市の課題を見付けるための情報収集を行い、地域貢献活動を行うことにより、生徒たちが稚内市との関わりを理解するとともに、地域のために積極的に行動しようとする態度を育てるもの。

一年生は、稚内の人口が減少していることから、観光客に沢山来てもらおうと、グルメや観光スポット、イベントの三つを発信する「稚内いいとこブック」を作成。グルメの欄には、市内飲食店で食べられ

る海産物などの稚内独特のメニューやソフトクリームなどの紹介。観光スポットは、宗谷岬を中心にホタテの貝殻でできた白い道などを写真入りでまとめた。イベントは、夏季と冬季に分けて見どころを紹介。観光客増加につながれば、としている。その他、学校そばの公園で遊ぶ子供たちのために自動販売機の設置をお願いする署名活動も展開した。（令和二年度に実際に設置された。）

「稚内には鹿が多すぎる」のが課題とした二年生。鹿肉を使った特産品を開発。初めは鹿肉バーガーや鹿肉入り肉まん等三品を考えて試食会を開催。その中からチーズタツカルビに鹿肉を使用した「チーズタツシカ」（生徒たちが命名）に決定。レシピを市内飲食店三〇店舗に置いてもらい、鹿肉の消費量を増やすための呼びかけを行った。

各種産業の人手不足は全国各地で深刻な問題。三年生は稚内の仕事の魅力を伝え、地元就職を推し進めようとパンフレットを作成。基幹産業である水産や農業、介護、建設、事務職など様々な職種の仕事内容をまとめたほか、そうした仕事の魅力も合わせて掲載したパンフレットを一二種類作り、将来について考え、稚内で働く人が増えればと、市内小中高大の二三校にパンフレットを届けた。

今年度の活動を振り返り、同校は「社

会や地域と関わりながら取り組む今までにない活動。地元稚内について知ることができ、社会に出たときに活かせる力が身につくと思う」とした。

四、成果と課題

① 三点の成果

(1) 他の教育活動との関連を重視した中で総合的な学習の時間における特色ある活動が創造され、それが他の教育活動にも効果的にフィードバックされた。

(2) 全教員による組織的教育課程編成作業が、教員一人一人の学校経営重点の理解を深め、組織的動きを機能化させた。

(3) 保護者・地域に期待される活動が展開され、社会に開かれた教育課程の具現化と生徒の人間力向上につながる事ができた。

② 三点の課題

(1) 引き続き生徒の成長に直結する保護者・地域との連携をより一層模索していかなければならない。

(2) キャリアの視点に基づいた教育計画をもとに、小学校や高校との連携を強化していかなければならない。

(3) 稚内市の子育て運動発展に寄与する学校の教育力向上をより一層目指していかなければならない。

こうした視点をベースに、生徒の人間力向上を目指して、今後も教育課程の改善・充実につなげていきたいと思う。



体力・運動能力・運動意欲の育成に向けた取組

「運動することの楽しさや喜びを味わうことや地域との連携を通じて」

釧路市立鳥取中学校 土江田 亮一

一 はじめに

本校は、釧路市市街地の西方に位置し、昭和二十二年に鳥取小学校の一部を仮校舎として発足。鳥取町立鳥取中学校として開校し、今年で七三年目を迎えている。開校当時は、全校生徒二四七人の六学級編成、三教室で二部授業という形でスタートし、独立校舎への移転、昭和二十四年の釧路合併に伴う移転などの変遷を重ね、釧路市立鳥取中学校として現在の場所に校舎を構えている。昭和五十年代に一、五〇〇人以上の全校生徒を数えたが、少子化の影響か生徒数も徐々に減少となったものの、現在でも、生徒数六一〇人、二二学級（特別支援四学級を含む）、教職員数五〇人の大規模校である。

校下の小学校は三校あり、釧路市としても珍しい全ての卒業生が本校に入学する校区となっている。また、ここ数年、小中の連携も進んできており、出前授業やノーメディアデーなど、四校が協力して取り組めることを増やしてきている。

校訓「翼よ、斗星をめざせ」のもと、「文武両道、生徒の瞳が輝く釧路一の中学校」を

目指し、学校、家庭、地域が一体となった教育活動に取り組んでいる。また、生徒はともも素直で落ち着いた生活を送るとともに、部活動や地域のクラブチームに所属する生徒が例年約八〇%以上を占め、朝の登校時から部活動終了の下校時まで、校内には心のこもった気持ちの良い挨拶が響き渡っている。

二 釧路市における体力向上の取組

釧路市では、教育大綱や教育目標において、心身の健康や体力の保持増進を図ることを掲げている。また、二〇二二年度までの釧路市教育推進基本計画の中に、「体力・運動能力の向上」を基本方策の一つとして掲げるなど、体育授業や体育的行事における活動を通じて、運動の楽しさや喜びを実感させ、生涯にわたって、進んで外遊びや運動に親しもうとする意欲を高める体育活動の充実に取り組んでいる。

全国体力・運動能力、運動習慣等調査においては、北国全般的に結果が思わしくない中において、釧路市教育委員会や各校の取組の成果もあって、平成二十八年度調査の「新体

力テストの体力合計点」が経年で比較して改善の傾向が顕著であったため、結果の報告書において実践紹介された（資料1）。その後、調査結果の改善傾向が継続的に見られ、小学校や中学校男子においては全国平均を上回るか同水準の結果となっている。

資料1



力合計点において、男女とも全道平均を上回っており、男子においては全国平均と同様

三 本校の体力向上の課題と実践

1 現状と課題

スホッケー選手によるゲストティーチャーなどの事業に加え、「釧路市体力向上アクションプラン」（資料2）の周知による各校別の「体力向上計画」の作成など、本市・各校別の体力向上に関わる具体的な取組を進めている。

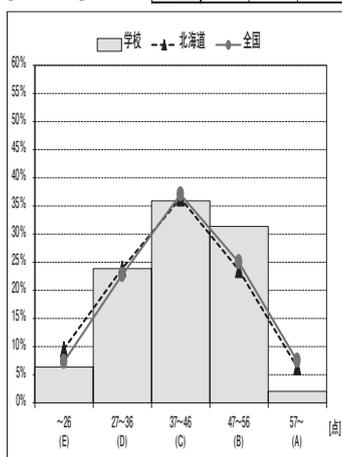
資料2



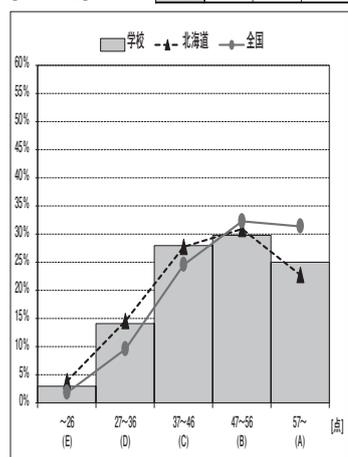
釧路市教育委員会としては、「一校一実践」の充実、歩くことの推奨をはじめとする家庭での運動習慣づくりへの支援、小学校における関係団体と連携した「ダンス講習会」や地元アイ

資料3

	学校	北海道	全国	
【総合評価】 男子	平均値	41.42	40.72	41.69



	学校	北海道	全国	
【総合評価】 女子	平均値	47.44	47.14	50.22



の結果だった。一方で、総合評価Aの割合が低く、種目別に見ると「50M走」、「ソフトボール投げ」の種目において、全国・全道平均を下回っており、『走る』と『投げる』運動能力、「素早さやスピード」、「運動を調整する力」について課題が見られた。

また、運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツは大切なものと考える生徒の割合が全国平均より高い傾向が見られた。部活動の加入状況に関しては、男女ともに運動部への加入率が高く、女子においては文化部への加入率も全道・全国平均以上である。一方で、体育の授業で十分に体を動かして

いると感じている生徒の割合や体育の学習を自分の生活の中で生かそうとする生徒の割合が全国平均値より低い等の授業づくりに関わる課題が見られた。

2 体力向上に向けた実践

釧路市教育委員会における市全体の分析として、中学進学後（中学卒業後）に、「授業以外で運動やスポーツに親しむことが大切であると理解している」割合も高くなっていることから、これまでの保健体育の授業改善や、体力向上に係る各学校の取組の成果が表れてきていると、捉えている。

本校の調査結果等から見て、高い加入率である部活動での課題となる運動能力への対応、加入していない生徒の体を動かす機会の提供、さらには、「運動が好きと感じる」ことができるような体育の授業改善が必要であると捉え、本校の体力向上計画を策定した。

(1) 盛んな部活動

全校生徒の八割以上が加入している部活動では、アイスホッケー部の一度の全国優勝、野球部の平成二十九年年度の全国三位をはじめとして、多くの部活動が好成績を収めるとともに精力的に活動する素晴らしい伝統が築かれ継承されている。日々の活動の中に、課題が見られた「素早さやスピード」、「運動を調整する力」を念頭に置いたトレーニングの工夫に取り組んでいるところである。

(2) 保健体育における授業改善

保健体育の授業においては、生徒が運動の楽しさに十分に触れる機会を生み出すとともに、授業以外の時間においても、生徒が運動習慣を確立するための取組を進めていく必要がある。そのため、体育の授業において、「できた」「楽しい」という小さな成功体験のある授業づくりを目指すとともに、運動の楽しさや喜びを味わうことができるカリキュラム構成や授業のはじめや終わりに補強運動を行い、年間を通じて体力の向上が実感できる授業づくりに取り組んでいる。

また、授業以外での運動する機会の提供として、昼休み中の屋外での運動を推奨しており、夏冬を問わず多くの生徒が活動している。

(3) 地域の伝統芸能とのかかわり

校名のとおり、本校及び校区の地域は、鳥取県鳥取市と大変つながりが深い。地域では鳥取市の伝統芸能である「シャンシャン傘踊り」を継承する『鉧路鳥取かさ踊り保存会』



が活動しており、保存会の皆さんの協力を得て、本校でも傘踊りに取り組んでいる。素早さやスピードに直結する活動ではないが、生涯にわたって体を動かすことにつながり、地域と学校が協力する貴重な機会となっている。



四 終わりに

これからの先行きの見通せない時代を生きるためには、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力の知・徳・体をバランスよく育てることが大切である。

コロナ禍の中、心に不安を抱える子供たちが増えている。学習面の不安もさることながら、ステイホームで体を動かさなかったことも大きな要因である。本校でも、学校再開後に新入生の部活動の加入を行ったが、例年より二〇%近く加入率が下がった。

また、放課後や休日の時間が忙しい中学生の時期に、生涯にわたって運動に親しむ態度

を育成し・実践させていくことは、意図的に取り組まなければ難しいこともある。今後、部活動での取組や授業改善、そして家庭・地域など様々な場面を通じて、運動習慣と健康についての理解はもとより、子供たちの運動時間を確保し、運動することの楽しさや喜びを味わう機会を創出していきたいと考えている。

令和2年度「鉧路市立鳥取中学校体力向上計画」																																																																		
<p>① 令和元年度 体力・運動能力、運動習慣等の状況</p> <table border="1"> <tr> <th colspan="2">① 実技（体力・運動能力）調査結果</th> </tr> <tr> <td colspan="2">※（ ）は全国との比較</td> </tr> <tr> <td>体力合計点</td> <td>49.7 (-0.3) 47.5 (-2.5)</td> </tr> <tr> <td>総合評価がC以上の生徒の割合 [%]</td> <td>69.6% (-0.2) 82.9% (-5.6)</td> </tr> <tr> <td>男子</td> <td>女子</td> </tr> <tr> <td>49.7 (-0.3)</td> <td>47.5 (-2.5)</td> </tr> <tr> <td>69.6% (-0.2)</td> <td>82.9% (-5.6)</td> </tr> </table>		① 実技（体力・運動能力）調査結果		※（ ）は全国との比較		体力合計点	49.7 (-0.3) 47.5 (-2.5)	総合評価がC以上の生徒の割合 [%]	69.6% (-0.2) 82.9% (-5.6)	男子	女子	49.7 (-0.3)	47.5 (-2.5)	69.6% (-0.2)	82.9% (-5.6)																																																			
① 実技（体力・運動能力）調査結果																																																																		
※（ ）は全国との比較																																																																		
体力合計点	49.7 (-0.3) 47.5 (-2.5)																																																																	
総合評価がC以上の生徒の割合 [%]	69.6% (-0.2) 82.9% (-5.6)																																																																	
男子	女子																																																																	
49.7 (-0.3)	47.5 (-2.5)																																																																	
69.6% (-0.2)	82.9% (-5.6)																																																																	
<p>② 令和2年度 実施計画</p> <table border="1"> <tr> <th colspan="2">① 目標（数値目標）</th> </tr> <tr> <td colspan="2">生徒の体力向上、運動習慣の改善に向けた目標</td> </tr> <tr> <td>※1 全体カステットの総合評価がC以上の生徒の割合</td> <td>75.0% 80.0%</td> </tr> <tr> <td>※2 「1学期における授業以外の運動やスポーツの合計時間が1時間未満」と回答した生徒</td> <td>6%未満 22%未満</td> </tr> <tr> <td>※3 「保健体育の授業では、十分に体を動かしている（そう思う）」と回答した生徒</td> <td>80.0% 73.0%</td> </tr> <tr> <td>※4 「保健体育の授業では、十分に体を動かしている（そう思う）」と回答した生徒</td> <td>32.0% 47.0%</td> </tr> <tr> <td>※5 「保健体育の授業では、授業後の夜にウチやヤサキやそう思う」と回答した生徒</td> <td>72.0% 66.0%</td> </tr> </table>		① 目標（数値目標）		生徒の体力向上、運動習慣の改善に向けた目標		※1 全体カステットの総合評価がC以上の生徒の割合	75.0% 80.0%	※2 「1学期における授業以外の運動やスポーツの合計時間が1時間未満」と回答した生徒	6%未満 22%未満	※3 「保健体育の授業では、十分に体を動かしている（そう思う）」と回答した生徒	80.0% 73.0%	※4 「保健体育の授業では、十分に体を動かしている（そう思う）」と回答した生徒	32.0% 47.0%	※5 「保健体育の授業では、授業後の夜にウチやヤサキやそう思う」と回答した生徒	72.0% 66.0%																																																			
① 目標（数値目標）																																																																		
生徒の体力向上、運動習慣の改善に向けた目標																																																																		
※1 全体カステットの総合評価がC以上の生徒の割合	75.0% 80.0%																																																																	
※2 「1学期における授業以外の運動やスポーツの合計時間が1時間未満」と回答した生徒	6%未満 22%未満																																																																	
※3 「保健体育の授業では、十分に体を動かしている（そう思う）」と回答した生徒	80.0% 73.0%																																																																	
※4 「保健体育の授業では、十分に体を動かしている（そう思う）」と回答した生徒	32.0% 47.0%																																																																	
※5 「保健体育の授業では、授業後の夜にウチやヤサキやそう思う」と回答した生徒	72.0% 66.0%																																																																	
<p>② 年間計画</p> <table border="1"> <tr> <th>時期</th> <th>保健体育の授業</th> <th>授業以外の取組</th> <th>進捗</th> <th>検証改善</th> </tr> <tr> <td>4月</td> <td>年間進捗計画の実施 ・新リニアージョシ ・基礎練習、運動の基礎、 ・打撃練習</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>5月</td> <td>・基礎練習 ・基礎練習、体力、敏捷性 ・球技、ボールゲーム</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（1-2年） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>6月</td> <td>・基礎練習 ・基礎練習、体力、敏捷性 ・球技、ボールゲーム</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>7月</td> <td>・基礎練習 ・基礎練習、体力、敏捷性 ・球技、ボールゲーム</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>8月</td> <td>・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>9月</td> <td>・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>10月</td> <td>・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>11月</td> <td>・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>12月</td> <td>・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>1月</td> <td>・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>2月</td> <td>・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> <tr> <td>3月</td> <td>・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習</td> <td>・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）</td> <td>・進捗 ・進捗</td> <td>・進捗 ・進捗</td> </tr> </table>		時期	保健体育の授業	授業以外の取組	進捗	検証改善	4月	年間進捗計画の実施 ・新リニアージョシ ・基礎練習、運動の基礎、 ・打撃練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	5月	・基礎練習 ・基礎練習、体力、敏捷性 ・球技、ボールゲーム	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（1-2年） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	6月	・基礎練習 ・基礎練習、体力、敏捷性 ・球技、ボールゲーム	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	7月	・基礎練習 ・基礎練習、体力、敏捷性 ・球技、ボールゲーム	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	8月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	9月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	10月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	11月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	12月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	1月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	2月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗	3月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗
時期	保健体育の授業	授業以外の取組	進捗	検証改善																																																														
4月	年間進捗計画の実施 ・新リニアージョシ ・基礎練習、運動の基礎、 ・打撃練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
5月	・基礎練習 ・基礎練習、体力、敏捷性 ・球技、ボールゲーム	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（1-2年） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
6月	・基礎練習 ・基礎練習、体力、敏捷性 ・球技、ボールゲーム	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
7月	・基礎練習 ・基礎練習、体力、敏捷性 ・球技、ボールゲーム	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
8月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
9月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
10月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
11月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
12月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
1月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
2月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
3月	・球技（サッカー） ・球技、ボールゲーム、持久力、 ・球技練習	・体力 ・基礎練習及びグラウンド ・球技大会（入部発表） ・学年行事（学級懇話会等）	・進捗 ・進捗	・進捗 ・進捗																																																														
<p>③ 評価</p> <p>■ 全体カステット実施結果の分析および課題の把握 ■ 学年行事の進捗状況、実施状況の把握 ■ 授業計画による学校評価アンケートに基づき、体力向上計画による取組の検証を行う。</p>																																																																		
<p>③ 分析（良い点と課題）</p> <p>良い点 ・体力向上計画に基づき、授業計画を策定している。 ・基礎練習を中心とした運動が中心となっており、生徒が多量な運動量に慣れている。 ・学年行事の進捗状況が良好であり、生徒の参加意欲が向上している。 ・学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。 ・学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。 ・学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。</p> <p>課題 ・学年行事の進捗状況が良好であり、生徒の参加意欲が向上している。 ・学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。 ・学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。</p>																																																																		
<p>③ 改善方針</p> <p>○ 学年行事の進捗状況が良好であり、生徒の参加意欲が向上している。 ○ 学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。 ○ 学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。</p> <p>授業以外の取組 ○ 学年行事の進捗状況が良好であり、生徒の参加意欲が向上している。 ○ 学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。 ○ 学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。</p> <p>進捗 ○ 学年行事の進捗状況が良好であり、生徒の参加意欲が向上している。 ○ 学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。 ○ 学年行事における運動競技の開催が予定通り実施されている。</p>																																																																		

第七一回全日本中学校長会研究協議会 和歌山大会提言概要 第二分科会・研究題「主体的・対話的で深い学び」の実現

第七一回全日本中学校長会研究協議会和歌山大会は、令和二年十月二十一日（水）から二十三日（金）までの三日間、全国から二一〇〇人を超える会員の参加の下、和歌山ビッグホールを主会場に開催される予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、誌上発表という形で実施された。「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を大会主題として、全日中提案、地区提案及び主題を踏まえた八つの研究題による分科会の提案を主として、紀要にまとめ発刊された。

北海道からは第二分科会において、和泉 明一校長（札幌市立元町中学校）と小川 満校長（千歳市立北斗中学校）の提案が掲載されているが、ここでは改めて提案の概要を掲載した。

「主体的・対話的で深い学び」の実現

「課題探究的な学習」を取り入れた

授業の充実

札幌市・元町中 和泉 明一

I はじめに

現代社会は、予想を上回る速度で情報の高度化、グローバル化が進む一方、少子高齢化や地域社会の過疎化などの複合的問題が山積し、未解決度も増している。社会全体が過去の経験知のみからでは、変化を予測することが難しく、解決のための対応策も明確に示すことができない。これからの時代に学校教育に携わる者として、解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解ける力を育むだけでなく、高い意欲を持ち、蓄積された知識を活用することができ、情報を主体的に判断することや自ら課題を見だし、その解決を目指す過程で他者と折り合いをつけ、協働しながら新しい価値を創り出していくことのできる人間の育成がその責務であると考ええる。

このような社会状況の中、新学習指導要領で示された「主体的・対話

的で深い学び」の実現に向けては、じっくりとしつかりと子供の資質・能力を育むことはもちろん重要だが、そのための学校教育における授業改善や様々な取組の実践については迅速な対応、失敗を恐れない試行錯誤が求められているのではないだろうか。

私たち校長は、次代を担う子供たちが健やかに学び育つ学校教育の実現のため、情報を共有し共通理解をもって学校経営を進めることが大切である。以上のことを踏まえ、昨年度まで在籍した札幌市立手稲中学校での取組の状況、札幌市教育委員会の施策との関連、札幌市中学校長会の研究推進の取組との関連等を項目として本稿を作成する。

II 学校、地域の状況

1 地域及び学校について

札幌市は日本最北の政令指定都市であり、横浜市、大阪市、名古屋市に次ぐ人口一九六万人を有している。市立小学校が二〇一校、中学校が九九校あり、児童生徒数は小学生約九万人、中学生約四万人である。その中であつて札幌市の西部に位置する手稲地域の歴史は古く、明治初期に北海道開拓を支える交通の要所として開けた手稲村が手稲町となり、昭和四十二年に札幌市に合併。昭和四十七年の札幌市の政令指定都市移行に伴い、旧西区となり、その後の人口増加もあり、平成元年に手稲区

が誕生している。手稲中学校は札幌冬季オリンピックの際にアルペン競技などの会場となった市内で一番高い手稲山の麓にある、生徒数六四五人、特別支援学級を含む二一学級（令和二年三月末現在）の札幌市でも比較的歴史のある開校七四年目の学校である。

2 教職員の状況

手稲中学校の令和元年度の教職員総数は五八人で、教員は三六人である。市教委からは指導方法工夫改善、初任者研修拠点校指導教員、主幹教諭のマネジメント機能強化の三種の加配を受けている。教員の年齢構成は二〇代が三人、三〇代が八人、四〇代が七人で、半数が五〇代以上である。人事異動により若返りを図りたいが、困難な状況は全国共通の課題と考える。

3 本校の課題と主題設定の理由

手稲中学校は、数年前まで、いわゆる「荒れ」の状況にあり、日々の問題行動への生徒指導に追われ、教育活動が停滞していた時期があったことは否めない。そこからの回復に苦労をされた多くの教職員のおかげで、現在校内の状況は大変落ち着いている。全校生徒を巻き込んで行われる、「絆プロジェクト」は、生徒主導による縦割りの活動で、新たな伝統となり、在校生が本校の特徴を語るとき自慢しながら説明することができるほどである。また、増築を重ねた旧校舎は、平成二十四年度に、大きく開放的で設備の整った新校舎となり、環境面の好影響も計り知れない。

一方近年、多様な要因・背景を抱え不登校状況に陥っている生徒が多数いることが本校の最大の課題である。様々なサポート体制を講じているが、不登校生徒の出現率が七%近くになってしまっている。不登校生徒の家庭とは進級、卒業を控えた時期に面談を行っているが、二年連続四〇家庭との面談が必要なほどであった。面談の中で生徒からの言葉は少ないが、最後に共通して語るのは授業中の居場所の無さであった。学力不振からの自信喪失、自己肯定感の低下、授業参加意欲の衰退と、負の連鎖からの脱出が困難になっている生徒が少なからずいるのである。全国学力・学習状況調査の結果は全国平均との比較において大きく下回ることではなく、生徒質問紙調査における回答も、肯定的な意見の割合は

決して低くない。札幌市が独自に行っている調査や学校独自に行っている調査でも同様である。しかし、全体の傾向のみで判断すると、個々の生徒が抱えている問題点が見えなくなる。

III 研究、実践の概要

1 研究の視点

新たな不登校生徒を生み出さず、更に減少させるため、不登校生徒への支援を進めると同時に、未然防止の視点から、「通うことが楽しい学校」を創ることが大切と考えた。その際のキーワードは「居場所づくり」である。知識量のみを問う授業の中で、逃げ場の無い劣等感を感じる生徒がいたとすれば、不登校に気持ちが悪くすることも当然である。学校生活の大半を占める授業の中でこそ、「居場所づくり」に取り組み必要があり、学校体制での授業改善の視点が重要と考えた。

2 研究主題及び仮説

知的に興奮し、興味が本物であれば、生徒はより主体的に深く学ぶ。楽しく授業に参加し、自己実現を果たすためには、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業の実践が大切であり、そのために、「課題探究的な学習」（後述）を取り入れた授業の充実が本校の進むべき目標であると捉え、本研究の主題と設定した。

3 「札幌市学校教育の重点」との関わり

「札幌市学校教育の重点」は幼児児童生徒の発達段階を踏まえ、学校経営や教育課程の編成及び実施等のために重点となる教育内容を札幌市教育委員会が示したものである。札幌市においては、「課題探究的な学習」を「自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する学習」と定義するとともに「札幌市課題探究的な学習推進方針」を策定し、その推進を図っているところである。新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善によって、生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成することが求められている。これは、札幌市が推進してきた課題探究的な学習を取り入れた授業と同様と言える。

(1) 「学ぶ力」育成プログラムの活用
「学ぶ力」育成プログラム(図1)

は、自校の生徒の状況を踏まえて課題を明確化し、重点的に改善するため、その手だて等を定められた様式で作成したものであり、学校HPへ全市内学校・園が掲載している。本校においては、このプログラムの内容は最終的に職員会議で共有されているが、より実効性のある取組となることが課題であった。

(2) 五つのポイントと活用の手順

「学ぶ力」の育成に向け、札幌市の子供の課題改善を図るために「札幌市学校教育の重点」で示された「五つのポイント」(図2)をもとに、学校経営方針への反映や目標・課題の共有等を行うことにより、授業改善に向けた方向付けができた。しかしながら、家庭・地域との共有については今後の課題である。

(3) 「札幌市全体の共通指標」の活用

この共通指標(図3)は、学びに向かう生徒の姿を具体化したもので、校内においても学習状況等を把握・分析し、改善の洗い出しに活かした。また、学校独自のアンケートを実施し、経年の変化を見る際にも役立てた。

(4) 「課題探究的な学習」の充実

札幌市においては、「課題探究的な学習」を「自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する学習」と定義するとともに、「札幌市課題探究的

(図1) 「学ぶ力」育成プログラム



(図2) 5つのポイント

な学習推進方針」が策定され、その推進が図られている。授業づくりや授業後の振り返りを行うなど、教員自身が課題をもち、主体的に解決する姿勢をもつことが大切であるのはもちろんであるが、後述する「六つのセルフチェック」の内容を共有することで授業改善を図った。

4 札幌市中学校長会の研究との関わり

札幌市中学校長会では、昨年度より新しい研究基本主題「新たな未来を紡ぎ、よりよい社会を創る力を育む札幌市中学校教育」を掲げ、七部体制で「教育課程」「学校経営」「生徒指導」「体育・健康教育」「キャリア教育」「施設・設備」「特別支援教育」をそれぞれのテーマとして研究推進にあたっている。校長としての研さんと職能向上を目指し、計画的に具体的な調査と分析を行い、年に一度の全体研修会を開催し、発表及び討議を行っており、各学校の課題解決に役立つ研究が行われている。具体的な研究推進は、初年度に「在り方」を模索し、二年目に「充実」の姿を求め、最終年に向け「深化」を追求していく三年継続研究の形式が取られ、研究推進の方策として、各研究項目と関連するアンケート調査等が行われる。各々がそれぞれ行う調査は詳細な内容であるが故に、負担となる場合もあったが、ここ数年は働き方改革の推進の視点からも十分軽減され、各学校課題に対する気付き、視点の拡大、自校の改善等、様々な点で活かされている。

所属する研究部では「新たな未来を紡ぎ、よりよい社会を創る力を育む教育課程」を研究テーマとして具体的な調査・研究を行っており、校長として自校の教育課程を編成する上で示唆に富んだ研究活動であった。今年度の研究発表の中で提案された、「確かな学びを培う上で、課題探究的な学習の授業づくりの推進」や「課題探究的な学習における適切な評価の小学校との連携と共有化」などは、まさに本校の取り組みなければならない課題を明確化するものであった。

(図3) 札幌市全体の共通指標

5 授業改善に向けた組織的な取組

(1) 六つのセルフチェック(図4)

職員室では、「話し合いが苦手」「協働作業ができない」「基礎学力や家庭学習の不足」といった個々の生徒の課題が語られることが多く、話題を「改善させる指導をしているか」という指導する側の視点に立った内容への切り替えが必要であった。そのため、校内研修会等で、「札幌市学校教育の重点」に示された「六つのセルフチェック」を再確認の上、各自で実施させ、交流のポイントとした。

(2) 特別の教科道徳との関連

令和元年度は、教科の授業改善と同時に、道徳の教科化による評価の在り方についても取り組むべき課題となっていた。道徳の授業改善ポイントとして示された、主体的に考える展開や交流を通して、多様な考え方に接し、自分との関りで理解を深める活動等に関して研修を深める中で、他教科の授業改善についても同じ視点が生かせるのではないかという発言があったのは大きな変化である。

(3) 校種間接続の視点

本校中学校区には、三校の小学校があり、これまで様々な交流は行ってきたが、より積極的に授業交流や合同研修会などを開催し、指導の内容や方法の連続性・系統性を図った教育課程を編成することが求められており、四校合同の教頭・教務主任会を実施した。



(図4) 6つのセルフチェック

IV 研究、実践の成果と課題

1 成果

毎年実施している生徒、保護者対象の学習に関するアンケート結果を経年で見ると、授業改善が少しずつではあるが確実に進んでいる。以下は平成三十年度と令和元年度の比較であるが、特に、改善の意図が回答

に反映したものである。

(生徒回答)

◇先生方は生徒の学力向上のため工夫して授業をしている。

▽肯定的回答、九〇・八%↓九二・六%と上昇

◇授業の分からないことについて先生方に質問しやすい。

▽肯定的回答、七一・八%↓七五・四%と上昇

◇先生方は様々な努力を認めてくれている。

▽肯定的回答、八八・七%↓九一・一%と上昇

(保護者回答)

◇先生方は生徒の能力や努力を適切・公正に評価している。

▽肯定的回答、八〇・五%↓八九・九%と上昇

いずれの項目も、教員の変化が見て取れる結果である。この評価結果は当初教員の中にあつた「何のためにそれをやるのか」「やるかどうか」という疑問を少しでも払拭することができた。

2 課題

教員一人一人のこれまでの経験のみを土台とした授業から脱却し、「課題探究的な学習」を取り入れた授業の充実を目指すときに課題となるのは、やはり授業開発の時間確保である。校内におけるカリキュラム・マネジメントを促進させ、働き方改革とのバランスをとることが大きな課題である。

V おわりに

着任時から、生徒にも教職員にも「チーム」というフレーズを使ってきた。二年間の在任期間を振り返ると、チームの成立のためには、校長が明確なビジョンを示すことで共通理解を図り、構成員のモチベーションを高め、役割分担を上手にマネジメントし、協働が機能することが必要であると思ひ、それを実践してきた。今年度異動となり、前任校の取組を外から俯瞰することにより、さらに現任校にも活かさねばならない課題も見えてきている。令和三年度からの学習指導要領全面实施により、評価の在り方が変わることに對する準備を進めているが、授業が変わってこそその評価、評価に耐えうる授業改善が改めて求められていると思ふ。

「主体的・対話的で深い学び」の実現

組織的な研究体制と

小中一貫教育を通して

千歳市・北斗中 小川 満

I はじめに

主体的・対話的で深い学びの実現については次のような捉え方や視点が重要である。

- 1 主体的・対話的で深い学びは学校教育が重視してきた学びの意味を、学習指導要領において可視化・明確化したものであること
 - 2 主体的・対話的で深い学びとは特定の指導方法やその「型」を意味しているのではなく、授業改善の視点であること
 - 3 授業改善の主たる場面は、総合的な学習の時間だけでなく、各教科等における学習活動であること
 - 4 授業改善を行うに当たって、それぞれの教科等に固有の「見方・考え方」が重視されていること
 - 5 主体的・対話的で深い学びは一単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく単元といったまとまりの中で実現されていくこと
 - 6 基礎的・基本的な知識・技能に課題が見られる場合には確実な習得を図ることが求められること
- つまり、主体的・対話的な深い学びを実現するためには、これまでの教科教育の大きな蓄積を共有し、発展させることを重視しながら、単元というまとまりの中でどう授業を組み立てていくのかという戦略自体としての授業改善が必要だと考える。
- 以上のことを踏まえ、前任校の北広島市立緑陽中学校における実践について提言する。

II 地域、学校の状況

1 地域及び学校について

北広島市は、札幌市と新千歳空港の間に広がるなだらかな丘陵地帯にあり、自然と都市機能が調和した住みよいまち。人口は六万人弱、クラーク博士が日本を離れる際に、見送りにきた学生たちに残した言葉「BOYS BE AMBITIOUS―青年よ大志を懐け」を言った場所や令和五年にプロ野球球団のボールパークができること等でその名が知られている。教育においては、平成三十年年度より市内全ての小中学校で分離型の小中一貫教育を始めている。

緑陽中学校は創立四三年目の住宅地にある中学校で生徒数一〇二人、特別支援学級を含む六学級の小規模校である。「ともに鍛えん、ともに学ばん、ともに支えん、ともに進まん」を教育目標として校区緑ヶ丘小学校とともに小中一貫教育を推進している。また、今年度よりコミュニケーション・スクールとして地域とともにある学校づくりの取組も進めている。

2 教職員について

緑陽中学校の教職員（本務者）は一五人であり、年齢構成は三〇歳代三人、四〇歳代八人、五〇歳代四人とベテラン教員が多い状況である。また、この他に家庭科と美術科の時間講師が一人ずつ、事務補助員、業務主事、特別支援教育支援員、心の相談員、スクールカウンセラー、図書館司書が配置されている。

地域及び本校の課題

開校当時（昭和五十三年）一七七人だった生徒数も徐々に増えていき、昭和六十二年には六〇〇人を越えていた。その後、団地地区の高齢化等により生徒数が減少し、昨年度は各学年単学級となっている。このことにより学校行事の運営方法や部活動の合同チーム等、様々な場面での新たな取組を実施する必要性が出てきている。さらに、生徒はほぼ同じ集団の中で生活をしてきており、適応能力という部分では今以上の向上を目指すことが大切である。

また、今年度より実施の小中一貫型コミュニケーション・スクールとしての取組も学校や地域ともに手探りの状態でスタートしており、他の実践校

での取組を参考に軌道に乗せていかなければならない。

Ⅲ 実践の概要

本校における「主体的・対話的で深い学び」の実現については組織的研究体制と小中一貫教育という二つの視点からいかに授業改善に取り組んできたかを紹介していく。

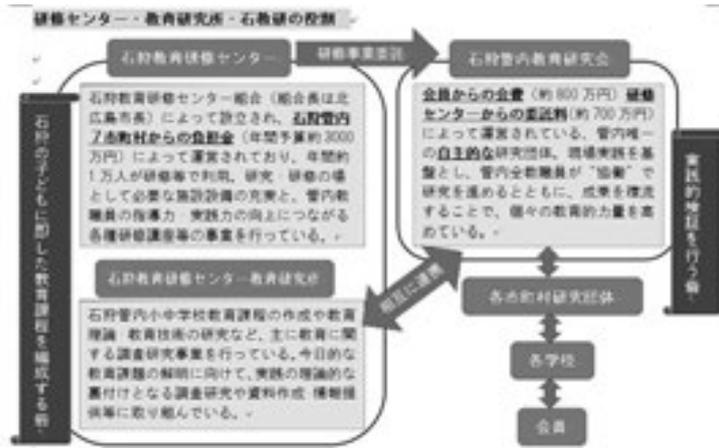
1 組織的研究体制

- (1) 石狩管内の組織的研究体制
管内として広域的な組織的研究体制は昭和二十四年に自主的に設立されたのが始まりであり、教職員の自主性や主体性をもった現場実践が研究を進める原動力となっている。

その中核をなすものが「石狩教育研修センター」「教育研究所」「石狩管内教育研究会(石教研研)」であり、教職員の資質向上や管内的視野での教育の充実発展に成果をあげている。

研修センターは建物の運営と管内教職員の指導力と実践力向上につながる各種研修講座事業を実施している。センターの中には教育研究所があり、センターの事業を実際に行っている。石教研は一九の専門部会、一三の課題部会、二校の学校課題研究の三本柱を中心に、会員・各学校・市町村研究団体と密接につながりながら、管内唯一の自主的な研究団体として、管内全教職員が協働で研究を進めるとともに、成果を環流することで個々の教育的力量を高めている。

教育研究所と石教研はそれぞれ独自の目的と役割をもっているが、



教育課程研究という枠組みにおいて、研究所は各校の教育課程編成のよりどころとなる「石狩管内小中学校教育課程」の編成に取り組み、石教研はその実践検証を行ってきたといえる。

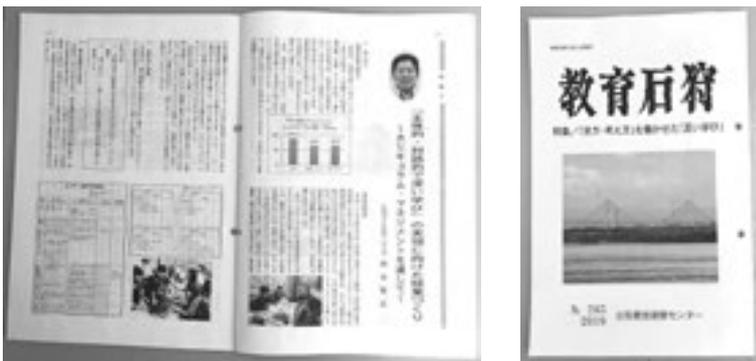
(2) 北広島市内の組織的研究体制

「北広島市教育研究会(広教研)」は、相互に協力して、教育に関する研究と研修を行うことを目的とし、北広島市教育委員会及び市内全教職員で構成された組織である。広教研は年二回の専門部会一斉交流研修会を中心とした専門部会の活動、教育課程や生徒指導の特別研究協議会の活動、実技理論研修会や特別研修会などの研修活動、研究中心校発表会、各事業委員会(文化事業・交流事業・教育機器連盟・特別支援学級合同事業)など、石教研との連携も視野に入れた活動している。

(3) 組織的研究体制における授業改善

前述のように、教科教育の大きな蓄積を共有し、発展させることを重視しながら、単元というまとまりの中でどう授業を組み立てていくのかという戦略自体が主体的・対話的な深い学びを実現するための授業改善だとするならば、石教研・広教研活動における専門部会の取組が、まさにそれに当たる。各教科の見方・考え方を重視し、これまでの積み重ねをベースとしながら現場実践に基づく組織的・協働的な研究が行われ発表されてきたからである。

そして、その授業研究と事後評価を基に提示した個々の実践と各校の研究主題とを関連させながら、各校において新たな実践をつくり上げている。それは会員一人一人に「二人の百歩より百人の一步」「全員で造りあげる『協働』



研究の推進」という意識が働いているからである。

(4) 校長としての働き掛け

学校経営の具体方針（経営戦略）に「教職員の学校経営参画意識醸成とミドルアップダウンの常態化」をあげている。その中で報告・連絡・相談活動の徹底や職員室の雰囲気づくりなどとともに各種研修への参加体制の構築を方策として示している。

また、近年特に若い教職員に見られる組織的研究活動の重要性に対する意識の希薄化対策やベテラン教職員の研究の重要性に対する再確認の意味を込めて、石狩管内組織的研究体制に関するミニ研修を昨年度実施した。これにより、教職員としての研修の重要性と組織的研究体制の独自性を再確認することができ、その後の取組が精力的なものとなっている。

2 小中一貫教育における授業改善

北広島市は、市が掲げるめざす子供像「大志をいだき心豊かにたくましく生きる子供」を実現するため、平成三十年より全ての中学校区で小中一貫教育を推進している。緑陽中学校は小学校一校、中学校一校の施設隣接型の一貫教育である。そしてこの中の学力・体力向上を図る連続した学習活動の充実が授業改善に大きく影響している。

(1) 一貫性のある教育課程の編成

各種調査結果（NRT等）から中学校区での児童生徒の学力や体力等の分析と共有化を図り、それを学校間の年間指導計画の接続と充実に役立てている。特に学習指導の重点化を図った教科系統表を作成し、児童生徒のつまずきやすい学習内



容について長期的視野に立ったきめ細やかな指導の工夫に取り組んでいる。

(2) 学習方法・内容定着に向けた指導

小学生から中学生になった際、指導方法などが大きく変わらないうように、小・中学校の授業スタイル、板書方法、ノート指導などに一貫性をもたせるなど、授業改善に努めている。例えば毎回の授業の目標は青で、まとめは赤で囲む、習熟・振り返りの場面を必ず設けるなどの約束事や朝読書・家庭学習の習慣を付けることは重要な方策としておさえている。

また、中学校教員による小学生への乗り入れ授業や中学校の定期テストに向けた計画づくりとテスト体験も各教科の授業改善に大きく役立っている。

(3) 校長としての働き掛け

学校経営方針作成において、中学校区における「めざす子供像」を小学校と共有し、基本方針の中に「小中一貫教育による九年間の継続した学び」を明確にしている。また、校区スタンダードも経営の具体方針（経営戦略）に盛り込み、教職員に周知徹底している。

さらに、毎月の職員会議で提示している経営プログラムにも小中一貫に関する月別の予定を掲載し、進化管理に努めている。

あわせて重要なのは、教職員の負担感を減らすことである。小中一貫教育においては中学校教員にその負担感を感じる傾向が強い。しかし、小学生に関する働き掛けや取組は先行投資であり、ほぼ全員が数年後に自校の生徒になること、九年間の学びを指導していることへのプライドをもたせることが負担感から充実感への転換につながっていく。



IV 取組、実践の成果と課題

1 これまでの成果

(1) 全国学力調査の経年変化

平成二十七年から過去五年間の正答率の経年変化については下図のとおり。令和元年度からは国語・数学ともにA・B問題が融合された形での実施となっており、多少下がっているが、これまでの授業改善の成果が着実に現れている。

(2) 全国学習状況調査の経年変化

平成二十九年度と令和元年度における同じ質問項目による経年比較。なお、数値では上段が緑陽中の数値、下段が全国平均の数値となっている。

小中一貫教育を始める前の平成二十九年度より昨年度は数値的にかなり上がっている項目が多い。教員の指導体制や生徒との関わり方に関する質問で評価が高くなっており授業改善が進んでいると判断できる。

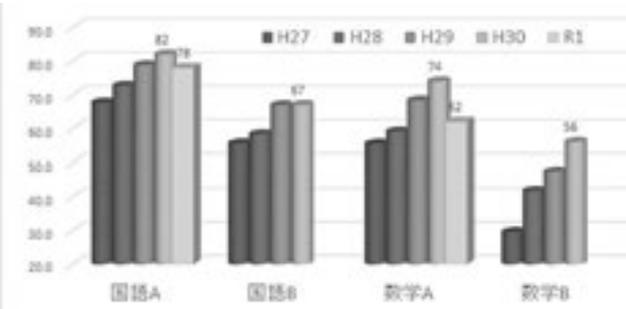
2 今後に向けて

(1) 組織的研究体制について

団塊世代の大量定年時代を迎え、石狩管内が培ってきた組織的研究体制をいかにして引き継いでいくかが一番の課題である。そのためには、モデルアップダウンのシステムを学校運営に著実に反映させることが重要である。

(2) 小中一貫教育について

取組自体が目的ではなく、子供たちの確かな成長に結びつけていくという目的を見失わないことが重要である。そのためには



質問項目	H29	R1
学校に行くのは楽しいと思いますか	73.3	75.0
自分にはよいところがあると思いますか	47.3	45.7
自分にはよいところがあると認めていますか	29.8	28.0
先生はあなたの良いところを認めてくれていると思いますか	43.9	52.0
先生は授業やテストで間違えたところや理解していないところについて分かるまで教えてくれますか	34.5	31.3
ものごとは最後までやり遂げることがありますか	76.6	84.0
先生は授業やテストで間違えたところや理解していないところについて分かるまで教えてくれますか	33.3	35.8
先生は授業やテストで間違えたところや理解していないところについて分かるまで教えてくれますか	42.6	63.0
1, 2年生の時に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分の力で取り組んでいたと思いますか	20.1	37.3
1, 2年生の時に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分の力で取り組んでいたと思いますか	23.4	36.0
1, 2年生の時に受けた授業では、自分の考えを表現する機会では、自分の考えをしっかりと表現していましたか	26.8	29.3
1, 2年生の時に受けた授業では、自分の考えを表現する機会では、自分の考えをしっかりと表現していましたか	17.0	20.0
1, 2年生の時に受けた授業では、自分の考えを表現する機会では、自分の考えをしっかりと表現していましたか	17.1	18.1

アンケートや調査をもとに子供たちの状況を把握し、改善点を見付けていくことを継続していくことが大切である。

V おわりに

主体的・対話的で深い学びの実現にあたっては、指導案どおりの授業を進めるのではなく、突発的な生徒のつぶやきや行動を授業に活かすことも重要だと考える。そのためには、頭の中に多くの引き出しが存在し、その開け閉めを自在にできる教員が理想である。そんな教員の育成を目指し、今後の学校経営に取り組んでいく。

令和二年度の活動及び当面する課題への対応について

事務局長 木村佳子

一 はじめに

激動する国際社会において、我が国では、二一世紀にふさわしい、持続可能な社会の仕組みを構築するため、行財政改革、規制緩和、地方分権などの動きが進行している。教育界においては、一連の教育改革が行われ、新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められるなど、学校教育は新たな変革の時期を迎えている。

私たち校長は、中学校教育の課題を踏まえ、人間尊重の精神に徹し、「社会を生き抜く力」とともに「よりよい社会を形成する力」を育む教育を推進し、生徒・保護者・地域の信頼と期待に応えるため、学校からの教育改革を推進するとともに、業務の明確化・適正化や組織運営体制の見直しと教職員の意識改革による「学校における働き方改革」を推進し、新しい時代に求められる学校づくりに向けて、これまで以上にリーダーシップを発揮し、より一層の充実に努めなければならない。

北海道中学校長会は、「北海道教育推進計画」の基本理念を受け、「教育の質の向上」を目指し、『チーム北海道』として地域・保護者、関係機関・諸団体の御理解と御協力、御支援をいただきながら、本道における教育課題の解決に努めてきたところである。特に新学習指導要領の全面实施と学校における働き方改革の推進に向けて、今後も地区校長会との連携を大切にして活動を推進していかなければならない。

また、東日本大震災や北海道胆振東部地震をはじめ災害等により被災した地域の復興を期し、教育活動の充実や災害の風化防止に向け、引き続き全力で支援するとともに、今後起こりうる災害に対し、能動的に対応できる生徒を育成するため、各地区・各学校の防災教育・安全教育の更なる充実を図る必要がある。

しかし、令和二年度の本会の活動は、令和元年度末に発生した新型コロナウイルス感染症の流行と感染症対策、緊急事態宣言に伴う休校措置により、例年とは異なる対応と決断が求められた。情報共有と連携を掲げ、コ

ナ禍においても教育活動を止めることなく推進していかねばならない。

以上の認識に立ち、北海道中学校長会は、「全日中教育ビジョン」学校からの教育改革（平成二十八年度改訂版）の内容を踏まえ、運営方針並びに活動の重点等に基づいて校長としての主体性と指導性をもち、会員相互の連携のもと本道の中学校教育を推進し、道民の信託に応えるべく活動を推進した。

二 活動の経過

1 各種要請及び要望活動

道教委に対し、以下の活動を行った。

- ・「令和元年度北海道文教施策・予算策定に関する要望書」、新学習指導要領の趣旨を生かした授業改善に向けた教育条件整備と「チームとしての学校」の実現に向けた教育条件整備を柱とした「北海道教育の質の向上をめざす教育条件の整備に関する提言」『チーム北海道』として」を道教委に郵送（五月十二日）

- ・ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のための体制整備、現代的

な諸課題に対応する教科等横断的な教育内容充実に向けた人材確保、新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための条件整備

・ チーム体制構築のための人的配置・専門職員の導入及び条件整備、チーム力向上のための家庭、地域、関係機関との連携・協働体制の充実

2 臨時理事研修会に向けた調査の実施(新型コロナウイルス感染症への対応)

北海道・札幌市による緊急共同宣言(四月十三日)や政府による緊急事態宣言(四月十六日)により、全道一斉臨時休業が行われ、約二か月に及ぶ全道一斉の臨時休業措置がとられた。

このような状況を踏まえ、道小・道中が連携し、全道各地区に緊急アンケート(五月十二日付)を行った。各地区からの回答は道小、道中共に対策部を中心としてまとめ、道中においては七月十一日に行われた臨時理事研修会で報告し、ホームページに掲載した。また、これに先立ち、道小・道中の会長・事務局長で道教委の小玉教育長はじめ幹部の方々を表敬訪問し、調査のまとめを手渡し、説明を行った。

3 道教委との文教施策懇談会及び各課懇談会(中止)

今年度も道小・道中・道公教と合同で、道教委に対し、次年度の文教施策・予算策定に関する要望活動を行った。「要望書」の取組については初めに報告したとおりであるが、道教委からの回答については「道小情報・道中だより号外」(九月十一日発行)にて全会員

に報告した。

例年であれば、道教委からの回答をもとに八月上旬に文教施策懇談会及び各課懇談会が行われるが、新型コロナウイルス感染症により今年度の文教施策懇談会及び各課懇談会は中止となった。オリンピックも延期されたため、令和三年度においても例年より開催を早める予定である。

4 道教委とのTV会議の実施

新たな試みとして、「新型コロナウイルスに関する道教委とのテレビ会議」が開催された。八月十一日、道教委(道庁別館)を中心として一六会場をつなぎ、道小、道中、道公教の五役・副会長・地区理事・事務局幹事の五二人の校長、教頭が参加して行われた。

開会にあたって、道小・神谷教会長、道中・鎌田浩志会長、道公教・新津智哉副会長が新型コロナウイルス感染症に伴う各学校の状況や課題について発言した。進行は、志田篤俊教育部長が行い、三つの柱(①教育課程②生徒指導③教育環境整備)について意見交換が行われた。最後に、まとめを兼ねて小玉俊宏教育長が御挨拶され、約一時間で閉会となった。TV会議の詳細については「道小情報・道中だより号外」(十月九日発行)で報告した。

初めての試みであり、このような機会をもつことができたことは、大変有意義であった。小玉教育長をはじめ道教委幹部の皆様にご感謝申し上げます。

5 第六二回北海道中学校長会研究大会函館大会の中止と研究紀要による紙面発表

第六二回北海道中学校長会研究大会函館

大会は、九月二十五日、二十六日、函館市市民会館、花びしホテルを会場として、全道から約三〇〇人の会員が参加し開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症により開催を断念した。各地区、各会員には四月二十日付文書で通知した。

大会研究主題「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」に基づき、「潮風に歴史浪漫が薫る函館から逞しく未来を生きる子供を育てる学校経営」を大会スローガンとして二日間に行われて行われる予定であった。これまで約二年間、函館市中学校長会が佐竹聡実行委員長を中心に誠心誠意準備をしてくださったこと心から感謝申し上げたい。

また、本大会において各分科会で提言発表をする予定だった内容については、研究紀要(十月一日発行)による研究発表を行った。提言発表者は、以下の校長である。

○第七一回全日本中学校長会研究協議会和歌山大会 第二分科会提案概要

札幌市立元町中学校 和泉明一校長
千歳市立北斗中学校 小川 満校長

○第一分科会「『社会に開かれた教育課程』の実現

浜頓別町立浜頓別中学校 細谷隆志校長
○第二分科会「新たな時代に求められる資質・能力の育成と学習評価の充実」

釧路市立北中学校 松岡伸之校長
○第三分科会「豊かな心と健やかな体を育む教育の充実」

置戸町立置戸中学校 石原邦彦校長
○第四分科会「多様化した学校教育課題に

対応できる教員の育成と働き方改革の推進」

余市町立東中学校 本田明美校長

○第五分科会「家庭・地域や校種間における連携・協働の推進」

登別市立緑陽中学校 野崎 均校長

6 地区別教育経営研究会・法制研修会

毎年、校長会会員の職能向上を目的に各地区単位で開催されている地区別教育経営研究会・法制研修会は、今年度八月四日の日高地区を皮切りに、十一月十一日の札幌市（中）地区まで順次開催される予定であった。しかし、大人数での会議が制限される中、やむなく中止を決定した地区も多かった。「開催」が一地区、「短縮開催」が二地区、「誌上開催」が三地区、「開催中止」が一六地区であった。（小中別開催も含む）

開催した研修会では道小・道中より五役や幹事を派遣し各地区からの質問に回答するほか、各地区で教育局や市町村教育委員会から講師を招いての研修を行っている。会員の実践発表や校種別、課題別分科会での研究協議を取り入れるなど、年々内容の充実が図られている。多くの地区が小・中学校合同で開催されるため、小中交流や情報交換の場としても大きな役割を果たしている。今後もより一層充実した会になるよう各地区校長会の取組をお願いしたい。

7 全日中三田村会長との意見交換

十月三十日、全日本中学校長会の三田村裕会長が来道し、道中五役との意見交換会を千歳市立千歳中学校で行った。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で北海道を含め各

ブロックにおける研究大会が中止や書面開催となったため、三田村会長は直接各ブロックの校長会を訪れ、情報交換を行っている。

意見交換会の内容については、「道中だより号外」（十一月三十日発行）で報告しているが、三田村会長からは中教審「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（中間まとめ・十月七日）」における全日中会長として述べた意見の概要説明が行われた。道中からは各ブロックから寄せられた課題、及び、中教審中間まとめへの意見、部活動の今後の在り方に関するアンケート結果を伝え、全日中としての国や文科省への一層の働き掛けを要望した。

8 道中組織と運営

「オール北海道」で円滑な組織運営を進める道中の新組織体制も四年目を迎え、事務局の経営・研修・対策・情報の四部の活動は、石狩、札幌、空知、胆振の各地区が担当した。今年度も全道六ブロック体制で活動を行う中で、会長については札幌（第六ブロック）を除いた五ブロックの副会長の互選により選出し、岩見沢市立北村中学校の鎌田浩志校長が総会（書面開催）にて承認された。五役においても、事務局長は札幌、事務局次長を札幌・石狩、会計理事を小樽から選出し、「チーム北海道」として事務局の活動を推進している。また、令和四年度に控えた全日中研究協議会札幌大会に向けて、札幌市中学校長会との連携を密に準備を進めている。

三 当面する学校経営上の諸課題への対応
1 教育の情報化とGIGAスクール構想の実現に向けて

Society 5.0時代の到来といった急激な社会的变化が進む中、初等中等教育の現状及び課題を踏まえ、中央教育審議会では「新しい時代の初等中等教育の在り方」について審議が進められた。中央教育審議会初等中等教育分科会においては、令和元年十二月に論点とりまとめが行われ、これからの学びを支えるICTや先端技術の効果的な活用、義務教育九年間を見通した教科担任制の在り方などについて、方向性を示すとともに、今後検討すべき論点が提示された。その中で、ICTや先端技術の活用に当たっては、教師の在り方や果たすべき役割、先端技術を踏まえた年間授業時数や標準的な授業時間等の在り方、デジタル教科書の今後の在り方等について、検討していくこととされた。

このため、文部科学省では、新学習指導要領の実施を見据え「二〇一八年度以降の学校におけるICT環境の整備方針」を取りまとめ、「教育のICT化に向けた環境整備五か年計画」を策定した。当初は、二〇一八～二〇二二年度まで単年度一、八〇五億円の地方財政措置を講じ、学習者用コンピュータを三クラスに一人程度整備することや指導者用コンピュータを教師に一人一台整備すること、超高速インターネット及び無線LANを一〇〇%整備すること、統合型校務支援システムを一〇〇%整備すること等が計画されていた。

しかし、新型コロナウイルス感染症によ

る休業が長期にわたったことで、「学びの保障」の観点からICT環境の整備は必須の状況となった。四月三十日付文科省事務連絡「公立学校情報機器整備費補助金（一人一台端末の整備）の執行について」が各都道府県教育委員会に出され、一人一台端末の整備が前倒しで行われることとなった。このことに関する補正予算額は二、二九二億円（一人一台端末）の早期実現に二、九五二億円、学校ネットワーク環境の全校整備七一億円、GIGAスクールサポーターの配置一〇五億円、家庭学習のための通信機器整備支援一四七億円）となっている。令和元年度補正予算に計上していた学年（小五、小六、中一）以外の小一～中三までの全ての学年分について計上されている。

八月末の文科省調査「端末の調達に関する状況について」の速報値において、道内の調達状況では既に六町村が完了したことが示された。その他の地区についても急ピッチで調達が進められ、今年度中には全道で配備が完了する予定となっている。「一人一台端末」の実現を受け、子供たちの確かで豊かな学びを保障するための教員研修も含めた準備は急務である。

2 令和三年度文科省概算要求と新年度予算案について

文科科学省は令和三年度の予算概算要求をまとめ、一般会計総額は五兆九、一一八億円、文教関係予算要求額は四兆三、〇一一億円、義務教育費国庫負担金は一兆五、二〇八億円となった。

従来の働き方改革への対応や情報通信技術

（ICT）関連の充実などのほかポストコロナ時代の「新たな日常」に向けて、新型コロナウイルス感染症対策など、緊要な経費を予算として計上した。また、政府の教育再生実行会議の初等中等教育ワーキング・グループなどで検討が進められている少人数学級や、小学校などでの専科教員制度などの進捗状況を考慮し、概算要求時点で予算額を明示しない事項要求が盛り込まれた。

その後、一月に入り文科省と財務省での令和三年度予算案での対応協議により三五人学級を令和三年度から五年間かけて導入する方向で合意した。背景には少子化による教員数の減少により教員数の大幅な増員にはならないことがあげられるが、コロナ禍における感染症防止策として子供同士の距離をとる必要があることも追い風となった。しかし、感染症防止の観点でいうならば小学生よりも体が大きくなる中学校においてこそ少人数学級は必要であり、思春期の心に寄り添いきめ細やかな指導を行っていく上でも中学校の少人数学級化について、校長会として粘り強く要望していきたい。

新年度予算案の主な内容は以下のとおりである。

○教職員定数

小学二年～六年の学級の上限人数を令和三年度から五年間かけて、現行の四〇人から三五人に段階的に引き下げ、全学年に拡大する関連経費として、義務教育費の国家負担を一兆五、二六四億円計上した。学級数は増加するが少子化に伴う自然減により、前年度当初比で五八億円減となった。定数に関して

は、教員のもちコマ数軽減による教育の質の向上として、二、〇〇〇人を加配し、義務教育九年間を見通した指導体制確立のため、専科指導に積極的に取り組む小学校に対して、支援する。

○ICT環境整備

学校での情報通信技術（ICT）活用が強化された。ICT企業の出身者らに通信環境整備などを支援してもらうGIGAスクールサポーター配置促進事業に、一〇億円を充てる。また、GIGAスクール・サポーター・スタッフにおける学びの充実事業を前年度に引き続き実施し四億円を計上した。デジタル教科書導入を促すため、小学五、六年、中学全学年の一部の授業でデジタル教科書を扱う実証事業を行う経費として二億円を盛り込んだ。このほかSINET（国立情報学研究所が構築、運用する学術情報通信ネットワーク）活用の実証研究事業を実施予定である。

○感染症対策

学校における感染症対策の充実として四億五、〇〇〇万円とし、感染症対策等の学校教育活動継続支援事業として各校への支援を行うほか、特別支援学校スクールバス感染症対策支援事業を行う。新規事業として、学枚欠席者・感染症情報システムの充実として二億二、二〇〇万円。このほか、学校での新型コロナウイルス対策などにあたる外部人材の配置により、教員の負担軽減を図る。

○専門スタッフ、外部人材の配置

スクールカウンセラー配置事業（五三億円）では全公立小中学校二万七、五〇〇校、スクールソーシャルワーカー配置事業（一九億

円)では全中学校校区への配置を目指す。補習等のための指導員等派遣事業は前年度比二八億円増の九〇億円を計上した。学習指導員などの配置は、前年度比七億円増の三九億円を盛り込んだ。部活動指導員については一億円増の二二億円とし、六〇〇人増の二万一、〇〇〇人の配置を予定している。

今後も政府内の協議、国会での審議などの推移を注視するとともに、全日中との一層の連携を図り、情報収集に努めながら、国や道教委への予算要望・文教施策反映に向けて粘り強く取り組んでいく必要がある。

3 学校における働き方改革について

平成三十一年一月二十五日に中教審から「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」の答申があり、学校の働き方改革の目的は、教師のこれまでの働き方を見直し、自らの授業を磨くとともに日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対しての効果的な教育活動を行うことができるようになることとした。

文科省の作成した勤務時間上限に関するガイドライン(月四五時間以内、年間三六〇時間以内)の実効性を高めることが重要であり、文科省はその根拠を法令上規定するなどの工夫を図り、学校現場で遵守されるよう取り組むべきとした。また、道教委が進めている学校における働き方改革「北海道アクション・プラン」においても勤務時間管理の徹底が必要であり、各校における働き方改革推進

の様々な取組が報告されている。

現在道教委は、一年単位の変形労働時間制の導入等に向けて検討を進めており、令和三年度からの実施に向けて実施要領等の作成に入っている。実施に当たっては現場の負担をできるだけ少なくすることが求められる。道中では一月に「一年単位の変形労働時間制」に関する意見をまとめたが、適用条件に関する意見、一月単位の変形労働時間制との併用に関する意見、様式等に関する意見等があげられた。実際の導入は市町村単位での判断であり、最終的には各学校の判断が求められるため、市町村教育委員会とも連携しながら適切な対応をしていく必要がある。

また、文科省が示している部活動における段階的な地域移行に関しても、全日中と連携して国に要望をあげることや道教委との十分な意見交換が必要である。教職員の勤務の実態を踏まえながら、実効性のある学校における働き方改革の推進のために、引き続き道教委や関係機関との協議を進めていきたい。

4 中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」

文科省は中央教育審議会総会において、一月二十六日、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現(答申)を取りまとめた。知・徳・体の育成を目指す日本型学校教育の強みを確認する一方、子供の学習意欲低下や教員採用倍率の低迷などの課題を指摘し、各分野で提言をまとめた。

小学校の教科担任制では専科指導の対象教

科として外国語、理科、算数の三教科を挙げた。中学校の学習を見通した指導ができるようになることや、教員のもち授業数が減り、働き方改革につながることを期待できるとした。それに併せて小中両方の教員免許状を取りやすくすることも求めた。答申の主な内容は以下のとおりである。

- ・小学校高学年で令和四年度をめどに教科担任制を導入する
 - ・小・中学校の免許状併有を促進するため、教職課程で共通科目を増やす
 - ・高校普通科を設置者判断で学際的な学科などに変えられるようにする
 - ・各高校で「スクール・ポリシー」などを設ける
 - ・特別支援学校の設置基準を設け、教室不足解消のため新築・増設を進める
- 北海道中学校長会として、引き続き国や文部科学省の動向を注視し、関係機関と連携していく必要がある。

学校経営に法的根拠を据えた 教育活動の充実に努める

経営部

一 活動の方針

本会の運営方針・活動の重点を受け、学校経営に法的根拠を据え、教育活動の充実に努める。

- 1 教育制度、関係諸法規の情報収集と情報の提供、資料化に努める。
- 2 学校経営上の諸問題や管理運営に関する法制研究を行い、その解決に資する。
- 3 諸会議等を通じ、会員相互・地区との情報交換を図り、組織の連携・充実・発展に努める。

二 業務内容と進捗状況

1 諸会議の開催

- (1) 臨時経営部研修会（七月十一日）
 - ・ 活動方針、業務推進計画の検討
- (2) 道小・道中合同事務局研修会・学習会（七月十七日）
 - ・ 年間業務推進計画の説明と意見交換
 - ・ 地区別教育経営研究会の開催に関わる取組についての説明と意見交換

・ 質問・要望に対する学習会

(3) 第二回経営部研修会

（二月十二日書面）

・ 年度反省、次年度への課題・展望とまとめ

2 法制研修会、地区別教育経営研究会の開催

（今年度道小担当）

・ 八月四日 日高地区（新冠町レ・コード館）

・ 九月二十八日 留萌地区（羽幌町中央公民館）

・ 十月六日 石狩地区（石狩教育研修センター）

・ 学校経営の資料の編集（今年度道小担当）

・ 法制研究集録第五一集の編集発行

3 今年度の反省と次年度への展望

1 法制研修会・地区別教育経営研究会

・ 開催を計画できたのは、日高・留萌・石狩・札幌（中）の四地区で、札幌（小）は誌上開催と、例年とは大きく異なる様相となった。

2 計画どおりに行われたが、十一月十八日に実施を予定していた札幌（中）地区は新型コロナウイルス感染症の拡大のために中止となった。実施した地区では、人数の制限や時間の短縮、マスクの着用や消毒などの感染防止対策を行い、集合形式の研修の実施にこぎ着けた。Web実施の場合の対応を視野に入れておく必要がある。

3 本年度の反省と次年度への展望

・ 内容としては、教育に関する情勢を報告し、地区の状況として新型コロナウイルス感染症拡大防止の取組と学びの保障について、教えていただいた。また、事前にいただいた質問事項に関連して、働き方改革の推進、教育課程の再編成など、まさに今取り組まれている課題について意見交流が図られた。教育局からの情報提供や講話など、今年度も地区による工夫がなされ、研修内容の充実が企図されていた。

・ 法制研修は、学校経営の管理能力と教職員への指導力を高めるために必要不可欠である。内容の充実を含め、課題解決に努める研修となるよう、工夫された取組を継続したい。

2 学校経営の資料の編集

・ 道小が主たる編集を担当した。七月下旬完成し、全道各地区校長会に配布した。

3 法制研究集録第五一集の編集発行

・ 道中が主たる編集を担当し、五〇集（大成集）をデータ化し、冊子での会員配付ではなく、二月にHP上に掲載した。

本年度の経営部の活動では、皆様の御理解と御協力により多くの成果を収めることができた。地区研は新型コロナウイルス感染症の拡大のため、三地区のみの開催であったが、貴重な御意見をいただくことができた。各地区校長会の御協力に心より感謝申し上げます。

（江別市・大麻東中学校 三浦 崇史）

「新たな時代を切り拓き
よりよい社会を創り出していく
日本人を育てる中学校教育」
を目指して

研修部

今年度からの基本主題『新たな時代を切り拓き よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育』のもと、道中研究大会において研究交流を深めるとともに、各地区における研究を基盤とした研究活動の充実に努め、校長としての識見や指導力の向上を目指す取組を推進した。

一 活動の方針

- 1 第七一回全日本中学校長会研究協議会和歌山大会の円滑な運営と研究内容の充実に図るために、開催地区並びに各地区研修担当者との連携を密にする。
- 2 第六二回北海道中学校長会研究大会函館大会の円滑な開催及び研究活動の充実に向け、函館市中学校長会との連携を密にする。
- 3 令和二年度の研究を総括し、令和三年度「研究の手引き」の作成作業を行う。
- 4 教育課程に関する情報収集に努め、中学校教育における今日的課題を明らかにし、問題点の解明に寄与する。

二 業務の推進

1 諸会議の開催

- (1) 臨時研修部研修会 七月十一日
 - ・ 研究方針、業務推進計画及び業務推進について
 - ・ 第六二回道中研函館大会、第七一回全日中研和歌山大会について
 - ・ 令和三年度「研究の手引き」の作成について
 - ・ 教育課程に関する調査について
 - ・ 各地区研究推進状況及び令和二年度の研究計画について
- (2) 道中研合同研修会
(七月十六日 中止)
- (3) 研修部研修会

一月二十九日 WEB開催
・ 年度末反省、次年度への課題の検討と展望・まとめについて
・ 令和三年度以降の研究推進について

- ・ 令和三年度第六三回北海道中学校長会研究大会宗谷・稚内大会（九月二十四、二十五日）について
- ・ 令和三年度第七二回全日本中学校長会研究協議会静岡大会について等
- 2 研究活動の推進

- (1) 第六二回道中研函館大会と第七一回全日中研和歌山大会の円滑な運営と研究内容の充実に図るため、当該実行委員会との連絡・情報交流を積極的に行う。

道中研分科会提言及び全日中研提案に向けて、担当地区や発表者へのサポートを早目に行っていく。

(2) その他の業務

- ・ 研究資料及び情報提供、研究校の紹介
- ・ 各地区研究推進の状況や成果の交流

三 今年度の反省と次年度に向けて

- ① 第六二回道中研函館大会と第七一回全日中研和歌山大会は、残念ながら紙面開催となった。研究の継続と交流を図るため、当該実行委員会と連絡を取りながら、研究紀要の発行に努めた。特に道中研函館大会の研究紀要は、大会の開催規模や開催内容が分かるよう紙面の構成を工夫し、更に、各地区の研究の成果や情報を共有できるように、提言原稿の掲載はもちろん、研究大会当日に配布予定だった資料も提供いただき、掲載することができた。

- ② 道中研分科会提言及び全日中研提案の原稿作成に関し、研修部として担当地区や発表者との連携・協働に努めた。
- ③ 道中情報部と連携し、令和元年度地区研究推進報告と令和二年度地区研究推進計画を道中ホームページに掲載し交流を図った。

- ④ 学校経営の指針として示された「全日中新教育ビジョン」学校からの教育改革（令和二年五月策定）の各地区での活用をよろしく願いたい。

（札幌市・羊丘中学校 富川 浩）

学校経営の向上と

会員の職責に見合う

福利厚生・待遇改善の推進

対策部

本年度も対策部では、本会の運営方針と活動の重点を受け、業務を推進してきた。

調査研究については、学校経営の向上に向け、より有効でタイムリーな内容及び資料提供となるよう情報収集を行った。各地区理事並びに地区対策担当者の皆様の御協力により、予定の業務を遂行することができた。

一 活動の方針

本会の「運営方針及び活動の重点」を受け、学校運営上の問題について調査研究を推進し、学校経営の向上に役立てる。また、会員の職責に見合う福利厚生・待遇改善に関する業務を推進する。

(一) 生徒指導等に関する情報収集、調査研究と資料作成、情報提供に努める。

(二) 会員の福利厚生・待遇改善に関する問題解決・改善に向け、関係機関との連携強化に努める。

(三) その他、緊急性のある課題や各種調査、情報に関することの対応と研究を推進する。

二 業務内容と推進状況

(一) 諸会議の開催

① 第一回対策部研修会

・ 七月十一日(土)：方針、業務推進計画の検討

② 小中合同事務局研修会・学習会

・ 七月十七日(金)：地区別教育経営研究会に向けた学習会、情報交換

③ 第二回対策部研修会(書面会議)

・ 一月二十九日(金)：業務反省、次年度の展望とまとめ

(二) 関係調査・資料作成の業務

① 「『働き方改革』の推進に関する調査報告書」の作成

・ 調査の内容

「令和二年度 学校における働き方改革に関する道内調査」(以下、道内調査)を実施し、結果分析を行った。

また、各地区が作成したレポートに基づき、各地区の状況、取組、成果と課題をまとめた。

・ 作成の流れ

各地区へ依頼(七月)

「道内調査」の集約(九月)

各地区が作成したレポートの集約

(十月)

結果分析(十一月)

調査報告書の編集、校正(十二月)

調査報告書の発行(一月)

② 全日中諸調査

・ 「教育課程の編成・実施等に関する調査」(教育研究部)

・ 「健全育成の推進・充実のための研究等に関する調査」(生徒指導部)

・ 事務局次長からの依頼調査

※以上、全道一八校に依頼

・ 令和二年度 各都道府県・政令指定都市人事委員会の勧告概要」「令和二年度 各都道府県・政令指定都市校長会の給与等に関する令和三年度予算要望の概要」

③ 「退職関係資料」の作成

・ 全道中運営要綱に掲載(四月資料更新)

(三) 関係諸団体との連携

① 北海道教育委員会

② 北海道公立学校教職員互助会

③ 北海道退職校長会

④ 社団法人北海道退職公務員連盟

三 活動の反省と次年度に向けて

業務推進にあたっては、部内の連携協力体制を構築し、当初の目的を達成することができた。関係各位の御理解と御協力に、改めて感謝を申し上げる次第である。

次年度は調査報告書を作成せず、新たな発行計画を検討の上、令和四年度から隔年で発行する予定である。

(根室市・啓雲中 二本柳 千尋)

情報交流の充実を目指して

情報部

情報部は、今年度も全国・全道の教育情勢を各地区に提供するとともに、各地区からの情報交流の充実を目指して業務推進にあたった。特に、本会の活動状況や教育関連情報については、会報「道中だより」、会誌「全道中」、そして道中ホームページによって随時お知らせしてきた。

情報部が提供する教育情報が、各地区校長会の取組に一層の充実が図られていること、また、会員諸氏の職能向上に貢献しているものと確信する。さらに、何かと多用中にもかかわらず原稿執筆に御協力いただいた皆様に感謝申し上げる次第である。

一 活動方針

本会の運営方針と活動の重点を受け、広報活動のより効果的な業務推進を図り、会員意識の高揚並びに組織活動の強化に努める。

- 1 広く、本会活動の状況や関係機関の情報、各種資料等を提供する。
- 2 各地区の活動や会員の研究成果、論説等の交流を図るとともに、各界から教育

に寄せる意見等を掲載し、会員の職能向上に努める。

- 3 教育関係機関・団体との情報・資料の交流並びに相互の連携・協調を図り、教育世論の喚起に努める。

二 業務内容と推進状況

1 諸会議の開催

- (1) 情報部研修会（臨時一回）
第一回 七月十一日（土）

本年度の活動方針、業務推進計画

- (2) 編集会議（随時）

2 機関誌等の編集・発行

- (1) 「道中総会・研修会要項」編集、発行
令和二年度「第九三回総会・研修会要項」の発行 四月二十八日
令和三年度「第九四回総会・研修会要項」の編集（令和三年四月発行）
- (2) 会報「道中だより」の発行
第三七〇号 六月十一日発行
第三七一号 七月八日発行
第三七二号 十一月五日発行
第三七三号 一月二十二日発行

- (3) 号外「道小情報・道中だより」の発行（今年度は、道中担当）
九月八日 北海道文教政策・予算

策定に関する要望に対する回答

十月九日 新型コロナウイルス防疫のための感染症に関連した道教委と校長会・教頭会との意見交換会

（Web会議）の概要

十一月三十日 三田村全日中会長と鎌田道中会長らが「人材確保、中教審中間まとめ、部活動の在り方について意見交換」の概要

- (4) 会誌「全道中」第九〇号の編集・発行

- ① 潮流
- ② 論考
- ③ 特集
- ④ 今年の道中 各部門・各地区の活動
- ⑤ 北海道風土記
- ⑥ 文芸
- ⑦ 資料等

- 3 北海道中学校長会公式ホームページの更新及び内容の充実
- 4 全日中機関誌「中学校」の編集協力・原稿依頼

コロナ禍により全日中総会や研究大会が中止となり、内容変更を余儀なくされたが、本年度も各地区のご協力をいただいて業務推進にあたる事ができた。今後もタイムリーな内容となるよう発行時期と掲載内容を設定していきたい。令和三年度からは、「道中だより」は全てPDF配信となることを申し添える。

（北斗市・上磯中学校 海野 厚二）

石 狩



北海道の空の玄関
新千歳空港（千歳市）

石狩地区は管内七市町村の小中学校長九八人（小六一、中三六、義務教育学校二）で組織されている。子供たちに変革の時代を生きる確かな学びの力を育てるために、総意と調和のある教育課程の編成・実施や家庭・地域と一体になった学校づくりにも邁進している。管内小中学校長会では、これまでの石狩の風土に根ざした伝統を踏まえつつ、新たな教育課題に正対し、研修活動の充実を図り、校長の資質・職能向上に努めている。

一 活動方針

- 1 信頼される学校経営のもと、管内教育の安定と充実・発展に努める。
- 2 職能向上をめざす研修活動の推進と教職員の資質向上に努める。
- 3 管内における教育諸課題を把握し、その解決に努める。
- 4 教育諸条件の整備・充実と教職員の処遇改善や福利厚生増進に努める。
- 5 組織の強化と実態に即した会務の推進

に努める。

二 各部の活動

1 研修部

新型コロナウイルスによる休校により、研究主題の解明を一年先送りし、教育課程再編成について研究を推進。

(1)管内小中学校長会研修会の開催

①春季学校経営研修会（四月）

『未来の教育を担う
人材育成の推進』（↓書面交流）

②秋季学校経営研修会（十一月）

『新型コロナウイルス対応にかかわる
教育課程の再編成について』

(2)ブロック別研修会（九月）

管内を南北二ブロックに分け開催
『新型コロナウイルスによる課題
を解決する教育活動の工夫改善』

(3)全国・全道校長会研究大会への参加
全日中和歌山大会提言（↓誌上発表）

(4)研究集録第三六集発行（↓延期）

2 経営部

(1)石狩地区教育経営研究会（十月）

『今日的教育情勢・課題等の研究協議』

(2)道小・道中経営部との連携と業務推進

3 対策部

(1)道小・道中対策部との連携と業務推進

(2)管内関係調査実施と集計・情報化

(3)会員の福利厚生活動の推進

4 情報部

(1)会報『石狩』（二〇〇〇～二〇一〇号）発行

(2)会誌『たがやし』（五二号）発行

(3)道小・道中広報誌への原稿執筆協力

三 諸会議

1 定期総会（四月↓参集規模縮小し開催）

2 役員研修会（月一回）当面する課題対応

3 幹事研修会（年九回）市町村幹事、関係機関による協議・交流（↓規模縮小）

4 市町村代表者等研修会（七月）

四 地区役員

会 長 出村 好孝（江別・江別第二中）

副 会 長 松井 卓（江別・上江別小）

副 会 長 多田 貴典（千歳・勇舞中）

事務局 長 鹿野 秀一（恵庭・恵庭中）

次 長 佐藤 直己（江別・江別第一小）

次 長 今村 敏之（千歳・千歳小）

次 長 千葉 則理（江別・野幌中）

会 計 中川 幹彦（北広島・西の里小）

監 査 山崎 信哉（恵庭・恵み野旭小）

監 査 野尻 一裕（千歳・北陽小）

五 道中役員

事務局 次 長 三浦 利章（千歳・千歳中）

運 営 委 員 新田 元紀（江別・江別第一中）

経 営 部 長 三浦 崇史（江別・大麻東中）

経 営 副 部 長 佐藤 誠（石狩・花川中）

幹 事 小川 満（千歳・北斗中）

幹 事 加藤 秀典（石狩・花川北中）

（江別市・野幌中 千葉 則理）

後 志



ニセコ連峰
岩内岳

後志小中学校長会は、一九町村より小学校長三九人、中学校長二四人の、計六三人で構成されている。

齊藤信之会長のリーダーシップのもと、会員一人一人が明確な経営ビジョンをもつべく鋭い時代感覚を磨きながら、創意ある取組と組織の活性化を図っている。

保護者・地域住民の負託に応えるとともに、後志教育局、町村教育委員会協議会との連携を強めながら、「一人一人の校長の力を結集する」を基本に、後志教育の推進と充実のために諸課題に取り組んでいる。

一 運営方針

- 1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の充実に努める。
- 2 「生きる力」を育む「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価・改善に努める。
- 3 児童生徒理解を深め、時代の変化に即した生徒指導や、個々の教育的ニーズに応える特別支援教育の推進に努める。
- 4 会員の共同研究を推進し、研究成果の

交流を図るとともに、校長自らの研さんに努める。

- 5 教職員一同の一層の資質・能力の総合的な向上に努める。
- 6 教育諸条件を把握し、その改善と整備・充実に努める。
- 7 教職員の処遇の改善に努める。

二 活動状況

- 1 経営部
 - (1) 後志地区教育経営研究会の開催
 - (2) 学校経営上の諸課題や管理運営上に関する法制資料の作成と研修会の実施
 - (3) 各町村校長会の教育法令・制度に関する課題の集約と解明
 - (4) 道小経営部・道中法制部との連携・協力
- 2 研修部
 - (1) 後志小中学校長会研究会の開催
 - (2) ブロック研究会交流会の開催
 - (3) 「研究の手引き」「研究紀要」の発行
 - (4) 全国、全道研究大会への積極的参加
 - (5) 提言プロジェクトチームの編成と活動の推進
 - (6) 「学力向上の後志学校教育プラン」の活用による学校経営の充実と改善
- 3 対策部
 - (1) 各種調査の実施と集約・還流
 - (2) 教育法規や学校経営に関する諸課

4 情報部
題に関する研修会の開催

三 年間活動計画《諸会議》

- 1 定期総会 (四月)
- 2 理事研修会 (年六回)
- 3 事務局研修会 (年八回)
- 4 監査委員会 (年二回)
- 5 小樽・後志役員合同研修会 (年一回)
- 6 教育長部会・校長会役員合同研修会 (年二回)

四 役員

- | | |
|-------|--------------|
| 会長 | 齊藤 信之 (岩内東小) |
| 副会長 | 三浦 卓也 (古平小) |
| 副会長 | 木村 和義 (寿都中) |
| 副会長 | 簀 智樹 (岩内第二中) |
| 副会長 | 前田 敦子 (寿都小) |
| 事務局長 | 渡邊 均 (俱知安小) |
| 事務局次長 | 中田恭太郎 (京極小) |
| 事務局次長 | 五十嵐邦春 (喜茂別中) |
| 会計 | 柴田 真琴 (黒松内中) |
| 監査 | 中村 寿樹 (俱知安中) |
| 監査 | 中川 亨 (俱知安東小) |

(寿都町・寿都中 木村 和義)

小樽市



冬の小樽運河

小樽市中学校長会は、市の方針「知・徳・体のバランスのとれた人材の育成」に基づき、小樽の未来を託すことのできる人材育成を目指す教育推進のため、真摯に研究と実践を積み重ね、着実に成果をあげてきている。これまでの成果を踏まえ、更なる小樽の教育の充実・発展のため、私たち校長は、生徒や保護者・地域の人々の願いを十分尊重しながら、リーダーシップを発揮し、信頼され活力ある学校づくりに努めている。

一 活動方針

1 市の教育ビジョンを基盤とした着実な取組

① 選択と集中による実践・検証

2 二つの部の充実

① 研究内容の充実 ② 学び合いの深化

3 自主自立の確立

① 校長としての使命を自覚した自立した学校経営

二 活動の重点と具体

1 学校運営の強化

① 危機管理としての組織力の強化

三 各部の取組

1 研究部

① 小樽市中学校教育の充実・発展のため、校長としての職能の向上を図る。

② 重点目標三点において、特に「業務改善の推進」を中心に進める。

2 組織法制部

① 小樽市の中学校教育における質の向上を目指し相互に研さんする。

② 働き方改革、異校種間交流を重点に研修・情報交流を進め、学校改善を推進する。

四 活動の状況

小樽市では、毎年、中学校長会としての共通目標を立て、各学校で具体的な実践を進めながら、昨年度示された学校教育と社会教育を一本化した包括的な計画である「小樽市教育推進計画」をもとに、基本理念である「主体的に学び 小樽の未来を創る 心豊かな人づくり」に向けて力を注いでいるところである。

重点目標である「学校運営の強化」のため

に、今年度は特にコロナ禍における危機管理として情報共有を行い、他機関との連携を図り、生徒・保護者・教職員の安全・安心に努めた。また、会議のスリム化等による勤務時間の短縮や機能的な校内組織への転換を図っている。「小中一貫教育の前進」に向けて、先進的な取組を行っている校区をモデルに研修を深め、小中間で交流する機会の設定や教職員間の連携協働を行っている学校もある。

五 年間活動(行事)

総会

定例校長研修会

一回
一二回

(うちオンライン会議一回)

四役研修会

八回

(うちオンライン会議一回)

四役部長研修会

四回

小樽市校長会役員研修会

六回

小樽後志代表校長会議

一回

道中第一ブロック連絡協議会 一回

(紙面交流による開催)

中・高校長連絡会議・協議会 一回

経営・法制研究会等 三回

六 役員一覧

会長 宮澤 知(北陵中)

副会長 黒川 裕之(松ヶ枝中)

副会長 岡本 清豪(長橋中)

事務局 村上 俊一(向陽中)

研究部長 山崎 徹也(銭函中)

組織法制部長 加藤 俊明(潮見台中)

(小樽市・向陽中 村上 俊一)

上 川



富良野ワイン工場に
咲くラベンダー

上川地区は、今年度新たに一五人の新会員と旭川市及び他管内から異動の五人を迎え、二二市町村の総勢九二人で活動している。第四六回総会研修会は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、紙上開催という異例の形をとることとなったが、紺野元樹新会長の下、会員一人一人の「研さん」と「結束」、組織力を高め「未来の創り手となる子供たちに責任をもつ学校経営」の実現に向け邁進している。

一 活動方針

上川管内校長会は、矢継ぎ早に提案・決定・施行される教育改革など、その動向を注視しながら情報を迅速に把握するとともに、情報共有と組織的な対応に努めていく。

新学習指導要領に示された「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善と組織的・計画的な推進の実践、学校の自主性・自立性の確立、ICTの活用、教職員の資質向上・服務規律の保持、働き方改革、地域・保護者と連携した安全管理、いじめ根絶、生命を尊重する教育の徹底など「愛情と信頼に基づく学校経営」の実現を図るものとする。

そして「ふるさとを愛し、他者と協働しながら 未来を切り拓く力を育む学校の在り方」を究明し、上川教育の一層の充実発展に寄与することを旨とする。

- 1 「愛情と信頼」に基づき、創意に富む信頼される学校経営の充実に努める。
- 2 校長自ら「研さん」に励むとともに、教職員の二層の資質・能力の向上に努める。
- 3 組織活動の充実と確かな情報共有を図り、会員の「結束」を強化するとともに、教職員の処遇改善に努める。
- 4 上川教育局・地教委及び道小・道中、教育関係機関・団体と連携し、教育課題の解決及び北海道教育をリードしていくことに努める。

二 各部の活動(主な業務)

- 1 経営部
(1) 組織強化に関すること
(2) 法制研究会・教育経営研究会の開催
- (3) 学校経営に関する法制上の課題把握と関係法規の研究・具体的問題の収集処理に関すること
(4) 管内校長会役員選出に関すること
- 2 研修部
(1) 研修組織及び運営に関すること
(2) 道小・道中研究大会及び全連小・全道中研究協議会に関すること
(3) 会員の研修に関すること
(4) 研修資料の収集提供に関すること
- 3 広報部
(1) 会報の編集と発行に関すること

- (2) 各種調査の企画・実施に関すること
- (3) 統廃合学校に関すること
- 4 事務局
(1) 学校経営に関する資料の整備と交流

- (2) 地区ブロック研修会に関すること
 - (3) 後継者育成のための諸施策の立案と実施に関すること
 - (4) 教育局、地教委連、市町村校長会など関係諸団体との連携に関すること
 - (5) 各部との連携に関すること
- *各種研究大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止・紙上研修

三 役員一覧

会 長	紺野 元樹(比布中央小)
副 会 長	竹森 茂雄(当麻中)
副 会 長	田中 明人(士別中)
副 会 長	鈴木 伸行(上富良野小)
副 会 長	北島 信(美瑛小)
運営委員長	倉 博之(鷹栖中)
運営委員	福田 孝夫(和寒小)
事務局 長	南部 和紀(富良野扇山小)
事務局 次長	大場 八仁(富良野西中)
会計 理 事	林 真千子(士別朝日中)
庶務 理 事	袈田佳奈恵(剣淵中)
経営 部 長	藤弘のぞみ(下川中)
研修 部 長	金光 保(中富良野小)
広報 部 長	堀江 充(名寄南小)

(士別市・朝日中 林 真千子)

旭川市



買い物公園「手」
「旭川八景」

旭川市中学校長会は、本年度、新採用四人を含む一人の新会員を迎えた。会員二十七人が田中義彦会長を中心に、「知恵を結集し、さらに、前へ」を基本姿勢とし、旭川市教育大綱の基本方針「主体的に学び力強く未来を拓く人づくり」の具現化を図るために、組織の一層の活性化を進めている。

会員相互の研さんと連携のもと、新しい時代に相応しい学校教育の創造に向けて日々邁進するとともに、校長としての主体性とリーダーシップを発揮して、基本理念である「信頼される中学校教育の創造」を目指して会務を推進している。

一 活動の方針(要点)

- 1 旭川市民の願いや期待に応え、信頼される中学校教育を目指し、会務の推進に努める。
- 2 中学校長としての使命を自覚し、時代の進展に対応する中学校教育の在り方を見極めるとともに、その充実・発展に努める。
- 3 教育の動向を適切に見極め、具体策を

もつて、主体的にその取組を進める。

- 4 旭川市教育委員会、関係機関・各種団体等と緊密に連携し、教育諸課題への適切な対応に努める。

- 5 校長としての資質・能力の向上を図る積極的な研修に努める。
- 6 会員相互の意思疎通を図り、活動の活性化、効率化に努める。

二 活動の重点(要点)

- 1 創意と活力ある学校づくりの推進
- 2 信頼される開かれた学校づくりの推進
- 3 生徒指導上の諸問題の解決
- 4 校長の資質・能力の向上
- 5 関係機関・団体との連携と組織強化

三 各部の主な活動

- 1 研究部
(1) 六月研修会の開催・運営
(2) 上川管内小中学校長研究大会の運営
(3) 全道中研究大会函館大会、全道中研究協議会和歌山大会の参加
(4) 二月研修会の開催・運営
(5) 研究紀要の発行
- 2 厚生部
(1) 福利厚生関係業務の推進
(2) 親睦関係業務の推進
(3) 叙位・叙勲関係業務の推進
- 3 広報部
(1) 会報「校長会だより」の編集・発行
(2) 会誌「第五一号」の編集・発行
(3) 道中の広報活動への協力

4 生徒指導部

- (1) 小学校・高等学校及び関係機関との交流の充実
- (2) 定例校長会議における「生徒指導情報交流」「実践交流」の充実
- (3) 地区ブロックにおける生徒指導体制及び小学校との連携や交流の充実
- (4) 各関係機関との緊密な連携と協力体制の構築
- (5) 道中等の生徒指導関連の調査協力

5 学校教育対策部

- (1) 旭川市小・中学校長会法制研究会の開催
- (2) 学校運営及び法制上の諸課題への対応(教育課程の管理、服務規律の向上、学校の危機管理、働き方改革、情報セキュリティ等)
- (3) 道中の地区対策業務への協力

四 役員一覧

- | | |
|-------|-------------|
| 会長 | 田中 義彦(旭川中) |
| 副会長 | 尾崎 朋子(東陽中) |
| 副会長 | 日比野正人(愛宕中) |
| 監査委員 | 堀 秀樹(緑が丘中) |
| 監査委員 | 岡崎 良昭(神居東中) |
| 事務局長 | 林 欽一(神居中) |
| 事務局次長 | 工藤 亘(明星中) |
| 事務局次長 | 福澤 秀(永山南中) |
| 会計委員 | 森田 聖吾(北星中) |

(旭川市・神居中 林 欽一)

宗 谷



稚内行きフェリーから撮影した春の利尻山

宗谷校長会は、一〇市町村、五三校（うち単置中学校一七校、小中併置校五校）の校長で構成している。結成以来、「宗谷の風土に根ざした豊かな自然に育む子ども」というテーマを掲げ、会員相互の研さんと職能向上に努めながら管内教育の充実・発展を図っている。

一 運営方針

- 1 校長としての使命を自覚し、自らの職能向上に努めると同時に指導性を發揮し、教職員の研修活動の活性化を図り、保護者や地域の期待に応える学校経営の充実に努める。
 - 2 会員相互の理解を深め、活動の活性化を図り、宗谷教育の充実・発展に努める。
 - 3 関係機関や団体との連携を図り、教育諸課題の解決にあたるとともに、教育条件整備に努める。
- ## 二 活動の重点
- 1 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善に努め、愛情と信頼に基づく活力ある学校経営の推進に努める。

三 各部の活動

- 1 研究部
 - (1) 宗谷校長会の活動方針に基づき、事業計画を立て、その遂行にあたるとともに、地域社会の期待と要請に応え、教育課程についての研究と当面する教育課題に向き合う学校経営を究明する。
 - (2) 『ふるさとを愛し、志を持って、新しい社会を切り拓く力を育む学校教育』を研究主題とする第二二次三か年継続研究の三年目となる。「学校経営」「教育課程」「資質向上」に関する信頼される学校づくりの共通課題を明らかにし、実践的研究の充実に努める。
 - (3) 関係機関・団体との連携を図り、宗谷における教育研究の一層の発展・充実に努める。
 - (4) 道小、道中、全連小、全日中の研究大会などに積極的に参加し、宗谷校長会として組織的な提言を行う。
 - (5) 『学力向上プラン』（我が校・小中連携・ロードマップ）について、より一層実効性を高め、宗谷の抱える学力課題を解決していく手だてとする。
- 2 研修活動を充実し、職能向上と、教職員の資質・能力の総合的な向上に努める。
- 3 関係機関・団体と連携し、教育諸条件と教育諸課題の改善と整備・充実に努める。
- 4 校長会の組織を強化し、活動の活性化を図る。

四 役員一覧

- 2 経営・情報部
 - (1) 学校経営上の諸問題の解明に努める。
 - (2) 学校経営の管理運営に関する調査及び研究に努める。
 - (3) 意欲を高め、やりがいのある人間関係づくりのための学びを高める。
 - (4) 会報と会誌を編集・発行する。また、各種原稿依頼等に迅速に対応する。
 - 3 対策部
 - (1) 関係機関・団体との連携を一層強め、会員の福利厚生の充実と向上を図る。
 - (2) 道小・道中からの諸調査を迅速且つ正確に行うとともに、本会独自の調査活動を必要に応じて行う。
- | | |
|---------|--------------|
| 会 長 | 大島 朗（潮見が丘小） |
| 副 会 長 | 本間 一臣（稚内東中） |
| | 塩崎 由雄（潮見が丘中） |
| | 桜井 和則（枝幸小） |
| | 藤田 淳（鬼志別小） |
| | 畠山 博次（豊富中） |
| 事務局 長 | 杉本 浩一（稚内南小） |
| 事務局 次 長 | 吉崎 健一（幌延小） |
| | 佐藤 聖士（大岬小） |
| | 小林 清一（稚内中） |
| | 三野宮誠一（豊富小） |
| | 大谷 智昭（枝幸中） |
| | 池田 幸則（中頓別中） |
| | 細谷 隆志（浜頓別中） |

（豊富町・豊富中 畠山 博次）

留 萌



雄大な暑寒別岳、
清らかな暑寒別川

今年度の留萌管内小中学校長会は、コロナ禍の中、例年とは形を変え縮小した形で総会研修会を実施し、新体制がスタートした。

前田会長は、『社会に開かれた教育課程で、これからの社会に求められる資質・能力を身に付ける教育をマネジメントすることが校長に求められるが、校長会の組織を通じて研さんを深めながら、①新しい教育の趣旨が見える学校づくり、②教育の質の向上、③チーム力の連携に取り組むことが必要である。改革期の今こそ、新型コロナウイルスと戦う今こそ、学校改善の絶好のチャンスであることを前向きに捉えて、教育の未来をグローバルな視点で展望し、自校の課題解決を主眼とする確実な一歩を踏み出したいと思う。』と述べ、校長会の一層の連携強化を呼びかけた。

一 運営方針

- 1 校長の使命と責任を自覚し、自らの識見を高める研修の充実と情報共有を図る。
- 2 会員相互の連携を密にして信頼関係を深め、組織の強化と活動の充実を図る。
- 3 物事や事象の変化に対し、柔軟に対応

二 活動の重点

- 1 教育改革を具現化する学校経営に努める。
 - (1) 創意ある教育課程の編成・実施と評価、改善
 - (2) 地域等に拓かれた学校経営の推進
 - (3) いじめや不登校等の生徒指導上の諸問題への対応
 - (4) 児童生徒の安全確保の徹底と危機管理体制の確立と充実
 - (5) 法令遵守の徹底と服務規律の保持
- 2 研修活動の充実と還流に努める。
 - (1) 管内校長会教育研究協議会の開催
 - (2) 留萌地区教育経営研究会の開催
 - (3) 道小・道中大会、全連小・全日中大会への参加
 - (4) 新任校長研修会の開催
 - (5) 研究集録や会報などによる還流
- 3 組織の強化と活動の効率化に努める。
 - (1) 理事研修会の充実と市町村校長会との連携
 - (2) 各部及び各市町村校長会との連携
 - (3) 教育の諸課題に対する的確な対応
 - (4) 全道(国)校長会、管内教育関係機関、団体との連携強化
- 4 教職員の待遇改善に努める。
 - (1) 管理職手当、給与体系の改善

三 各部の活動計画

- 1 研究部
 - (1) 留萌管内小中学校長会教育研究協議会の開催
 - (2) R3道小提言プロジェクト委員会の充実と研究推進
 - (3) 研究集録の発行
 - (4) 留萌管内教育研究団体連絡協議会の業務推進
- 2 組織部
 - (1) 留萌地区教育経営研究会の開催
 - (2) 教育条件整備や福利厚生の実態把握
 - (3) 組織・法制に関する研修の充実等
- 3 広報部
 - (1) 会報の発行・市町村会報の交流
 - (2) 道小・道中情報部との連携

四 役員組織

- | | |
|--------|-------------|
| 会 長 | 前田 雄(留萌小) |
| 副 会 長 | 長尾 真(留萌中) |
| 事務局 長 | 藤田 智哉(増毛中) |
| 事務局 次長 | 石田 正樹(古丹別小) |
| 会計委員 | 早坂 康(東光小) |
| 監査委員長 | 小澤 真弓(遠別小) |
| 監査委員 | 安田 善見(緑丘小) |
| 研究部長 | 明田 豊(苦前中) |
| 組織部長 | 堀井 理(羽幌小) |
| 広報部長 | 本間 博樹(苦前小) |
- (増毛町・増毛中 藤田 智哉)

檜 山



滝瀬海岸くぐり岩
(乙部町)

檜山校長会は、檜山管内七町の小学校二〇校、中学校一〇校の校長で構成している。本会は、昭和二十三年の創立以来、管内教育の充実・発展のために研究と実践を積み重ねるとともに、教育条件の整備等に努めるなど、組織の総力を挙げて取組を推進している。

一 今年度の運営方針

教育改革は未来を見据えて急速に展開しており、学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められるなど新たな時期を迎えている。

きめ細かで質の高い教育活動の充実、いじめ・不登校等の生徒指導、教職員の資質・能力の向上、学校における働き方改革、子供と向き合う時間の確保など緊急且つ重要な課題に向けてリーダーシップを発揮し、対応していかなければならない。

檜山校長会は、こうした教育課題解決のために「ふるさと檜山に誇りを持ち、自己実現に向けて未来を切り拓く児童生徒」を育む学校経営の在り方を究明し、保護者や住民の負

託と信頼に応えるべく学校組織の活性化と活力ある学校づくりに全力で取り組んでいく。

二 今年度の活動の重点

- 1 組織マネジメントを活かした活力ある学校経営の推進
- 2 「生きる力を育む」適切な教育課程の編成・実施・評価・改善
- 3 時代の変化に即した生徒指導や特別支援教育の組織的推進
- 4 教職員の資質・能力の総合的な向上
- 5 服務規律の厳正な保持
- 6 組織活動の活性化と充実
- 7 ミドルリーダーならびに管理職候補者の育成(重点)
- 8 防災教育と健康安全教育の充実(コロナ禍の情報・対応の連携)
- 9 学校における「働き方改革」の推進(重点)

三 主な各部の活動

1 経営部

- (1) 教育研究事業の推進
- (2) 檜山校長会教育研究大会の開催
- 省と意見・要望等の調査

2 研修部

- (1) 檜山校長会研究計画の作成及び推進
- (2) 檜山校長会教育研究大会分科会運営及び大会集録の編集
- (3) 全道・全国研究大会への参加集約

- (4) 道小・道中との連携

3 対策部

- (1) 各種調査に対する取組
- (2) 新採用校長研修会の開催・運営
- (3) 各種資料の収集と整備
- (4) 福利構成的な活動及び道小・道中との連携

4 情報部

- (1) 檜山校長会誌『清風』の編集・発行
- (2) 道小「教育北海道」の執筆依頼・原稿の提出
- (3) 道中「道中だより」・「全道中」の執筆依頼・原稿の提出
- (4) 『清風』の復刻版の閲覧の実施

四 役員一覧

会長	塩崎 弘明(江差中)
副会長	角田 昌宏(江差小)
監査長	買手 郁史(明和小)
監査長	本谷 弘之(若松小)
事務局次長	福井 順一(上ノ国中)
事務局次長	玉置 英樹(厚沢部中)
事務局次長	谷口 光伸(乙部小)
会計	笠松 靖史(上ノ国小)
経営部長	佐藤 等(久遠小)
研修部長	米田 昌(厚沢部小)
情報部長	酒井 豊志(今金中)
対策部長	清水 勝也(大成中)

(上ノ国町・上ノ国中 福井 順二)

渡 島



会旗：「拓創」

渡島小中学校長会は昭和五十二年度に小中学校長会の統合により会員数一三二人でスタートし、今年度で統合四四年目を迎えた。一〇市町校長会で、小学校四〇人、中学校一八人、小中併置校一人、義務教育学校一人の合計六〇人の会員で組織されている。今年度は、二年目となる海野厚二会長の強力なリーダーシップのもと、「オール渡島」をキーワードに、これまでの実績と伝統を守りながら、渡島教育の更なる充実と発展に寄与したいと考えている。

一 活動方針

- 1 創意と秩序のある渡島小中学校教育の充実と発展に努める。
- 2 教育の動向を踏まえ、教育関係機関・団体との連携を強化し諸課題の解決に努める。
- 3 新しい時代を担う学校経営の充実に努める。
- 4 未来を切り拓き 豊かな社会を創り出す子供たちを育成する教育課程を編成

し、カリキュラム・マネジメントを実現する。

- 5 子供の自己実現をめざす開発的・予防的な生徒指導に努める。
- 6 会員個人や協働の研修を通し、校長としての識見や指導力の向上に努める。
- 7 教職員の意識改革と資質・能力の向上を図るとともに、後継者の育成に努める。
- 8 渡島小中学校長会の組織の強化と活動の充実に努める。

二 各部・事務局の主な業務計画

- 1 研修部
 - (1) 第一七期二か年継続研究一年次の研究計画の策定と推進
 - (2) ブロック研究推進との連携
 - (3) 第四四回渡島小中学校長会研究大会の開催
- 2 経営部
 - (1) 新採用会員研修会等での研修講話
 - (2) 各種調査の実施と協力
 - (3) 経営部ニュースの発行
 - (4) 渡島・函館地区教育経営研究会参加
- 3 対策部
 - (1) 厚生事業（PG大会）の企画・運営
 - (2) 各種懇談会への協力
 - (3) 住宅要覧の追加・修正等
- 4 情報部
 - (1) 会報「渡島」、会誌「拓創」の発行

三 役員一覧

会 長	海野 厚二（上磯中）
副 会 長	土橋 史人（森 中）
副 会 長	小野 俊英（八雲小）
監 査 長	船橋 恭二（涌元小）
監 査 長	村上 篤（大野中）
事務局 長	榎山 聡（大沼岳陽）
事務局 次長	三浦 哲也（上磯小）
会計 理 事	池田 克己（尾白内小）
庶務 理 事	石川 宏司（落部小）
庶務 理 事	石山 史（石別小）

（七飯町・大沼岳陽学校 榎山 聡）

- 5 正副会長・事務局
 - (2) 道小・道中広報紙への協力

函館市



函館ハリストス正教会

函館市中学校長会は、今年度二二人の会員（新会員三人、小中併置校一校）でスタートした。佐竹 聡会長の強力なリーダーシップのもと、小規模校長会ならではの機動性を生かしながら、函館市の教育振興計画に基づき、会員の知恵を力を結集し、函館の教育の充実に寄与したいと考えている。

一 基本方針

- 1 校長会の組織を機能させ、一丸となって教育課題、経営課題の解決に努める。
 - 2 全教育活動を通して「生きる力」を育む「信頼される学校」の創造に努める。
 - 3 関係機関との連携を基に、教育課題の解決、教育条件の整備充実に努める。
- ## 二 活動の重点
- 1 関係機関、各種団体とのネットワークづくりとCSを活かした学校力向上。
 - 2 中学校教育の在り方についての研修と幼・小・中・高の連携の強化。
 - 3 校長会としての組織マネジメント力が機能する実践交流の機会の充実。
 - 4 業務改善に向けての具体的実践と信頼

される学校づくりの経営研修の充実。

5 函館市の「教育振興基本計画」と自校の学校経営の融合と実践・検証。

6 第六三回道中研函館大会は中止となったが、研究紀要を作成し、研究環境に寄与できるように努める。

三 各部運営計画の概要

会員減少に伴い規約改正を行い、経営・

研修・対策部の三部とし、対策部に情報部の業務を追加した。

1 経営部

(1) 道中経営部との連携

(2) 運営要項の作成

(3) 小中合同特別研修の運営の支援

(4) 学校教育生き生きセミナー資料作成

(5) 函館・渡島地区教育経営研修会の計画と運営（今年度中止）

(6) 三地区校長会役員研修会の支援（今年度規模縮小）

(7) 学校管理・サービスに関する情報提供

(8) 各校教育課程に関する調査とまとめ

2 研修部

(1) 道中研修部との連携

(2) 実践事例交流会、局長講話、教育経営研修会の計画と運営

(3) 道中研究大会の参加・協力

(4) 渡島管内中高連絡協議会の運営協力

(5) 研究主題のへ対応と準備

3 対策部

(1) 道中対策部・調査部との連携

(2) 道中等各種調査の協力・まとめ

4 調査部

(1) 道中対策部・調査部との連携

(2) 道中等各種調査の協力・まとめ

(3) 函館市への予算要望調査の依頼とまとめ、各部各課、教育長への要望

(4) 教育実習生の受入れに関すること

(5) 福利厚生に関すること

(6) 道中会報・会誌の原稿依頼

(7) 函館市中学校長会誌「桐影」第四〇号の編集と発行

四 主な活動の概要

1 定例研修会

職能向上を図るため経営課題や教育問題の報告と協議を行い、円滑な学校運営の推進を目指し研修の成果をあげている。

2 経営研修会

各種研修会の性格に応じた講演や提言により今日的課題への理解を深めている。

五 役員一覧

会長	佐竹 聡（巴 中）
副会長	三浦佐和子（深堀中）
副会長	濱谷 操（桔梗中）
副会長	笠島 美教（尾札部中）
監査	齊藤 淳一（榎法華中）
監査	古俣みきお（戸倉中）
事務局次長	木村 雅彦（五稜郭中）
事務局次長	佐藤 雅博（恵山中）
事務局次長	長谷川秀雄（港 中）
経営部長	内山 作（湯川中）
研修部長	中埜渡信裕（銭亀沢中）
対策部長	小林 徹也（赤川中）

（函館市・五稜郭中 木村 雅彦）

空 知



空知校長会
シンボルマーク

空知校長会は、管内二四市町、小学校五九校、中学校四一校の一〇〇人の会員で組織されている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、多くの事業は、中止や延期を余儀なくされている。しかし、こうしたときだからこそ、『チーム空知』として全会員の英知を集集させ、空知の子供たちの健やかな成長を願い、確かな教育理念に基づいた課題解決と空知の教育の充実発展に全力で取り組む決意である。

一 活動方針

- 1 校長の使命を自覚し、研さんに励み、学校の自主性・自律性を発揮して、学校経営の充実・発展に努める。
- 2 校長相互の連携を図り、組織の充実・強化と効率化、諸課題の解決に努める。
- 3 教育関係機関・団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたり、地域・保護者から信頼される学校づくりに努める。

二 活動の重点

- 1 学校経営の充実

三 活動の具体策

- 2 研修活動の充実
- 3 調査活動の充実と諸問題の解決
- 4 広報活動の充実
- 1 適切な教育活動の編成と実施
- 2 校内運営組織の機能化
- 3 信頼に応える学校経営の推進
- 4 会員相互の協力と信頼の構築

四 各部の主な活動

- 1 経営部
 - (1) 学校経営研究会の開催
 - (2) 教育条件の整備拡充に資するための調査・要請活動
 - (3) 学校経営上の諸問題に関する情報収集・法的研究
 - (4) 校長会・教頭会役員研修会の開催及び教頭会研修への支援
- 2 研修部
 - (1) 空知校長会研究大会の開催
 - (2) 各種校長会研究大会への参加
 - (3) 各種研究団体・研修会への協力
 - (4) 研究紀要、研修便りの発行
- 3 対策部
 - (1) 道小・道中対策部との連携による各種調査
 - (2) 独自調査の実施と集約、情報発信
- 4 情報部
 - (1) 会報「空知野」の編集・発行
 - (2) 各種名簿・資料の作成・保管
 - (3) 道小・道中広報関係への原稿執筆
 - (4) 北海道教育振興会に関する業務

五 組織と役員

- | | |
|----------|---------------|
| ・ 会 長 | 太田 智子(美唄中) |
| ・ 副会長 | 小関 文雄(岩見沢清園中) |
| ・ 副会長 | 粟井 康裕(滝川第一小) |
| ・ 事務局長 | 喜多 慎治(岩見沢中央小) |
| ・ 事務局次長 | 菅原 伸介(岩見沢南小) |
| ・ 監 査 | 木村 尚之(美唄東中) |
| ・ 監 査 | 岡山 宏文(妹背牛小) |
| 〈経営部〉 | |
| ・ 部 長 | 出口 哲也(岩見沢小) |
| ・ 事務理事 | 山中 晴吾(上砂川中) |
| 〈研修部〉 | |
| ・ 部 長 | 細木 隆浩(深川一巳小) |
| ・ 事務理事 | 小熊 孝一(秩父別中) |
| 〈対策部〉 | |
| ・ 部 長 | 井畑 靖彦(栗山中) |
| ・ 事務理事 | 牧野 良信(砂川小) |
| 〈情報部〉 | |
| ・ 部 長 | 鳥谷部賢太(滝川江部乙中) |
| ・ 事務理事 | 成田 将人(岩見沢美園小) |
| 〈地区幹事〉 | |
| ・ 北地区幹事 | 佐藤 浩之(深川小) |
| ・ 中地区幹事 | 坪江 潤(上菅別小) |
| ・ 南地区幹事 | 松田 一直(美唄中央小) |
| ・ 東地区幹事 | 渡辺 禎(長沼中) |
| 〈道中役員〉 | |
| ・ 道中会長 | 全日中副会長 |
| ・ 対策部副部長 | 鎌田 浩志(岩見沢北村中) |
| ・ 対策部幹事 | 井村 信(岩見沢豊中) |
| ・ 対策部幹事 | 河村 克也(滝川江陵中) |
| ・ 対策部幹事 | 井畑 靖彦(栗山中) |

(岩見沢市・岩見沢中央小 喜多 慎治)

胆 振



洞爺湖

胆振管内校長会は、管内二市町、小学校六七校、中学校四二校（含併置校二校）義務教育学校一校の一〇校、一一〇人の校長によつて構成されている。一市町中、苫小牧市が小・中ごとの校長会を組織しており、管内校長会としては一二校長会から成り立っている。

一 運営・活動方針

本会は、子供たち一人一人に「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」といった生きる力を育むとともに、保護者や地域住民の負託と信頼に応え、管内教育の充実と発展のために努力を積み上げてきた。今年度は、土井会長のもと、時代の要請や新学習指導要領の理念を実現するために、「チームとしての学校」への改善充実に努めることを主たる活動方針に、教育改革の着実な推進、今日抱える教育的課題の解決に取り組んでいる。

1 活動方針

- (1) 校長としての識見・能力を高めるため、自ら研さんに励むとともに組織の

リーダーとしての指導力を培い、時代の要請や新学習指導要領の目標を実現するため、「チームとしての学校」への改善充実に努める。

- (2) 会員相互の信頼関係を基盤として、組織の充実・強化に努めるとともに、校長会の総力を結集して、迅速且つ適切に諸問題の解決に努める。

- (3) 教育関係機関や諸団体との連携を強化し、働き方改革を中心とする、今日的な課題の解決に努める。

2 活動の重点

- (1) 校長としての職能向上を図る研修の充実
- (2) 学校経営の適正化を図る研究・実践及び教育条件の整備・充実
- (3) 教職員の意識改革と資質・能力の向上による学校改善と後継者の育成（教員のキャリアデザインへの働き掛けと、女性教員の積極的な登用）
- (4) 道小・道中、第四ブロック、各市町校長会との組織的な連携重視と行政諸機関や関係団体との連携強化と働き方改革の着実な推進
- (5) 会員同士の親睦と福利厚生の充実に関する事業の推進
- (6) 諸事業の機能的・効率的な運営改善と予算執行の適正化

二 各部の事業推進概要

- 1 研修部～研修の活性化
- 2 経営部～組織・法制上の諸問題、法令・法規の情報収集や資料化
- 3 対策部～各種調査、福利厚生事の推進
- 4 情報部～会報・会誌「響箭」の発行

三 役員名

会 長	土井 嘉啓（苫小牧西小）
副 会 長	片倉 徳生（開成中）
	瀬川 恵（日新小）
運営委員	森田 芳明（糸井小）
	坂本 博（幌別中）
事務局 長	瀧澤 義守（西陵中）
事務局 次 長	阿部 聖司（長和小）
	菅林 秀樹（洞爺中）
研修部 長	松井 操人（拓勇小）
経営部 長	井内 宏磨（上厚真小）
対策部 長	鏡 武志（明野中）
情報部 長	吉岡ゆかり（厚真中央小）
計 画	山下 文人（礼文華小）
	大塚 志保（鷓川中央小）

（厚真町・厚南中 石田 憲一）

日 高



新ひだか町
英傑シャクシャイン像

日高地区校長会は、管内の小・中学校四二校（中学校一五校）の校長により組織されており、日高の教育課題の解明のため積極的に提言し行動する校長会を目指し、活動を推進している。

一 活動方針と活動の重点

日高地区校長会は、結成以来、真摯な研究と実践を積み重ね、学校が公教育としての役割と使命を果たすため、管内教育の諸課題の解明と教育の質の向上に取組多くの成果をあげてきた。しかし、学力向上や新学習指導要領の全面实施に向けた教育課程の組織的な改善、いじめ・不登校等の生徒指導上の問題、教職員の服務規律、教職員の資質向上等、様々な課題が山積している。特に学校運営の組織化、後継者育成の問題は地区校長会として継続した重点課題として取組を進めている。このような現状を踏まえ、校長会の機能を生かし、各会員の取組を発信、共有化を進めることにより、指導性を発揮し、管内教育の充実に努めている。今年度は新型コロナウイルス感染症による各学校の対応状況を全

会員で交流、共有化した。

（活動の重点）

- 1 信頼と秩序に基づく学校経営の推進
- 2 社会に開かれた教育課程の編成・実践・評価・改善
- 3 教職員の資質・能力の向上と後継者の育成
- 4 研修活動による職能向上と組織体制の強化

二 各部の活動

1 研修部

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善における組織的な取組について、校長の指導性の向上を図るための研修を推進している。また、会員相互の研修を深めるために、研究活動の実践状況の交流・協議・検証の場として「管内小中学校長研修会」を年一回開催、研究実践の状況や成果・課題の交流、協議の場として「研修部長研修会」を年四回開催している。今年度は新型コロナウイルス感染症対策のために小中学校長研修会を書面交流としたが、それ以外の研修活動は計画どおり行い、一定の成果をあげることができた。

2 法制・広報部

教育経営・法制研究の開催、校長会員の連帯を高める広報誌「教育ひだか」の発行を行う。今年度は規模縮小しながらも充実に努めた。

3 調査・厚生部

学校経営に必要な調査を道小・道中と連携しながら情報の共有化を図った。福利厚生については、主体的に研修を深め、厳しい共済制度に対して見通しをもち、支援に努めている。

4 課題別研修会

平成二十八年度に新設された小中全校長を対象とした研修会で、日高管内における喫緊の課題について研修を深めている。今年度は日程を短縮し、半日日程で開催した。

5 教育課程特別委員会

全小中学校における新学習指導要領への対応を確実に推進させるため、実践事例の集約、発信を目的として発足され、令和元年度は一定の成果があったが、今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため休止としている。

三 役員名

会 長	神成 浩（静内中）
副 会 長	阿部 秀智（厚賀小）
副 会 長	水上 義則（振内小）
事務局 長	品田 和輝（富川小）
事務局 次長	盛永 明寿（静内三中）
事務局 次長	小嶋 範彦（えりも小）
事務局 次長	木田 理博（荻伏中）
計 画	木田 理博（荻伏中）

（新ひだか町・静内中 神成 浩）

十 勝



十勝地区は管内一八町村の小・中学校長の九四人で構成されている。本校長会は「校長の教育実践指標」を掲げ、会員相互の研さんに励むとともに、公教育の役割と使命の高揚に努めてきた。そして創意と工夫に富んだ学校経営と教育活動の推進で、十勝教育の充実・振興に多くの成果をあげてきた。

また、校長一人一人が一校を預かる責任者であり「子供の成長に責任を負う」という態度のもとに十勝教育の推進・発展に寄与するよう努めてきたところである。

今年度は「コロナ禍」を見据え、活動の中止や修正を行いながら、今できる最大の連携協力により「十勝らしい一人一人の学びの実現」を合言葉に、保護者・地域とともに「子供の確かな育ちの創出」に努めてきた。

一 活動方針・重点

- 1 信頼に基づく創意工夫に満ちた活力ある学校経営に努める。
- 2 協働体制の確立と信頼関係の深化を図り、組織体として機能の充実に努める。
- 3 研修を深め、主体性を確立し、教育上

の諸問題の解決に努める。

- 4 地域社会・関係機関との連携を強化し、教育諸条件の整備に努める。
- 5 待遇改善・福利厚生等の向上を図るため、情報交換と要望活動の充実に努める。

二 各部の活動(予定していた主な業務内容)

1 研修部

- (1) 第一八次教育研究三か年計画一年次の推進(第五二回十勝小・中校長会教育研究大会の開催)
- (2) 教育研究大会の研究収録の発行
- (3) 道小・道中研修部との連携(地区活性化支援事業への参加等)
- (4) 全国・全道校長研究大会への参加促進(道小研第九分科会での提言)
- (5) 情報誌等を通じた教育情報の提供

2 経営部

- (1) 第五四回十勝・帯広地区教育経営・法制研究会の開催
- (2) 「学校運営にかかわる調査」「人事異動調査」の実施と調査報告書の発行
- (3) 北海道教育公務員弘済会との連携(教育研究実践校助成事業等)

3 対策部

- (1) 「十勝教育・学校の顔」の発行
- (2) 「教育懇談会」の運営
- (3) 「退職校長感謝激励の会」の運営
- (4) 令和二年度「十勝・帯広 校長・教頭・主幹教諭名簿」の発行
- (5) 全道・管内学校給食研究協議会への

協力

- 4 情報部
 - (1) 会報「十勝川」の発行(年間三回)
 - (2) 各町村校長会情報部との連携、各種情報の提供
 - (3) 道小会報、道中会報等への寄稿

三 諸会議

- 1 総会(四月) 活動計画・予算・役員
- 2 町村会長会議(年一回)・事務局長会議(年二回)
- 3 評議員会(年一回)
- 4 常任委員会(月一回)

四 十勝小・中校長会役員

会 長	喜多 敦(幕別中)
副 会 長	横山 利幸(浦幌小)
副 会 長	沼田 拓己(音更小)
事務局 長	長江 教貴(大樹中)
次 長	高瀬 悟史(駒場小)
会 計 長	橋本 靖宏(札内中)
会 計 次 長	野村 勉(緑南中)

五 役員一覧

代 表 者	喜多 敦(幕別中)
事務局 長	長江 教貴(大樹中)
会 計 担 当	橋本 靖宏(札内中)
経 営 担 当	玉川 弘幸(瓜幕中)
研 修 担 当	中村 俊緒(足寄中)
対 策 担 当	阿部 立(共栄中)
情 報 担 当	小林 善仁(瓜幕小)

(幕別町・札内中 橋本 靖宏)

帯 広 市



ばんえい競馬

帯広市中学校校長会は、一四校の校長で構成している。今年度は、新会員三人を迎え、東海林弘哉会長を中心に、コロナ禍の諸課題に一致協力して取り組んでいる。

はじめに
帯広市中学校校長会は、全日中新教育ビジョン「学校からの教育改革」、道中「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創造していく日本人を育てる中学校教育」、帯広市教育基本計画の理念「ふるさとの風土に学び 人がきらめき 人がつながる おびひろの教育」、帯広市校長会の方針「未来を切り拓く資質・能力を身に付けた帯広っ子の育成」変革を恐れず、新たな風を創る校長会Ⅱ」を踏まえ、校長としての主体性と指導性を持ち、中学校教育を推進し、帯広市民の負託に応えていく。

一 運営方針

1 校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、今後に向けた組織の充実・強化を図り、会の総力を結集して活動の効率化と諸課題の解決に努める。

二 活動の重点(年度重点課題)

- 1 校長会の組織を強化し、活動の充実に努める。
 - コロナ禍における校種間の学びをつなぐ取組の充実と行動連携(エリアファミリー連携の一層の充実)
 - 危機管理上の迅速な対応(報連相)
 - コミュニティ・スクールの推進と教育大綱への位置付けや首長部局との連携の促進
- 2 教育課題の解決を図り、学校経営の改善に努める。
 - 社会に開かれた教育課程の実現
 - オール北海道「確かな学力の育成」への取組
 - 教職員の服務規律保持の徹底
 - 危機管理・コンプライアンス研修強化
 - 不祥事ゼロの取組
 - 働き方改革の推進(北海道アクションプラン、帯広市立学校における働き方改革推進プランの発行)
- 3 校長会の組織を強化し、活動の充実に努める。

部活動休養日の完全実施や学校閉庁日

の設定・校務分掌のスリム化などの諸課題への適切な対応

3 教育課程の整備・充実と特色ある学校づくり、確かな学力、体力の向上に努める。

- 学校教育目標や教育課程の編成方針を地域や家庭と共有する取組
- 新学習指導要領の趣旨を踏まえた組織的な授業改善の推進
- いじめ・不登校の問題への適切な対応と生徒指導体制の強化
- 多様化した高等学校教育並びに入学者選抜方法への適切な対応
- 防災教育・安全教育の推進

三 役員

- 4 円滑な教育活動推進のための教育諸条件の整備・充実に努める。
 - 校長の人事権の尊重、人事異動要綱に基づく適正な配置
 - GIGAスクール構想に向けた取組の調整(臨休への対応)

会 長 東海林弘哉(南町中)
副 会 長 藤崎 慎人(帯二中)
事務局 長 能戸 貴英(帯八中)
事務局 長 春山 俊裕(帯四中)
研修部 長 堂山 貴也(帯七中)
計 黒島 俊一(大空中)

(帯広市・帯七中 堂山 貴也)

釧 路



釧路湿原の神
「タンチョウ」

釧路校長会は、令和二年度、採用一人の新会員を迎え、六町一村四六人（小学校長二四人、中学校長一七人、小中併置校長四人、義務教育学校長一人）で構成している。

今年度、佐野哲哉会長を中心に、本会が歴史的な背景をふまえて作り上げてきた釧路校長会の理念「調和ある学校運営を目指して」の五項目の方針を全体で確認し活動を開始した。

一 基本方針

本会は、常に「釧路校長会綱領」を基底に、釧路の教育の発展・充実に期する「学校経営にあたっての基本的な姿勢を堅持し、「つなげる」「確かめる」という管内教育推進のキーワードをもとに、子供のために最善を尽くす校長会として、関係機関との連携協力を密にして、保護者や地域の信頼に応える学校経営を推進するよう努力する。

【釧路校長会綱領】

私たちは釧路教育の充実、発展に重要な役割を果たし、子供の未来に責任を負う者として、ここにこの綱領を定める。

- 一、校長の使命を自覚し、常に厳しい自己研さんに努める
- 一、情熱と強固な意思をもって、公教育の推進に努める
- 一、たがいに強い連帯感をもって、職務の遂行に努める
- 一、職員相互の信頼関係を基盤とした学校経営に努める
- 一、釧路の風土に生き、未来を拓く子供の育成に努める

二 本年度の運営方針

- 1 校長としての経営ビジョンを明確にし、その職責の重さを自覚して「釧路の風土に根ざす学校づくり」の経営感覚を磨き、その実践力を高めるために職能の向上に努め、諸課題を解決する。
- 2 教職員として服務規律を徹底し、地域や保護者からの信頼や期待に応え、「安心・安全」を志向する学校経営をする。
- 3 新学習指導要領の完全実施に伴ってこれからの時代に求められる資質・能力などの児童生徒の「生きる力」を育む教育課程を編成・実施・評価し、改善を図りながら自校の課題解決にあたる。
- 4 教育関係諸団体、特に町村教育委員会

三 活動の重点

- 1 学校経営の充実
 - ・学校における働き方改革の推進
 - 2 創意ある教育活動の推進
 - ・教育の質の向上
 - ・男女平等教育の推進
 - 3 組織の充実と強化
 - ・後継者の育成
- と町村校長会との連携協力を密にし、教育の動向や情報の共有と諸問題への対応と解決に向け迅速に行動する。
- 5 円滑な学校経営を目指し、釧路校長会綱領の趣旨に基づき会員個々の意識を高めるとともに相互の絆をより一層深める。

四 役員

- 会長 佐野 哲哉（厚岸町真龍小）
- 副会長 湊谷美樹治（釧路町富原小）
- 副会長 水野 秀哲（標茶町標茶中）
- 事務局長 佐藤 毅（白糠町白糠中）
- 事務局次長 田中 敏行（鶴居村鶴居小）
- 会計 中岡 美緒（弟子屈町川湯小）
- 釧研所長 福原 克洋（白糠町庶路学園）
- 監査 武山 昇（釧路町富原中）
- 監査 西澤 和訓（厚岸町厚岸中）
- 研修部長 小川 一法（厚岸町太田小）
- 経営部長 大西 展史（弟子屈町弟子屈小）
- 対策部長 佐藤 敬喜（釧路町別保小）
- 情報部長 佐藤 岳彦（浜中町霧多布中）

（標茶町・標茶中 水野 秀哲）

釧路市



釧路港の夕日

令和二年度釧路市中学校長会は、五人(新採用一人)の新会員を迎え、一五人(併置校一校)でスタートした。秋保和久会長のもと、今日的な教育課題についての研究や、生徒指導上の諸課題について、具体的な事例をもとに研究協議を行い、校長としての資質及び職能の向上に努めている。

一 活動方針(概要)

- 1 校長は「命の尊さ」を強く打ち出し、危機管理意識の醸成、及び危機管理の対応(含自然災害)について学校経営に継続的に取り組む。
- 2 校長は、指導性・先見性を発揮し、教育課程の方針等を家庭や地域と共有する「社会に開かれた教育課程」の実現に努める。また、教育効果を高める「カリキュラム・マネジメント」の積極的な取組を推進する。
- 3 服務管理の適正化に努め、秩序ある学校運営を推進する。
- 4 自校の最高責任者という責任と自覚をもち、これからの時代の学校の在り方に

迫る強い意志と気概をもつ。

- 5 制度的な改革に具体的な対応ができる校長として、必要な職能及び専門性を向上させる研修を組織的に推進する。
- 6 校長会組織としてのかかわりを大切にするとともに会員相互の情報共有をより一層深め、一枚岩の姿勢で取り組む。
- 7 各種校長会と連携を深めるとともに独自性を発揮しながら、各部の活動の円滑な進め方を共通理解する中で、効果的な組織運営に努める。
- 8 教育局・教育委員会並びに釧路校長会との連携を密にし、教育環境や管理、勤務条件等の整備促進に努める。
- 9 校長会としての地位の確立と主体性を高め、職能組織としての充実と会員相互の結束強化及び親睦を図る。

二 活動の重点(概要)

- 1 学校経営
 - (1) 釧路市教育行政方針や地域の特性を基盤とした創意ある学校経営
 - (2) 生きる力の育成を目指した教育課程の編成・実施・改善及び新学習指導要領の円滑な実施
- 2 研修
 - (1) 教育界の動向と教育課題を勘案した計画的・継続的な研修の充実
 - (2) 職能向上のための研修会の企画と、生徒指導上の課題の交流と対応

3 組織運営

- (1) 学校運営に関する法制問題の調査研究
- (2) 会員相互の理解と連携を深める広報活動
- 4 教育条件
 - (1) 行政機関(教育局・教育委員会)との連携強化
- 5 厚生
 - (1) 道小・道中、互助会との連携を密にした会員の福利厚生に関する業務の推進
 - (2) 親睦懇親会の開催等による会員や教育関係者との相互理解・連帯感の高揚

三 主な活動

- 1 法制研修の推進等
- 2 学校教育経営研究会等
- 3 学力向上についての調査等
- 4 生徒指導についての調査・研究等
- 5 高等学校、高専との情報交換交流

四 役員名

- | | |
|-------|------------|
| 会 長 | 秋保 和久(幣舞中) |
| 副 会 長 | 佐藤 一浩(景雲中) |
| 事務局 長 | 伊藤 晃一(共栄中) |
| 会 計 | 松岡 伸之(北 中) |

(釧路市・桜が丘中 青木 悟)

根 室



秋の春国岱

一 はじめに

夢を語り、未来を語るに相応しいこの広大な大地に、根室管内小中学校校長会は深く根をおろし、子供たちが心豊かにたくましく生き抜いていく力を身に付けることができよう活動を推進してきた。

本会は、四一の小中学校の校長が強固に連携しながら、その活動に係る工夫と改善を重ねている。特に今年から効率化を図るための組織改編を行った。

学習指導要領改訂や教育の情報化、働き方改革等への対応など、課題が山積しているが、コンパクトになった組織で校長のコミュニケーション能力を発揮し、最大限の効果を生み出したいと考えている。

しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から活動の制限を余儀なくされ、活動の柱である根室管内小中学校校長研究大会等が中止になった。

このような非常事態に対応すべく、校長同士の間を大切にしながら、根室管内として「行事の延期」「長期休業期間の目安」

「部活動の開始時期」等を各校が揃えるよう調整した。

二 運営方針

『確かな継承と着実な発展』

～自らの意思と協働の力を軸に～

1 教育をめぐる諸情勢を的確に捉え、全道・全国的な課題や校長の抱える問題を組織として共有化を図り、その解決に向けた情報提供に努める。

2 信頼される公教育の確立を図るため、一連の教育改革を的確に把握するとともに、その具現化を目指し、法規等に基づき、地域や学校の実情に応じて、教職員の創意を生かした教育の推進に努める。

3 教育局や市町教育委員会、道小・道中校長会との連携を図り、地域に開かれた学校経営の改善・充実に努める。

4 常に研さんに励み、校長をはじめとした全教職員の資質や協働意欲の向上に努める。

5 会員相互の連帯意識を強め、信頼関係を基盤にした組織の強固な体制作りと校長会の主体性の確立に努める。

三 活動の重点

1 信頼と秩序に基づく学校経営

2 社会に開かれた教育課程の実現及び教育課程の編成・実施と評価・改善

3 研修活動の充実

4 道小・道中と連動した教育条件の整備と充実

5 教職員の待遇改善

6 校長会業務の推進と組織の強化

四 主な活動内容

1 根室管内小中学校校長研究大会の中止
研究主題に基づき、一人一レポートを持参しての研究協議を予定していた。

2 根室地区教育経営研究大会の中止
北海道小学校長会・北海道中学校長会幹部による教育情勢等の解説をもとに、諸課題を解明することを目的とした。

3 定例理事研修会の開催
各市町単位校長会の活動を交流し、課題と改善策について協議した。また、北海道教育庁根室教育局から教育の動向や今日的課題について情報提供を頂いた。

五 今後の展望と課題

管内的な研究大会等は中止となったが、各市町校長会では管内的に喫緊の課題である後継者育成にむけた研修会が行われている。校長として「対応力」が求められている今、できることは何かを考え、連携して根室管内校長会として活動していきたい。

六 令和二年度役員体制

会 長 志道 仁(中標津中)

副 会 長 小川 一(根室成央小)

副 会 長 近藤 康(別海上西春別小)

事務局 長 二本柳千尋(根室啓雲中)

会 計 佐藤 玲子(別海上春別小)

(根室市・啓雲中 二本柳千尋)

オホーツク



知床五湖と知床連山

オホーツク管内校長会は、オホーツクの教育の充実・発展のため、心豊かでたくましい子供の育成に鋭意努力を重ね、組織の総力を傾注して研究と実践に努めてきた。

今年度は、一六人の新たな会員を迎え、小学校七六校、中学校四四校、小中併置校一校、義務教育学校三校の計一二四人の校長で組織されている。

これまでの成果を踏まえ、「オホーツクの子供たちのために、志を高く掲げ、力強く前進する校長会」のスローガンの下、創意と活力に満ちた学校づくりに努めている。

一 活動方針

- 1 ふるさとの地から世界を見つめ、新しい社会の形成に向けて挑戦する子供を育成するため、「チームオホーツク管内校長会」として、関係機関との連携をより一層強化し、管内的な取組を通して課題解決に努め、以て、地域・保護者の信託に応える学校経営を推進する。

- 2 自らの使命を自覚し、リーダーシップと指導力を発揮して、学校組織の活性化

と職員の資質・能力の向上等に努め、活力ある学校づくりに全力で取り組む。

二 活動の重点

- 1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の推進に努める。
- 2 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施と評価・改善に努める。
- 3 子供理解を深め、時代の変化に即した生徒指導の充実を努める。
- 4 校長の資質・能力の向上を図る研修活動の推進に努める。
- 5 教職員の資質・能力の総合的な向上に努める。
- 6 組織内や関係機関との連携による組織の強化に努める。
- 7 教育諸条件を把握し、その改善と整備・充実に努める。
- 8 教職員の処遇の改善に努める。

三 各部の活動計画

- 1 研修部
 - (1) 第六三回 道小教育研究 オホーツク・北見大会の開催(中止・誌上交流)
 - (2) 第四八回 オホーツク管内校長教育研究大会(中止誌紙上交流)
 - (3) 市町村・ブロック研修会(中止)
 - (4) 道小・道中全道大会、全国研究大会への参加促進と研究交流(中止)
 - (5) 教育課程に係る調査への協力
- 2 情報部
 - (1) 「会員の顔」の発行
 - (2) 道小・道中及び全連小・全日中と連

携した広報活動

- (3) ホームページの更新

3 経営部

- (1) 地区別教育経営研究会の開催(中止)
- (2) 学校経営に関する調査の実施
- (3) 管内における諸課題の把握と分析

4 対策部

- (1) 管内の教育課題を集約した学校経営資料の提供
- (2) 道小・道中関係の諸調査への協力

四 役員一覧

会 長	吉田 昌広(網走小)
副 会 長	森田 穰(遠軽小)
副 会 長	垣内 孝仁(網走第二中)
監査委員	山口 英世(津別小)
監査委員	岡田 陽子(紋別上渚滑小)
事務局 長	片桐 聡(北見三輪小)
事務局 次長	佐藤 雅美(網走南小)
事務局 次長	佐藤 和俊(北見東小)
事務局 次長	緒方 隆人(北見北中)
事務局 次長	橋本 正之(おんねゆ学園)
事務局 次長	徳増 秀隆(北見留辺蘂中)
計 画	天野 昌明(北見上常呂小)
研 修 部 長	沼田 泰彦(網走中央小)
情 報 部 長	伊井 俊明(北見美山小)
対 策 部 長	平田 和史(北見小泉中)
経 営 部 長	工藤 知義(雄武小)

(北見市・留辺蘂中 徳増 秀隆)

札幌市



札幌時計台

札幌市中学校長会は、市立中学校九七校と北海道教育大学附属札幌中学校、北翔養護学校、市立札幌開成中等教育学校を加えた計一〇〇人の校長で構成されている。

今年度も、葛西孝之会長の下、副会長六人、会計一人、事務局長一人が役員として会務を担うとともに、道中体連会長、各部部长七人、監査委員二人、事務局員七人の計二十六人で理事研修会の運営にあたる。

一 活動方針

市民の負託に応え信頼される中学校教育を推進すべく、「教育の動向を的確に捉える、保護者や地域、関係機関等との連携を図る、会の組織と機能を一層充実させる」を基本に校長としての研さんと職能の向上を目指す。また、「学校の正常な教育活動の再開と推進」、「学校における働き方の見直し」等を含め、今年度の重点項目は以下の四つである。

- ・校長会の組織・運営の強化と研修の充実
- ・学校経営の改善と充実
- ・学校経営の条件整備と教職員の待遇改善
- ・教育関係機関や諸団体との連携強化

二 各部会の運営の方針

〈管理部〉

- ・学校経営上の管理、運営についての現状把握と分析を行い、課題の解決を図る。

〈施設部〉

- ・長期的展望に立った学校施設・設備の整備・充実、情報教育に関わる施設・設備や学習環境に関する諸課題の改善、充実に努める。

〈研究部〉

- ・研究基本主題による共同研究を総括し、校長としての職能向上を目指すことにより、中学校教育の充実・発展に努める。

〈指導部〉

- ・生徒の実態を的確に捉え、問題行動の質的变化にも適切に対応できる生徒指導の在り方について検討する。

〈保健体育部〉

- ・全市的立場で生徒の心身の健康及び保持増進と体育・スポーツの充実発展を図る。

〈進路指導部〉

- ・キャリア教育の視点に立った進路指導の充実を図り、適正な学校経営を行うための研究と条件整備にあたる。

〈特別支援教育部〉

- ・特別支援教育に関する諸問題について研究協議し、その推進と充実を図る。

三 具体的な運営・活動

- 1 「例会・研修会」は、メール開催が四回、全会員が出席しての開催を六回予定。

- 2 「理事研修会」は、例会・研修会の前週

に二六人の理事の出席で開催され、運営に関する協議、議題の整理等を行う。

- 3 「部会」(七部)は、年に数回設定され、担当する諸課題に取り組んでいる。

- 4 「各区校長会」(二〇区)は、行政区ごとに設置され、区内の情報交流や課題に応じた協議、検討、研修等を行っている。

- 5 「学教連絡会」では、幼小中高の四種校長会代表と市教委が一堂に会し、情報交流等を中心に連携を深めている。

- 6 「小・中学校生徒指導特別委員会」は、小・中学校長会代表と関係機関で構成され、生徒指導上の諸課題について、連携・協力を深めている。

四 研究活動

研究基本主題「新たな未来を紡ぎ、よりよい社会を創る力を育む札幌市中学校教育」を掲げ、三年継続の研究が行われ、本年度は二年目となる。七つの部がそれぞれ教育課程や学校経営、生徒指導、教育環境等の視点から課題の究明に取り組んでいる。研究成果は、一月の「全体研修会」で全会員に発表され、三月には「研究紀要」として発行される。

また、札幌市中学校長会は、政令指定都市中学校長会で構成する「大都市中学校長会連絡協議会」に加盟しており、本年度、堺大会の参加が予定されていたが、新型コロナウイルス感染症の影響により開催中止となった。

(札幌市・中島中 高橋 利幸)

北海道

風土記



カムイヌブリと朝日～鷲別岳からの眺望



ユウバリソウ



大沼とイワオヌブリ



支笏湖の眺望～恵庭岳から



晩夏の大森浜



裾合平のチングルマ

小さな村の意外な歴史

泊村・泊中

浦 奇 昌 明

泊村は、村内を縦走する国道二二九号に沿って点在する五つの集落から形成され、東西が一・八km、南北が一四・六kmに渡って北海道の西部、積丹半島の南西に位置しています。総面積八二・三五平方km、人口一、五五六人（令和三年一月三十一日現在）の日本海に面した複雑な海岸線を有する村です。

村名の由来は、アイヌ語の「ヘモイトマリ（マスを寄せる入海）」に由来しています。海の幸が豊かで、海の幸が豊富だったことがうかがわれます。

かつては、栄華を極めたにしん千石場所も、海辺に残る石垣や狭い道路の家並みに、その面影をとどめるに過ぎなくなりました。ひところ、四季を通して量を求めた得た前浜も資源の枯渇とともに漁業を取り巻く時代の趨勢には勝てず、衰退の傾向にありました。が、近年は、村の政策でホタテなど獲る漁業から育てる漁業への転換が図られています。

また、安政三年に燃える石の発見から幾多の変遷を見た本村茅沼地域の炭鉱は、五〇〇万tの埋蔵量を残しながらも、エネルギー



ギー革命には勝てず昭和四十四年、その歴史にピリオドを打ちました。その後、北海道唯一の原子力発電所が建設され、北海道全体の電力の約四割を供給することとなりました。

上の写真は、茅沼炭鉱軌道の写真です。昭和六年まで坑口から海岸まで走っていました。実はこの軌道は日本最古の軌道で、新橋・横浜より古く明治二年にできました。とはいえ、最初は木製軌条のトロツコだったらしいです。

昭和六年には岩内まで架空索道（写真左：空中に渡したロープに吊り下げた輸送用機器に人や貨物を乗せ、輸送を行う交通機関）ができて廃止になりました。その索道も昭和二十一年に茅沼炭鉱専用鉄道ができて大幅に縮小されました。

しかし、昭和三十一年に廃止されるまで実に九〇年あまりにわたって、村の産業の中核として、北海道や日本の産業発展のために重要な役割を果たしました。

また、江戸時代から明治時代、ニシン漁で賑わったことは有名ですが、泊村でも明治中期より大正末期までは「にしん」の千石場所



として栄え、村が大きく発展しました。

最盛期は村に五〇を超える鯨番屋が建ち並び、にしん漁によって膨大な富がもたらされました。その歴史が現在も「鯨御殿とまり」（写真上）に残されています。

館内には、にしん漁やしん加工に使われた道具や、番屋で暮らした人々の生活用具や写真などを展示しています。

明治二十七年に親方の川村慶次郎氏によって、漁場を経営する親方と雇った漁夫たちが共同生活をするために、独特の構造で建てられた『旧川村家番屋』と、大正五年頃に武井忠吉氏によって母屋と棟続きで建設された『旧武井邸客殿』は、移築、復元されたもので、どちらも鯨漁が盛んだった当時の姿をいきいきと再現されており、平成十三年に泊村で初めて有形文化財に指定されています。

実は、小樽の水族館近くにある鯨御殿（写真下）は、はじめから小樽に建てられたものではなく、泊村から昭和三十三年に移築復元されたもので、意外と知られていないのではないのでしょうか。



昭和期における小樽の横顔

小樽市・望洋台中

伊藤 仁 弥

小樽市は、北海道では長い歴史を有しており、明治になり蝦夷地を「北海道」と改めて本府を札幌に定めると、海の玄関口である小樽に「人」や「物」が集まるようになった。小樽港は道内各地への開拓民の上陸や物資陸揚げの港となり、昭和初期にかけて金融機関や船舶会社、商社などが進出して北海道経済の中心都市として発展した。戦後、札幌市が北海道の中心都市として発展すると小樽は斜陽を迎えることとなる。「運河論争」を機に明治後期から昭和初期にかけての歴史的建造物を観光資源として見直し、二〇〇八年（平成二十年）小樽市議会定例会において、「小樽観光都市宣言」が決議され観光都市として脚光を浴びるに至った。そんな小樽の知られざる「賑わい」について触れてみたい。

《映画館》

一九二五年（大正十四年）、小樽市の人口が二万四、〇〇〇人に對して、映画が上映できた劇場はすでに一〇館あったとのこと。戦時中は洋画



の上映が禁止され、日本ニュースが強制的に上映され、各地で営業停止の映画館が相次いだようである。戦後、一九五三年（昭和二十八年）には、全道に先駆けてシネマスコープ劇場としてスパル座が新しく発足した。一九五〇年代半ば、映画館は急激に増加して二三館にまで達した。小樽の人口比八、〇〇〇人に一館の映画館をもつ、道内随一の映画館の街になった。しかし一九六〇年代には、映画人気にも陰りが見え始め、一九八〇年代は相次いで閉館する映画館があり、一九八七年の入場者数は、全盛期の六〇分の一になったとのこと。一九九四年、古い歴史をもつ小樽中劇会館が閉館、翌年には小樽最後の単独映画館「小樽東宝スカラ座」が、二〇〇〇年には丸井マルサデパート内の三つのミニシアターも閉館になり、「小樽、映画の時代」が事実上幕を下ろすこととなった。

《オタモイ遊園地》

オタモイの海岸に、二〇年ほどで姿を消したまぼろしの遊園地がある。昭和初期にできた「夢の里オタモイ遊園地」だ。戦争に翻弄されながらも、演芸場や大衆食堂、遊具広場がそろう行楽地で、夏は海水浴客で賑わった。なかでも人気を集めたのが断崖に立つ高級料亭「龍宮閣」だった。オタモイ遊園地を造ったのは、愛知県出身の花園のすし店主の加藤秋太郎。



龍宮閣は一九三四年に完成し、二年後には遊園地が開園した。夏場には一日で数千人が訪れる行楽地になった。しかし一九三九年に豪雪で演芸場が倒壊し、更に深刻だったのは第二次世界大戦の激化だった。行楽を自重する風潮が強まり経営を他者に譲る形となった。戦後も不運は続き、一九五二年に龍宮閣は漏電が原因で全焼した。

《デパート》

かつて、小樽には三軒のデパートがあった。現在の掖済会病院の場所にあった「ニューギンザ」、札幌の老舗百貨店「丸井今井小樽店」、そして写真の「大國屋」である。



ここには現在、オーセントホテルが建っている。大國屋は一九三四年（昭和九年）創業の、小樽で最初のデパートであった。惜しまれつつ一九九三年（平成五年）四月で閉店するのである。昭和四十年前後、多くのデパート屋上などには、ミニ遊園地があった。これらの三軒にもあったように記憶している。大國屋はなんとといっても、海側正面玄関右側にあった、創業当時昭和九年製のエレベーターが名物であった。手動の蛇腹ドアが装備され、エレベーター操作とフロア案内をする女性が常駐していた。更に驚くのは、エレベーターボックスがどの階にいるのかを示す表示がランプではなく、アナログ（針）になっているのも見る者の興味を引いていた。

「風車の町」苫前町

〜クリーンな食と

エネルギー〜

苫前町・古丹別中

沼倉 修

苫前町は留萌管内のほぼ中心に位置し、海側に苫前地区、山側に古丹別地区と大きく二つの地区に分かれており、両地区に小学校・中学校が設置されています。人口は現在三、〇〇〇人あまりです。昭和三十年代には一万一、〇〇〇人を超えた人口もその後毎年々減少しています。

その歴史は古く、六、〇〇〇年前の遺跡から土器や矢じりなどが発見されており、人が住み始めたとされています。それから江戸時代（慶長年間）には松前藩がトマイ場所を開いたことが町名の発祥となりました。

産業では、ホタテを中心とした漁業と水産加工業、稲作を中心に、メロン、トマト、豆類などを生産する農業と酪農が中心です。

【風車の町のクリーンエネルギー】



留萌市から海岸沿いに国道二二三号、通称「オロロンライン」に車を走らせると数多くの大きな白い風車が目にとまります。国内初となる大規模風力発電所であり、二〇基程の風力発電機が並ぶ「上平

グリーンヒルウインドパーク」は平成十三年に「美しいまちなみ賞」を受賞するなど、観光名所となっています。発電した電力は売電し、有料ゴミ袋代の助成などで広く町民に還元されています。

【クリーンな食づくり】

苫前町では、北海道全体で行っている「クリーン農業」を土台としながら、農薬や肥料を更に開発・改良した「クリーン農業技術」を導入し、安心・安全な食作りをおこなっています。また、最近ではスマート農業を導入し地理情報システムを利用した自動操舵トラクターやドローンによる農薬散布、ハウスの自動開閉など先進技術を取り入れた事業に取り組んでいます。

【三毛別ヒグマ事件】

『罷風』というタイトルで小説やドラマ化され、別タイトルで映画化もされました。私も少年時代にテレビの「ロードショー」で見て、それから何度か熊に追われる夢にうなされた記憶があります。大正四年十二月に野生のエゾヒグマが数度にわたり開拓民の民家をおそい、住民七人が死亡、三人が重傷を負う史上最悪の被害を出した事件となりました。当時で二〇〇人という大討伐隊が組織され、最後は射殺に至ったこのヒグマは、重さが三七〇kg、体長は二・七mという巨大な個体だったそうです。現在その集落跡には、「三毛別罷事件復元地」が作られ、観光スポットとなっています。



【観光名所】

国道二二三号沿いに車を走らせると、道の駅「風Wとままえ」と書かれた標識が見えてきます。何と読むのかというと「風」が「ふ（う）」で「W」が「ワット」。風力発電がもじられた名称で「ふわっと」と読みます。そこには「とままえ温泉ふわっと」のほか、レストラン、売店、ラウンジや宴会場、宿泊室などの施設があります。露天風呂は日本海に面しており絶景で手売・焼尻島を一望することができます。好天時は、日本海に沈む美しい夕日が見られ人気があります。また隣には海水浴場のホワイトビーチや夕陽ヶ丘オートキャンプ場があり、夏場は御家族連れの方たちがたくさん訪れます。古丹別地区には、桜の名所「緑ヶ丘公園」があり、春には桜祭りが盛大に行われます。また海の幸や山の幸をふんだんに使った美味しい食事の名店も何件かあります。



【終わりに】

最後に、苫前町内各学校と社会教育課で二〇年以上続けている『学社融合事業』について御紹介したいと思います。社会教育課の働き掛けによって町内小・中学校では、農業や漁業、ダンスやニュースポーツなどの各種運動、太鼓や舞踊など地域芸能など、それぞれの専門家を地域内外より派遣していただき授業で大いに活用させてもらっています。

一度は訪れてみたい

食と夜景の魅力〜歴史にあふれ 縄文文化の息づく街・函館

函館市・榎法華中

齊藤 淳一

函館市は、渡島半島南部の中心に位置し、海や湖が陸地に入り込み、恵まれた地形であったことから、横浜・長崎と並んで日本初の国際貿易港としてペリーによって開港され、西洋文化がいち早く伝わり、北海道のみならず全国の中でも先進的な発展を遂げた近代文化の入り口としての歴史のある街である。

また、函館と言えば、世界一夜景の美しい街とか土方歳三終焉の地などでも有名である。特に夜景は市全体の人口減少が著しい現在でも「百万ドルの夜景」という呼び名に相応しい景観を維持しており、函館山からの夜の展望を体験しようとする観光客が絶えることはない。

函館の基幹産業の一つである漁業は、現在はコンブやスルメイカを中心とする



沿岸漁業が主流となっているが、かつては日本海、オホーツク海、ベーリング海に至るロシア領海にまで出漁しての、所謂「北洋漁業」が主流で、函館はその出漁基地として繁栄してきた。しかし戦前に隆盛を極めた北洋漁業は国際関係の狭間の中で様々な制約を受けるようになり、一九八九年の出漁を最後に、その歴史に幕を閉じることとなった。

もう一つの基幹産

業である観光業は、近年、函館経済の屋台骨を支えてきたと言っても過言ではない。特にイカなどをはじめとする海鮮・海産物は道内のみならず国内外の人々から人気があり、一度



は行ってみたい観光地の上位にランクインされてきた。宿泊場所には歴史のある老舗の湯の川温泉に加え、ここ数年、本州・国外からの観光客の増加に対応するための地元以外の資本による函館駅周辺でのホテルの建設も相次いでいる。

平成十六年十二月、函館市は、戸井町・恵山町・榎法華村・南茅部町と合併し、新しい函館市となった。これにより、従来の歴史や文化を中心とした函館市の魅力に加え、旧四町村のもつ自然の豊かさや景観などのバリエーションがもたらされた。また、旧南茅部

町にある大船遺跡と垣ノ島遺跡は、「北海道・北東北の縄文遺跡群」として令和元年、二度目の世界文化遺産推薦候補に選定され、閣議了解により国内推薦が決定し、教育関係者の世界遺産登録決定への期待も高まっている。

現在校である榎法華中は、かつては三〇〇人を超える生徒が在籍していた。急速な少子化の影響で、今年度は全校生徒二一人となっているが、豊かな自然環境に恵まれ、隣接する榎法華小との連携・一貫にも早くから取り組む、個に応じた指導の充実により、ここ数年、継続して高い学力を生徒にもたらしめている。

令和二年九月に函館市において開催予定であった北海道中学校長会研究大会は、残念ながらコロナ禍により開催を断念することとなった。様々な魅力にあふれる函館市での大会への参加を心待ちにされていた全道各地の会員の方々には、また別の形で函館市においていただけるよう心よりお願い申し上げます。



自然豊かで壮観な

「室蘭八景」より

室蘭市・東明中

笹原 正明

室蘭市は一八七二年の開港以来、港を中心に一〇〇年以上にわたり、製鉄・製鋼、造船等を基幹産業とする「ものづくりのまち」として発展してきました。

また、室蘭市には独特の食文化があります。豚肉と玉ねぎの串焼きに洋がらしをつけて食べる「室蘭やきとり」や北海道第四の味として、全国に発信されている「室蘭カレーラーメン」は御当地グルメとして、広く認知されている室蘭市民のソウルフードです。

一九七〇年に室蘭市民による投票等で選定された観光スポット「室蘭八景」より三景を紹介いたします。

《測量山》

室蘭市を一望できる展望スポットです。標高一九九・六mで天気の良い日は羊蹄山や遠くの駒ヶ岳、恵山岬まで見渡せます。野鳥の宝庫でもあります。



測量山からの景色

一八七二年に札幌本道を作る時、陸地測量道路建築長の米国人ワーフィールドがこの山に登り、道路計画等の見当をつけたことから「見当山」と呼ばれた後に「測量山」と改めたことに由来します。

また、山頂にあるテレビ塔はメッセージを添えて申し込むと、日没から深夜〇時までライトアップすることができ、昭和六十三年のライトアップ開始以来、絶やすことなく室蘭の町を照らし続けています。

昭和六年六月、この地を訪れた歌人・与謝野鉄幹・晶子夫妻が次のように歌っています。

我立てる 即涼山の 頂きの
草のみ青木 霧の上かな 鉄幹
灯台の 霧笛ひびき 淋しけれ
即涼山の 木の下路 晶子

《大黒島》

室蘭港の入口に浮ぶ標高三五m、面積二・四ha、周囲約七〇〇mの小島です



一七九六年、英国船プロビデンス号が来航した際に水兵のハンス・オルソンが事故死して島内に埋葬されてから、彼の死を慎むかのように黒百合が咲き始めたという伝説があり、「オルソン島」の名でも知られ

ています。

一八三八年から七年間、この地域の場所請負人であった岡田半兵衛が安全祈願のために島内に大黒天を祀ったことから「大黒島」と呼ばれるようになりました。

また、噴火湾を横断する水中トンネルの構想が起った際に、その実験トンネルとして、絵鞆半島から大黒島の間に水中トンネルの計画がなされたそうです。

《トッカリシヨ》

室蘭八景の一つ「地球岬」の東側に位置します。高さ一〇〇m前後の切り立った凝灰岩質の断崖の上を覆い尽くす緑のクマザサがイタンキ浜（鳴り砂で有名）の近くまで、まるで絨毯のように広がり、海の青色と奇岩の景観が灰色の断崖を際立たせている景勝地です。国の名勝「ピリカノカ」の一部に指定されています。

「トッカリシヨ」の語源は、アイヌ語の「トカル・イシヨ」（アザラシの岩）に由来し、現在は岩ではなく、展望台下の砂浜を指す地名となっています。かつては冬季になると、アザラシが群れをなして集まりましたが、殊にこの海岸の岩場に数多く集まったとのこと。



開拓の原動力が

生きる街・帯広市

帯広市・西陵中

福田 茂

帯広・十勝は、わが国有数の食料生産基地として、大規模な農業が営まれています。食糧自給率は一、二四〇%（昨年度）。近郊の畑作地帯では、GPS搭載の大型トラクターが精密に動き、更に生産性が向上しています。

開拓の原動力

明治の初め、十勝平野は「密林で覆われ昼なお暗い妖艶な様であった」とあります。そこを切り拓く。開拓の原動力となったのは馬でした。最初は厳しい気候風土に適した「どさんこ」が活躍しました。そして明治の末頃からより力のある農耕馬が求められるようになり、大型馬を輸入し改良が進みました。

体重は八〇〇〜一、二〇〇kgで、大型。力もちで性格は温厚、おとなしい。農機具を輓（ひ）く、曳（ひ）くから名付けられた「輓曳（ばんえい）馬」の誕生です。人間と苦勞をともにし、一緒に生きる家族だったそうです。これは帯広競馬場内の馬の資料館で調べることができます。



輓曳馬の力くらべ

初めはお祭りの余興として、綱引きで力くらべをしたのが、輓馬（ひきうま）レースの始まりです。ウチの馬がいちばん強いと「馬力」を競ったわけです。それがソリを引くレースに発展し、昭和二十八年「ばんえい競馬」として、帯広市、旭川市、北見市、岩見沢市で始まりました。馬券発行による売上高は昭和五十二年に二〇〇億円を超え、平成三年のピークで三二二億円。その後は景気後退により赤字が急速に拡大しました。他の三市が撤退する中、いったんは存続困難と判断したものの論議を重ね、帯広市は（赤字覚悟で）開拓の歴史を今に伝える馬文化を遺す決断をしました。その後、世界に唯一となったばんえい競馬は「北海道遺産」に選定されました。

分からないレース展開

当初は、馬の保護や関連産業の保守、新たな観光名所づくりの意味合いが強く、全国のファンや民間企業からの支援で何とか運営されていきました。ところがインターネットの普及が状況を変えました。自宅で馬券投票ができるインターネット取引により売上高は順調に伸び、また新型コロナウイルスによる「巣ごもり需要」の影響で、令和二年の上半期の売上高は二二六億円余り。帯広市の単独開催以降、最高に達しました。九割以上はインターネットによるものです。ばんえい競馬存続のレース展開は、逆転優勝のようです。

でも本場の迫力が一番。観戦するときには、

百円でも馬券を買おうと、応援に自然と力が入ります。帯広競馬場にお越しの際はぜひ、エキサイティングゾーンで応援してください。もうひとつの原動力？

以前、伊豆半島を旅行し日本一の夕陽を待つ間、名物の海鮮をいただくとうと食事処に入ると、メニューに「帯広豚丼」が。おいおい、帯広から来た人間に豚丼とは。

半島西側の大沢村（現：松崎町）は、とかち開拓の父、晩成社の依田勉三の故郷でした。豪農で栄えた依田家の三男として、慶應義塾に学び北海道開拓の志を立て、渡部勝らとともに帯広開墾にあたりました。苦勞が絶えず、勝が「おちぶれた極度か豚とひとつ鍋」（豚の餌と勘違いするほど粗末な食事だった）と嘆いたとき、勉三は毅然と「開墾のはじめは豚とひとつ鍋」と詠んだとされ、銘菓の名にもなりました。豚と寝食を共にするような生活だったようです。

その勉三が故郷を想い、故郷のうな井がどうしても食べたくて、しかしうなぎはありません。そこで豚肉にたれを絡めて焼き、御飯にのせて食べたのが豚丼の始まりです。代替食でしたが、開墾の日々を支えた貴重な食事であったに違いありません。メニューには「勉三とともに帰郷した豚丼」とありました。

豚丼は、帯広の多くの店舗で扱われ、それぞれの味わいを競っています。ひとつの食文化にまで発展した、これも開拓の原動力でありましょう。ぜひ、御賞味ください。

置戸町風土記

置戸町・置戸中

石原 邦彦

置戸町は、常呂川の最上流にできた谷底平野に市街地が開けた町である。オホーツク管内の最南西部にあつて、十勝地方の陸別町や足寄町、上士幌町と隣り合わせており、北見市へは三〇kmの距離に位置している。三方を標高一、〇〇〇m級の山々に囲まれ、町の面積の八五%は森林に覆われている。

気候は、夏冬、昼夜の寒暖の差が大きく、積雪降雨が少ない典型的な内陸性気候である。

町名は、アイヌ語の「オケトゥンナイ」からとつたもので「鹿の皮を乾かす沢」という意味。黒曜石の原産地でもあり、常呂川沿いに一〇三か所を数える遺跡の大半が先土器時代のもので占められ、続縄文・擦文時代も漁労と狩猟の場所であつたようである。置戸の黒曜石は、遠くはシベリアや日本各地で発見されている。

置戸町は北見市の前身である野付牛村から分村独立したのが大正四年で、昭和二十五年に町制が施行された。

この町をささえてきた産業は林業と林産業、農作物ではビートとジャガイモ、それに豆

類とタマネギ、ヤーコン。しかし、高度経済成長と外材輸入が進むにつれて農林業の不振がめだち、ピーク時に二万二、〇〇〇人を超えていた人口は、現在二、八〇〇人弱にまで落ち込み、過疎化への対応が町の大きな課題である。

読書日本一・人間ばん馬・オケクラフト

置戸町の存在が全国的に知られるようになったのは、日本一、本をたくさん読む町になつたことと、馬にかわつて若者が丸太を引く勇壮な「人間ばん馬」。そのメンバーが綱引き大会で全国優勝したことである。

建築の構造材にしか使い道がないと思われていたエゾマツやトドマツを素材にして、木目の美しい白い器などをつくるオケクラフトが、ウッド志向を反映して人気を呼んでいる。



社会教育の町 置戸

オケクラフトを軸にして、それに盛る農畜産品の製造、地場産品の白花生（しろはなまめ）や山ぶどうを原料にした焼酎とワインの販売にも取り組んでいる。



るが、これらはどれも公民館活動が発展した姿である。そして、なによりもこの置戸が高い評価を得ているのは、戦後から七〇年間にわたる社会教育活動なのである。

昭和二十七年から始まった青年たちのリヤカーを引いた献本運動と読書会がそのきっかけだったそう。その後の公民館運動で、産業教育をはじめ、様々な知識習得や文化活動から、オケクラフト技術者養成や地域特産品開発などが育まれ、町の主要産業に発展した。

オケクラフトは、安全性・耐久性・使いやすさが追究され、こども園・小・中・高に学校食器として採用されている。

そして、この器に置戸の食材を使ったおいしいほんものの味を提供、これが給食日本一となり、こちらも全国的に有名となった。

地域とともにある置戸の学校教育

郷土の貴重な資料やその歴史を知ること、自身が生活する置戸がどのような町なのか知り、愛着をもち、興味関心を深めてほしいとの思いから、ふるさと教育を展開している。

オケクラフトや地域の自然、行事参加指導などに各団体・機関から協力をいただき、「置戸の子はみなわが子」という意識で町ぐるみの教育に発展している。

今年度から施設分離型小中一貫教育とコミュニティ・スクールを導入し、更に地域と深く連携した教育に取り組み始めた。

身近にある北海道開拓の

歴史が活かせる琴似

札幌市・琴似中

國島孝夫

琴似の語源は、アイヌ語で「コツネイ（窪地のような所）」からきている。札幌市の西部には同じような所が数か所あったようだ。琴似は昭和三十年札幌市に編入されるまでは旧琴似町として繁栄した。小樽への幹線道やJR、地下鉄駅などがあり、交通や通信の要所である。

その旧琴似町のほぼ中心に位置する本校は、今年開校七四年を迎え、全校生徒七〇一人の市内でも規模の大きな学校である。近くに開拓の歴史にあふれる施設や西区役所、商業施設などがあり、文化、経済、商業の西の拠点である。校区であるJR琴似駅から地下鉄琴似駅を通り、琴似神社に至る琴似地区には、古くからの商店や飲食店が多くあり、更にその延長線上の山の手地区には、三角山山麓まで住宅街が広がっている。中には祖父母も本校卒業生であるという家庭が少なくない。

歴史的施設として代表されるものには、琴似屯田兵に関する施設がある。明治六年に旧琴似村が開村し、翌明治七年、北海道で初め



琴似屯田兵村兵屋跡（国指定史跡）

て屯田兵が入村することが決まり、二〇八戸の屯田兵屋が建築された。翌明治八年五月二十七日には、旧会津藩、旧庄内藩、旧仙台藩から一九八戸・九六五人が揃い、その日を記念して今でも琴似神社の春のお祭りが行われている。残念ながら今年も、春のお祭りと九月に行われている例大祭は、新型コロナウイルス感染症対策のため、中止となっている。

屯田兵制度は、北海道の開拓と北方警備のために考えられたものである。琴似地区が屯田兵村の最初の候補地選ばれた大きな理由は、開拓使のある札幌本府に近く、また、小樽などへの交通や生活に便利であったことなどが挙げられている。屯田兵制度は、明治三十七年まで続けられたが、現在二つの屯田兵屋跡が残っており、一つは国指定史跡として一般公開されている。また、西区役所の前庭あたりには中隊本部があり、記念碑と「屯田の森」が当時の面影をとどめている。

一方山の手は、開けた丘陵地帯という土地柄から名付けられている。山の手地区は琴似発寒川の近くに位置し、比較的給排水など水利に恵まれていたため稲作も盛んであった。

その後リンゴ栽培が盛んになり、大正六年当時は約二、〇〇〇本のリンゴの木があったといわれている。大消費地である札幌が発展するにつれ、山の手は重要な果物供給地ともなり、現在でも果樹園を営む農家がある。

旧琴似村は昭和十八年には旧琴似町となり、琴似だけではなく、八軒、宮の森、二十四軒、山の手、発寒、新川、篠路、盤溪などを含む広い地域へと発展していった。旧琴似町が札幌市に編入され政令指定都市となった昭和四十七年には西区役所ができ、札幌の西の拠点としての機能を受け継ぎ、現在に至っている。

このように本校の子供たちの生活圏には、北海道開拓の歴史に大きく貢献した様々な史跡などが点在している。今年度の一年生の校外学習では、この琴似地区を中心としたフィールドワークを実施した。例年は炊事遠足を行っていたが、コロナ禍のため変更せざるを得なかったこともある。小学校でもこの地域の歴史について学んでいる生徒は多いと思われるが、新たに出会った仲間たちと一緒に地域の史跡なども回り、学習したことで、改めて身近な地域の歴史的存在を見つめ直す良い機会になったと思われる。



1年生校外学習のまとめ

北の産業革命「炭鉄港」

小樽市・松ヶ枝中

黒川裕之

令和元年五月、我が町小樽市を含む、北は空知管内沼田町から南は胆振管内室蘭市までの一二市町が日本遺産に指定された。日本遺産は、地域に点在する遺産を面として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている。

空知の「石炭」、室蘭の「鉄鋼」、小樽の「港湾」、そしてそれらをつなぐ「鉄道」を舞台に繰り広げられた北海道近代化の礎となった歴史・産業遺産の物語が「炭鉄港」として認められたということだ。開拓から製鉄までわずか三〇年という短期間で独自の発展を遂げた「北の産業革命」であり、その歴史をひも解くと、これまで気付かなかった北海道の新たな魅力が目の前に広がる。

そこには、鉱山・鉄道・高炉などの建造物だけでなく、小樽の繁栄を支えた廣井勇や渋沢栄一、空知の石炭繁栄の基礎を築いたライマンなどの外国人技術者、また工都室蘭を支えた井上角五郎などの魅力的な人物の足跡がある。また、鉱山や港湾、製鉄などの労働者を支えたナンコ鍋やカレー蕎麦、餅、焼き鳥などの地域独特の食文化もある。

しかし、栄華を極めた「炭鉄港」も石炭政策からの転換や物流機能の移転とともに一気に凋落していく。この繁栄から凋落へと向かった時間の短さが、小樽に歴史的建造物を当時のまま残すことにつながったとNHKの「ブラタモリ」では結論付けていた。炭鉄港エリアには、小樽と同様の理由から、当時を物語る多くの産業遺産がある。

成長と衰退、そして新たな街づくりに向かうという「炭鉄港」のドラマチックな変化を実感することは、日本が直面する人口減少・少子高齢化問題の、未来に向けたヒントと新たな価値観に出会うチャンスとなるはずである。次代を担う世代に炭鉄港エリア全体で、「炭鉄港」を学校で学ぶ機会をつくることはできないものかと思案している。

身近な旅の楽しみ

占冠村・占冠中

富永浩司

管理職になり、一般教諭より早いサイクルで転勤するようになった。上川管内は、南北に細長く約二四〇kmほどの距離があり、最北は中川町、最南は占冠村である。幸いなことにどちらの町村にも勤務できた。地域や保護者、生徒たちに恵まれ楽しく仕事をしているが、別の楽しみもある。中川町では、天塩町など近隣のドライブはもちろん、稚内空港や日本の本土最北端の地である宗谷岬にも行った。さらに久しぶりに家族五人が集まり、フェリーで礼文島に旅行にも出かけた。

現任地の占冠村は「自然体感占冠」といわれるように自然が満載で地域行事にも参加し、十分に楽しんでいる。少し足を伸ばすと十勝地方にも行ける。急カーブで急勾配が多いが、晴れた日には景観が美しい日勝峠を通り、展望台から十勝平野の大パノラマを眺めることができる。十勝地方は昨年のNHK連続テレビ小説「なつぞら」の舞台になったこともあり私はドラマを感じる旅をしている。「十勝千年の森」「真鍋庭園」「六花の森」など大自然の森や庭園を存分に楽しむこともできる。

先日は鹿追町の神田日勝記念美術館に二〇数年ぶりに行ってきた。天陽君のモデルとなった日勝の没後五〇年回顧展が開催されていた。自画像から始まり、身近なものや風景、一緒に暮らしていた牛や馬を描いた作品、わずか三三歳という若さで亡くなった神田日勝の遺作で最高傑作と言われる「馬（絶筆）」をまじまじと見ることもできた。また、近くの福原美術館では日勝とは違い繊細で透明感がある然別湖など十勝の自然を描く日勝の娘である神田絵里子氏の風景画も見てきた。

コロナ禍でいろいろ制約を受けているが、十勝名物の「豚井」や「インデアンカレー」なども味わいながら身近な旅を楽しんでいる。退職までにまだ異動することもあると思うが、新しい生徒たちとの出会いとともに新しい場所での身近な旅を大いに満喫したいと思っている。

アニサキス症

旭川市・愛宕中

日比野 正人

釣り好きな近所の方から、お裾分けで刺身で食べることができ「オヒョウ」をいただきました。早速その日の夕食は、「オヒョウ」の刺身を大変おいしくいただきました。

夜中の二時頃胃のあたりに激痛を感じて目を覚ましました。食べ過ぎたときなどは、胃痛を起こしても翌朝になれば収まっているのが通例だったので、このときも翌朝になれば大丈夫だろうと楽観していましたが、朝になっても胃痛は治まらず、いつもの状況と違うとこのときになって気がついたのです。ひよつとして前日食べた刺身が原因ではないかと思い、インターネットで検索してみると、アニサキス症という言葉が飛び込んできました。「アニサキス症とは、アニサキスという寄生虫の幼虫がいる魚介類を食べた数時間後に幼虫が主に消化管の壁に食いつくことよって急な腹痛などを起こす感染症です」と書かれていました。これだと勝手に自分で思い込みました。病院に行かなくてはと思っているうちに、嘘のように先ほどまでの痛みがなくなっていました。先ほどまで病院に行かなくてはと苦しんでいた自分は、もうどこにもいません。出勤の準備をしながら、痛みから解放された安堵感から、日常の体の状態がいかにありがたいことなのかと宗教的に考えてしまいました。痛みを伴って、当たり前前の良さを実感した出来事でした。

今は、コロナ禍の状況となり、今までの日常がどれほど貴重なものだったのかをいやと言うほど思い知らされていますが、いつか必ず日常は戻ってくる信じて、前を向いて進んでいます。

胃痛はというと、その日だけ時々おそってきましたが、それ以後は一切痛みを感じませんでした。原因は結局不明のまま現在に至っていません。

今の誇りが過去と未来をつなぐ

礼文町・船泊中

本間 到

「花の浮島」と呼ばれ、五月には海拔〇m地点にも希少な高山植物が咲き乱れる最北の離島、礼文島。本校はその自然豊かな島の北部に位置している。全校生徒三一人の小規模校。子供は「地域の宝」として愛情と期待を注がれ、素直にのびのびと育っている。

『島を離れるべきか。』中学生はいずれ、その選択に迫られる。進学先や就職先が少ない小さな離島であれば尚更である。本校では毎年、何人かは都市部の高校に進学する。地元の高校生も卒業後は多くの子が島を離れる。どこで人生を送り、どう幸せだったのか。殆どの卒業生たちの人生は知ることができない。だからこそその中学校三年間、学校の使命を果たしたい。新しい時代(社会)に、豊かで幸せに生きる力を。

地方から都市部に進学(就職)すると、少なからず自分のちっぽけさに苛まれることがある。田舎育ちの私もそうであった。今の生徒たちは、情報化・グローバルな社会を生きているので私程ではないと思うが、新天地で「壁」にあたることは少なからずあるはず。小さなコミュニティから広い世界に飛び出した際、良くも悪くも自分の力を知る。「己を知る」ことで、挑戦を続けるのか別の道を探るのか。人生において大きな分岐点である。どちらを選択しても「誇り」をもち続けてほしい。

千差万別の人生があり、比較などできないからこそ、自身の絶対評価が大切である。今の自分を愛することは過去の自分を愛することにつながっているのではないか。故郷を愛する心は今の居場所を愛することにつながりはしないか。今の頑張りや、未来の輝きある自分につながるのではないか……。今の自分に胸を張れる人であってほしい。

挫折や失敗が必然であるならば、「誇り」がある限り、それは新たな世界に挑戦する意欲を生み出し、更なる高みを目指す動機となる。関わった全ての生徒がそうであることを望みたい。

やりたいことを徹底的にやる

天塩町・天塩中

関根 智

私が音楽の魅力に最初に気付き始めたのは、小学五年生ぐらいの頃と記憶しています。当時は、刑事物のテレビドラマが人気で、週末のゴールデンタイムはテレビの前に釘付けになったものです。

テレビドラマと音楽ってどんな関係？と思う方もいると思いますが、ある刑事ドラマでは、ドラマそのものも面白かったのですが、一人一人の刑事（俳優）に対してテーマ曲が有り、ドラマの内容と音楽が一体となっている魅力に、小学生ながら取り憑かれました。そんな音楽との出会いから、次第に自分も演奏してみたいという気持ちが高まっていきました。中学、高校では吹奏楽部に所属し、トランペットという楽器に出会いました。そして、私の生活におけるほぼ全ての思考が音楽に費やされ、没頭する毎日が続きました。

中学入学と共に始めたトランペットは現在も続けています。四五年の経験となりましたが、とにかく毎日練習することをルーティーンとしています。現在は社会人ビッグバンドに所属し、仲間とともに年に何度かあるライブで演奏することが楽しみであり生きがいです。

私が尊敬する音楽家（サクソ奏者）の渡辺貞夫さんは御年八七歳の現役のプレイヤーです。渡辺さんは、新聞記事のインタビュー中で、「好きなことを見付けるのが大事。やりたいことを徹底的にやった方がいい」と述べられていました。私も全く同感です。現任校には吹奏楽部があるので、生徒と一緒に演奏する機会があり、自分が学んできたことを伝えることが楽しいですし、少しずつ生徒が上達していくことに、この上ない喜びを感じます。私は、音楽活動に年齢や性別、職業や立場の違いなどは存在しないと思っていますし、必要ないと思っています。子供たちには、「やりたいことを徹底的にやる」ということの大切さを、音楽に向かう自分の生き方を通して伝えていきたいと思っています。

奥尻祈漁太鼓の伝承に思う

奥尻町・奥尻中

宮腰屋 由

本校は平成二十九年四月に、奥尻島内二校（青苗中学校・旧奥尻中学校）の統合により開校しました。開校以来、一年生の総合的な学習の時間の中で、奥尻町の郷土芸能である「奥尻祈漁太鼓」の伝承活動に取り組んでいます。祈漁太鼓は天保年間、島が大変な不漁続きにあったとき、何人かの漁師が島の弁天岬でかがり火を焚き、太鼓を打ち鳴らし、大海原の神々に祈りを捧げ、大漁を祈願したのが始まりとされています。昭和四十九年に郷土芸能として復活したものの、昭和六十年代には後継者不足で活動が停滞していき、その後は旧奥尻中学校祈漁太鼓愛好会に活動が引き継がれましたが、平成二十二年で活動が終了しました。

平成二十七年四月、私が教頭として着任直後の青苗中学校に、伝承が途切れた奥尻祈漁太鼓を室津祭（毎年七月に開催される町内で集客人数が一番多い祭）で生徒に披露してほしい旨の依頼がありました。奥尻町の支援、そして当時のPTA会長の尽力で、生徒たちは伝承に取り組むことへの思いや意義も受け止め、元愛好会の方から指導を受けることができました。発表は地域の方々から好評を博し、大成功に終わりました。

青苗中学校で閉校まで二年間行われた一年生の伝承活動は、統合後の本校に引き継がれ、今年で六年目を迎えます。ふるさとを愛する心の育成を目標として、昨年度から奥尻町の社会教育事業としても位置付けられました。伝承を再開した当時を知る私が本校に着任し、生徒が祈漁太鼓に取り組む姿を、再び間近で見られることに喜びと「縁」を感じます。持続可能な取組として、今後も大切にしていきたいと考えます。これまで伝承に取り組んだ生徒数は延べ七〇人ほどになります。決して多い数ではないかもしれませんが、近い将来この中から、後輩たちに奥尻祈漁太鼓を伝承する新たな人材が出てくれればと願っています。

「聴くこと」の大切さ

七飯町・大中山中

横山 佳彦

先日、中学二年生の国語の授業を参観した。そこでは、二、五〇〇年前の孔子の教え、論語について学習していた。その一節に「六〇にして耳順う。」があった。御承知のとおり、「六〇歳になれば、他人の意見に反発を感じず、素直に耳を傾けられるようになる」という意味である。

この言葉には、人生を考える上で深い意味がある。一方で、教職に身をおく者として、言葉を扱う職業である。生徒や保護者に話をする前提として、相手意識をもち話を「聴く」ことの大切さもあると、教えてくれる気がする。

昨年度、ある保護者から教師の言動について、「教育者として、その言葉遣いや振る舞いはふさわしいものなのか」という厳しい指摘があった。生徒の話聴かないなど、生徒理解が不十分なゆえの軽率な言動であった。そこで、遅まきながら生徒指導（教育相談）の研修を始めた。事例研修では、互いの生徒指導の捉えの違いや差に驚いていた。交流を通して、自分の生徒指導の捉えの狭さや偏りに気付き始めた。恥ずかしい話であるが、ここから少しずつ教師の言動が変わり始め、生徒指導に当たる姿勢を共通理解することができた。

一方で、面白い話も聞くことができた。本校では、「挨拶運動」「いじめ撲滅運動」を展開している。本校の生徒玄関前の花壇には、今年も地域の園芸店から多くのお花を寄贈いただき、ボランティアの方々植えていただいた。作業の当日、私がボランティアの女性にお礼を言うと、その女性「生徒が、すでに『ありがとうございます』と声をかけてくれた。これが何よりうれしいのです」と笑顔で話してくれた。生徒の姿から、大切なことを教えられた瞬間であった。

学校は、教師自らが成長するために、生徒や保護者の小さな声を聴く必要がある。その先に、新しい学校の姿が見えてくると信じている。

コロナ禍

函館市・赤川中

小林 徹也

「新型コロナウイルス感染症の現実」パンデミック 現在世界で一二〇万人以上日本でも約一、八〇〇人死亡 飛沫感染 軽症だと感染の自覚はなく重症化すると死に至る可能性あり 映画ではなく現実の怖さがある。

「感染症予防対策」人と接する際に感染するため三密（密集・密接・密閉）回避 マスク着用 うがい、手洗い、換気、咳エチケット ワクチン、薬はまだない シンプルでアナログな方法のみ、完全、絶対はない。

「学校感染未然防止策」集団になることの回避 全国臨時休校 分散登校 卒業式や入学式の規模縮小 体育大会、文化祭等学校行事の中止や縮小 修学旅行の延期と縮小 甲子園高校野球 高体連 中体連 コンクールの中止 研究大会の中止 各種会議の中止とオンライン化 市内、管内から出ることを控える通知 当たり前にできたものができなくなるという現実への驚き、それを受入れることへのジレンマと今後への不安。

「日常生活感染未然防止策」プロスポーツやイベントの無観客開催 地域の祭典、イベント開催中止 送別会や歓迎会、懇親会の中止 外に出かけない巣ごもり生活 家族以外との外食なし 何と味気ない、変化や刺激のない生活、家族との会話やつながりはできたかもしれないが。

「私は」大会中止や練習場所閉鎖のための運動不足と体重増 職員や地域、保護者とのつながりの薄れ 家族と職場以外の人と会う機会がなく、中学生以来これまで最も運動不足の半年間、はやく歳をとった感じ。

「考えさせられる」①日本の感染症検査体制の脆弱さ IT環境の未整備による影響 日本は後進国だったのかと気付かされる。②感染者や医療従事者への誹謗、中傷 知識や良識の無いと思われるひとが多数いることへの驚きと落胆。

「無関係」太陽のガス層 暖房機メーカー 昭和を代表する自動車輸入ビルはいい迷惑、「COVID-19」と呼ぶことはできなかったのか。

明日も笑顔で！一歩前へ！

奈井江町・奈井江中

菅 原 理 恵

表題は、二年生作の統合五〇周年記念テーマである。本校は、町内三つの中学校が統合し、以来町で唯一の中学校として歴史を刻んできた。五〇周年記念事業は、昨年八月、協賛会設立総会を経て準備が始まった。しかし、順調に進んでいた準備作業はコロナ禍で立ち止まらざるを得なくなった。新年度を迎えても判断が難しい日々が続いていた。最終的には、六月に学校が再開されてから協賛会役員で議論を重ね、できる範囲でできることを、と覚悟を決めた。本校が刻んだ長い歴史が背中を押してくれた気がする。コロナ禍であっても記念誌を編纂し、記念式典も感染予防策をとりながら本校体育館で開催することとした。

美唄市と砂川市のあいだにある本町は、国道二二号線、日本一長い直線道路の中間あたりに位置し、かつては石炭産業で栄えていた。五〇年前の町内中学校の統合は、石炭産業の縮小など社会全体の大きな変容の中で英断されたものである。

そして今日、人工知能や情報通信など、ソサイエティ5・0の近未来の姿は、都会だけではなく、奈井江町のここにもある。海外をマーケットに工業製品を出荷している地元企業や農業でも日本一の「ゆめびりか」を生産する農家に象徴されるように、奈井江町は世界に誇れる可能性のあふれる町だ。

子供たちには、素晴らしいポテンシャルを生かして不可能を可能にしようと挑戦してほしい、この町に生まれたことを誇りに大きく飛躍してほしいという願いのもと、多くの同窓生、PTA、町民が力を合わせ、記念式典当日を迎えた。

秋の日差しの中開催できた記念式典。半世紀歌い継がれた校歌が式典の結びに会場いっばいに響いた。

コロナ禍を乗り越えて新しい明日がはじまった。

「お稲荷さん」の今昔

苫小牧市・凌雲中

前 田 辰 夫

稲荷山（標高二三三m）は、京都市南部の東山連峰の裾野にある山です。「五山送り火」の山に比べると知らない人が多いかも知れませんが、「朱色の千本鳥居」や「白い狐」といえば思いあたる人もいます。山全体が、神域となっており、多くの人に「お稲荷さん」と親しまれ、年始には大勢の人が商売繁盛を願いに來る神社なのです。地域に残る伝承では言葉巧みに藤森神社に取り入り、広域な藤森神社の中、あるいは近くに「お稲荷さん」を創建し、「商売の神様」として鎮座したとのこと。つまり「商売上手」。なので、商売人の人たちは、あやかりたいために「お稲荷さん」が好きなのです。

「お稲荷さん」は、おおよそ七〇〇年代の創建とされ、諸説がありますが、当初は、有力な権力者の「私的な神様」、次は、「五穀豊穡を願う神様」となり、江戸時代になると「商売の神様」として時代とともに変遷しながら土着したようです。このように昔から姿を少しずつ変えながら都の庶民を見守ってきたのです。

それが約一〇年ほど前から、海外のガイドブックで「朱色の鳥居」等が紹介され、外国の方が、「稲荷山」にくるようになりました。いつの間にか、異文化交流の場になってしまい、住民達が散歩したり、休憩したりすることが困難になってきました。近隣店舗にも変化が生まれ、海外資本の「民泊」や「ドラッグストア」・「貸衣装屋」さんが誕生しました。情景としては、キャリーバッグ片手に参詣あるいは季節外れの浴衣に運動靴、ストア内の放送は、外国語等です。「お稲荷さん」はインバウンドで潤う地域に変化しました。しかし、いい時代は続きそうにありません。コロナウイルス感染症の影響で国内外の移動が困難なため、観光客が激減しました。もとの静かな「お稲荷さん」になってきています。さて、二〇二二年一月一日「お稲荷さん」は、どんな、賑わいをみせるのでしょうか。

テレビドラマを見てふと感じたこと

平取町・振内中

小西昭徳

先日、JIN〜仁というテレビドラマの再放送を見ました。二〇〇九年十月から放送して視聴率もよかったそうです。見た方も多くいると思うのですが、自分はそのときは見ていませんでした。内容は、現代の医師がタイムスリップして江戸時代に行ってしまう、人と関わり悩みながらも治療していく話なのですが、最後に現代に戻ってこのタイムスリップについての仮説を仲間の医師と立てていました。この中で、パラレルワールド（並行宇宙）という言葉が出てきて、懐かしく感じました。これは、一つの事柄に対する選択が変われば、結果も変わるため、分岐した似た世界が無数にあるという考えです。タイムパラドックスを解決するためにも都合がよいので、SFの世界ではよく使われています。

ふとこの時、そういえば昔は並行宇宙などについて想像しながらワクワクしていたことを思い出しました。最近の自分を考えると、そんな想像をほとんどしていませんので、心も頭も固まってきているのだろうなと感じています。この原因の一つは本を読む量が少なくなつたことでしょう。その代わりにテレビを見る時間が増えています。番組を録画できる環境を作ってしまったことも、テレビを見る時間を増やす大きな要因です（便利なのですが）。映像を見るということは、自分の頭でその場面を考える必要がなく、目から入つたものでそのまま状況を把握できます。しかし文字の場合は一度自分の頭の中で場面を想像しないと、状況を把握できないし、読んでいても面白くありません。本を読まないということは、この手順が飛ばされるのが普通になって、いざ使いたいときにはなかなか想像力が起動せず、起動しても低いレベルから始まってしまうのだろうという仮説を立ててみました。これが柔軟性がないと感じる要因？

何事も練習が大切だとは思っていますが、本も読むことが頭脳の練習になると改めて感じる事ができました。現在はインターネットで簡単に注文できますが、本屋さんの中でちよつと読んで、面白いものを探す楽しさも忘れないようにしたいと思ふ今日この頃です。

当たり前に感謝

芽室町・芽室西中

久保睦則

ここ数年ニュースなどでよく耳にするのが、観測史上初などの「史上初」という言葉である。良い使われ方の史上初ならばうれしいのだが、そうでない場合が多く、毎年のように観測史上初の大雨や台風、そして地震などの自然災害が次々と日本を襲い、家や大切な家族、友人を失うという悲しいニュースを耳にしない年はない。

しかし、その事態を更に上回るかのような事態が、今世界中を襲い、観光業をはじめとする様々な業界に大きな影響を及ぼし、更には戦争以外では歴史上初となるオリンピックの開催延期という事態にまで及んでしまった。原因は「新型コロナウイルス」の感染拡大である。もちろん、教育界にも影響は及び、約二か月間の休校という事態に学校も追い込まれ、マスクを買い求める人の長い列、閑散とした繁華街、仕事や会議もオンライン、まるで映画で観た世界が現実になっているのである。本当に異様なこの状況をだれが予測できたであろう。

私は、今まで当たり前にできていた行動が当たり前にできなくなり、旅行はもちろん外食も躊躇する経験をして、これほど、当たり前に生活できることのありがたさを感じたことはない。そして、情けないがこれほど「当たり前」について考えさせられたことはない。

そのありがたさを感じ考えながらも、これからこのウイルスとどう関わって、当たり前に生活できることの大切さや、この状況下でどう生活していくかを教育界に携わる一人として、これからを担う子供たちに継続して教えていく重大な責任を改めて実感した。

そして、一刻も早くこのウイルスのワクチンや治療薬が開発され今まで当たり前であった生活に戻り、当たり前にテレビの前でオリンピックを大声で応援し、オリンピック史上初の記録に興奮し、当たり前に外食や旅行できる世の中に戻ってくれることを願うばかりである。

コロナ禍のコミュニケーション

帯広市・八千代中

嶋 健

新型コロナウイルスによって、世界中で多くの人が命を落としている。経済的に大きなダメージを受けている企業も多い。with・コロナという言葉も定着してきた。未だ終息とならず、三密を避け、感染予防対策を行いながら「学びを止めない」ことを意識した教育活動を推進していかなくてはならない。昨年度末から我々の生活は一変した。当たり前と思って生活してきたことが、当たり前でできなくなった。事前準備もできないまま臨時休業となり、卒業式を迎え、新学期を迎え、再度休業要請を受けることになった。子供が学校に行かなければ、多くの人は働くことも難しい状況になるなど、教育が社会の基盤であると痛感した人も多くいたのではないだろうか。一方で、緊急事態宣言下では「自粛警察」と呼ばれ、県外ナンバーの車への嫌がらせなど、個人の事情も確認せずに一方的な価値観の押しつけも広がった。価値観の違いは、いくら議論しても平行線にしかならない。善と悪との二つしか解をもたなければ当然のことである。コミュニケーションにも難しさを感じてしまう。古い考えかも知れないが「飲みニケーション」を大切にしてきた。当然昨年度末から一切できていない。コミュニケーションと言えば、最近では「報(告)・連(絡)・相(談)」(ホウ・レン・ソウ)よりも、「雑(談)・相(談)」(ザツ・ソウ)が大事とされるようである。かしまらない雑な相談から、新しいアイデアが生まれることがあると、ビジネス雑誌に書いてあった。たかが雑談、されど雑談なのだそう。これには飲みニケーションを得意としてきた私の大いに反省するところである。今年コロナ禍で異動となり、密を避ける意識からか、先生方も積極的にコミュニケーションをとっていなかった。仕事の邪魔にならないように多に雑談をしていきたい。そして、一日も早く新型コロナウイルスが終息することを願うばかりである。

忘れてはいけない記憶

釧路町・昆布森中

青木 栄

下校生徒を見送り、ほっと一息ついたとき、突然、校長不在の学校が揺れ始めた。部活動生徒を職員室に集め、点けたテレビの緊急報道。衝撃的な映像を今も忘れることはない。二〇二一年三月十一日の東日本大震災から、間もなく一〇年になろうとしている。

あの日、私は単身赴任、妻は川を隔てた勤務先から帰宅できず、小学生だった娘は連絡のつかない自宅でただ一人、親の帰りを待っていた。無事であろうと思っていた我が子が、被災し命を失ったと後に聞かされたら…。我が子が行方不明となり、ランドセルだけが戻ってきたら…。私もおそらく「なぜ、山に登らなかつたのか。」「学校は、どんな対応をしていたのか。」その疑問の答えを求め、怒りと悲しみに暮れただろう。

『あのとき、大川小学校で何が起きたのか』は、大川小学校を取材してきたジャーナリストの池上正樹さんと加藤順子(よりこ)さんの、震災翌年の著書である。川北新報社報道部『止まつた刻 検証・大川小事故』は、昨年七月に書籍化され、併せて読むと、学校管理下で起きた大川小学校の事故は、決して忘れてはいけない事故の一つであることを、改めて認識させられる。

どんなに世の中の移り変わりが激しく、どんなに時の経つのが早くても、「二〇年一昔」と言われるように、あの事故を「昔の出来事」としてしまつてはいけないうらう。ましてやこの訴訟は、最高裁判決(二〇一九年十月)から、まだ二年しか経っていない。

現任校は、太平洋に面した漁業の町。眼下に漁港が一望でき、漁協の建物、漁港と並ぶ多くの漁船を見下ろすことができる。

「疑わしきは行動せよ。空振りには許されるが、見逃しは許されない。」そのとおりだと思う。強く心に焼き付け、避難訓練や様々な機会に、何度も何度も教職員・生徒に繰り返し薦めたい一冊である。

阿寒の母（ハポ） 前田光子に学ぶ

釧路市・鳥取西中

小玉 功

日本で最も豊かな自然が残された山あいの温泉街、阿寒湖温泉。ここは、年間一〇〇万人以上の観光客が訪れる一大観光地でありながら、市街地として開発された面積は、阿寒国立公園指定面積の1%もありません。昭和九年、道内第一号の国立公園として指定を受けながら、観光収益を上げることのみを目的とした観光開発を行わなかったこの地区は、日本のどの観光地にもない特徴をもった存在となっております。

この国立公園の指定以前、明治時代から阿寒の森林を個人で管理・保護していたのが、前田一步園という個人経営の会社でした。その三代目当主が前田光子です。光子は、阿寒の大自然をいかにして永久的に守り続けるか、そしてお年寄りや子供、アイヌの人々をいかに大切にするか、この二点を人生の目的として生き抜きました。

原始の森を残し、マリモを守り、先住民族であるアイヌの人々の自立を助け、子供たちの学びの環境を整え…。阿寒湖地区の全てを守り育てるために、全財産を全て寄付して、前田一步園を財団法人化しました。財団設立の趣意書に光子の思いが記されています。

「人間が自然を保護するというのは、人間の思い上がりです。自然から大きな恩恵を受けているのは人間の方です。ですから、自然は私たちの命の糧であるとわきまえて、いかにこの大切なものを永存すべきかを考えなければなりません。人間を守ってくれる自然を、私たちも守る。それが本当の意味での『自然保護』なのです。」

二一世紀は環境の世紀と言われています。地球温暖化、資源枯渇、環境保全などの問題に直面し、グローバル化や新興国の伸長など国際社会が多様化多極化する中で「持続可能な社会」へと大転換を図る時代を迎えています。前田光子の「人はこの大自然から大きな恩恵を受け、人こそが自然の保護を受けている」という考え方は、北海道教育の基本理念の土台ともなる考えだと、そうした謙虚さをもった人間を育てていきたいと強く思う今日この頃です。

絶望的でありながら、同時に希望を感じさせる本

別海町・上春別中

赤木 弘文

私が、学校での人間関係、健康問題などに悩み苦しみ、「これから自分はどうすればよいのか」と迷って、絶望感に浸っていたときに、五木寛之作「大河の一滴」に出会った。作者の第一頁に「私はこれまでに二度、自殺を考えたことがある」と書き出しにあり、どう生きているか、絶望的でありながら、同時に希望を感じさせる本として、感動した。

特に胸に深く刺さる言葉が、次の四箇所である。

第一に、「濁水をただ嘆く、泣くのはいいけど、泣き言は言うな」目の前の現状を嘆くばかりでなくその環境の中で、自分が何ができるかを考えて行動することが大事である。

第二に、「本当につらいときこそ、ユーモアをもて」極限状態の中で生きていく上では笑いが必要である。ユーモアというのは単に暇つぶしのことではなく、人間が人間性を失いかけるような局面の中では、人間の魂を支えていくことが大事である。

第三に、「極限状態を乗り越える人は、『おはよう』や『ただいま』が言える人」今の世の中、ルールを無視して自分のことだけを考える人もいるが、本当に最後に生き残れるのは社会的ルールを守れる人である。

第四に、「自分はまだダメだと覚悟を決めた人間に『頑張れ』と言わない」苦しんでいる人がいるとき、「頑張れ」と激励することは逆に相手を追い詰めてしまう。そういうときは相手に寄り添い苦しみを分かちあうことが大事である。

新型コロナウイルスの猛威に脅かされている極限状態の今、『大河の一滴』は内面的に訴えてくるものがある。学校経営を預かっている校長として、学校がどんな極限状態にきてても、社会的なマナーや他人を尊重する配慮をいつまでも忘れずに行っていきたい。

『大河の一滴』は、私に絶望感から希望を感じさせてくれた本である。

生まれ故郷

北見市・東相内中

比留間 信 一

「酷寒零下三〇余度 小利別に春くれば 草木は萌ゆる・・・」
は、今は閉校になった母校の運動会応援歌です。五〇年近くも経つのに、ふと口ずさむことがあります。

私の故郷は、十勝管内最北端に位置する寒暖差七〇度以上もある日本一寒い地区。家は酪農。冬場そりで牛乳缶を集荷台まで運ぶのが、登校前の仕事でした。特に氷点下三七度の朝は外気が顔に突き刺さりましたが、太陽光にダイヤモンドダストの幻想的な輝きが心を優しく温かく包み込んでくれました。夜は星が天空に広がり、ピリツとした空気の中で多くの星が会話しているように瞬いていました。私は、この大自然の環境と小中併置校での多くの学びや体験を通し、地域や先生方の温かい指導のもと心豊かに育ててもらい、今の教職の基盤があると思っています。

現任校の東相内地域は、高齢者率が約四〇%以上と高く、教育活動の一つに福祉施設等との訪問・交流活動を実施しています。特に、認知症サポーター養成講座の実施は、認知症の正しい理解と認知症の人や家族を温かく見守る人の証としてのオレンジリング取得につながっています。地域の中では、生徒の挨拶が好評で、心豊かな生徒が着実に育っていることを実感しています。また、昨年の開校七〇周年記念事業では、音楽の夢を極め、東京から地元北見へ戻り、農業と音楽を両立しながら活躍している卒業生が、在校生へ「夢や目標を見付け歩んでいくことの大切さ」についてエールを贈ってくれ、貴重な学びの機会となりました。

来年はオリンピックの年です。私が小学生のとき、札幌冬季オリンピックの聖火リレーに希望を抱きながら、酷寒の中、学校前で声援していたのを覚えています。今はコロナ禍でいろいろと厳しい状況ですが、必ず希望あふれる春がくると心の中で応援歌を口ずさみながら、子供たちの生まれ育った地域を大切に、学びがいのある教育を進めたいと思います。

ハンコがお辞儀できない!?

札幌市・新川西中

渡部 浩士

行政改革担当大臣が河野太郎氏に代わった。すると早速、齒に衣着せぬ言い方で、今までの行政の無駄な慣習を切り捨てようとか改革を始めた。その一つがハンコ文化をなくそうという動きだった。このニュースが最初に流れたとき、当然のことながら賛否両論が噴出した。そして、否定論には、「日本の大切な伝統を守れ」だとか「はんこ屋さんの生活が危ない」などがあったが、またその一つに「ハンコをなくしたらハンコのお辞儀ができないじゃないか」というのがあったのには驚かされた。「ハンコのお辞儀? なんじゃそれ?」私には初耳だったので、そう思ってしまった。

公文書など、順に供覧して担当や役付きが印鑑を並べていく書類では、紙面の中央上部に四つか五つくらいの四角があって、一番左が最も責任の重い方、一番右側は担当部署など係の方が確認印を押す。この一番左の方に向け、一番目の方はやや左に傾けて押し、次の方は更に傾きを大きくして押し、最も右の人に至っては四五度くらい傾けて、つまり印影によつて目上の方にお辞儀した形にして書類を供覧することを「ハンコのお辞儀」と言うらしい。そしてこれは企業によつては当たり前前のビジネスマナーなのだそうだ。(御存じでしたか?)

「学校の先生ほど世間知らずはない」とか「先生の常識は世間の非常識」とか、言われてきた。私自身、名刺の渡し方や、席順など一般的なビジネスマナーを意識し始めたのは、教頭時代からだだった気がする。仕事で校外の方々に接遇する機会もかなり増え、一般的なマナーをしつかり身に付けておく必要性を強く感じ始めた。しかし、この「ハンコのお辞儀」なるものだけは不要ではないかと思う。ましてや、このマナー(?)を残すために新しい試みにブレーキをかけるのはいかがだろうか。

世間から非常識と言われようとも、そこに染まらず、別な新鮮な目で見直すべきことも世の中にはまだある。そして幸運にも、学校という、子供たちの純粋で崇高な目線を感じられる環境に勤務できる私たちには、気が付けることもあるかもしれないと自信をもった。社会を知りつつ、社会に協調しながら、しかし、教育者として、正しく人間らしい向上心はもち続けたいと改めて思う機会となった。

令和2年度 一般会計予算

収入の部

(単位：円)

科 目	令和元年度		令和2年度 予算額	予算額比較		備 考
	予算額	決算額		増	減	
1. 会費収入	35,834,400	35,834,400	35,607,600		226,800	単置校5,400円×530校×12か月=34,344,000 併置校2,700円×39校×12か月=1,263,600
2. 繰越金	645,881	645,881	544,969		100,912	
3. 雑収入・特別会計	2,400,019	2,400,051	1,500,000		900,019	研究基金会計より150万、銀行利息
計	38,880,300	38,880,332	37,652,569		1,227,731	

支出の部

科 目	令和元年度		令和2年度 予算額	予算額比較		備 考
	予算額	決算額		増	減	
研究大会費	9,972,000	9,858,202	9,897,000		75,000	
1. 大会運営費	3,000,000	3,000,000	3,000,000			研究大会実行委員会による大会運営費(担当地区決算)
2. 研究活動費	4,672,000	4,672,000	4,097,000		575,000	各地区の研究活動補助費(2,000円×472校)+札幌3,153,000
3. 旅 費	2,300,000	2,186,202	2,800,000	500,000		役員・理事・司会・提言・全道研講師等旅費
研究調査費	1,794,000	1,766,753	1,850,000	56,000		
1. 旅 費	1,400,000	1,324,380	1,400,000			ブロック研修費、地区教育経営研究会、地区交流等旅費
2. 印刷製本費	250,000	290,709	297,000	47,000		学校経営の資料
3. 通信運搬費	44,000	51,664	53,000	9,000		上記送料
4. 賃 金	100,000	100,000	100,000			調査アンケート作成等筆耕料
研究物刊行費	3,198,000	3,179,930	2,660,000		538,000	
1. 印刷製本費	2,740,000	2,722,496	2,200,000		540,000	道中だより、全道中、法制研集録、実態/調査報告書、研究紀要
2. 通信運搬費	458,000	457,434	460,000	2,000		上記送料
事務局費	23,916,300	23,530,478	23,245,569		670,731	
1. 借 損 料	3,170,000	3,188,626	3,210,000	40,000		事務所賃貸料、会議会場費、機器リース料、車借上げ料等
2. 給料・手当	5,260,000	5,260,480	5,270,000	10,000		専任職員給与、手当
3. 退職・社保	1,010,000	1,078,889	1,100,000	90,000		社会保険料、雇用保険料、退職積立金
4. 備 品 費	0	16,360	0			事務所備品
5. 印刷製本費	780,000	792,402	810,000	30,000		総会要項、運営要綱、感謝状、要望書、提言書、役員名刺等
6. 通信運搬費	550,000	552,945	635,000	85,000		電話代、郵券、託送料、振込料金
7. 消耗品費	390,000	316,603	440,000	50,000		用紙代、封筒、購読料、プリントナーインク、その他事務用品
8. 慶 弔 費	90,000	103,864	90,000			退職・退会役員記念品、祝電、香典、供花
9. 賃 金	230,000	230,000	200,000		30,000	筆耕料、印刷賃金
10. 渉 外 費	800,000	769,162	800,000			関係機関総会・研究大会参加費、外郭団体会議、広告料、食糧費
11. 負 担 金	4,220,000	4,213,876	4,220,000			全日中会費、交通安全協会、旧北方圏、社明運動、道P連他
12. 旅 費	7,300,000	6,896,640	6,350,000		950,000	総会、理事研修会、事務局研修会、全日中総会・研究協議会
13. 送 金 費	80,000	80,000	80,000			会費等地区からの送金手数料補助費(各地区4,000円)
14. 雑 費	26,300	30,631	30,569	4,269		会議用お茶代、両替料他
15. 予 備 費	10,000	0	10,000			
計	38,880,300	38,335,363	37,652,569		1,227,731	

令和2年度 北海道中学校長会役員・理事

会 長	鎌田 浩志 (岩見沢市 北村中) 0126-56-2021		副 会 長	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック
				宮澤 知 (小樽市 北陵中)	竹森 茂雄 (当麻町 当麻中)	佐竹 聡 (函館市 巴中)	鎌田 浩志 (岩見沢市 北村中)	喜多 敦 (幕別町 幕別中)	◎和田 正教 (札幌市北栄中) 011-731-0264 直742-5596
事 務 局 長	木村 佳子 (札幌市 中央中) 011-241-6266 直211-6254		事 務 局 次 長	越田 公美 (札幌市 信濃中) 011-891-2503	事務 局 次 長	三浦 利章 (千歳市 千歳中) 0123-23-3161	会 計 理 事	黒川 裕之 (小樽市 松ヶ枝中) 0134-25-5528	/
運 営 委 員 長	須藤 勝也 (札幌市 啓明中)		運 営 委 員	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック
				新田 元紀 (江別市 江別第一中)	倉 博之 (鷹栖町 鷹栖中)	植山 聡 (七飯町 大沼岳陽学校)	坂本 博 (登別市 幌別中)	志道 仁 (中標津町 中標津中)	須藤 勝也 (札幌市 啓明中)
部	副会長 (事務局)	部 長	部 員			副部長	幹 事		
経 営	宮澤 知 (小樽市 北陵中)	三浦 崇史 (江別市 大麻東中)	瀧澤 義守 (登別市 西陵中)	大場 八仁 (富良野市 富良野西中)	垣内 孝仁 (網走市 第二中)	佐藤 誠 (石狩市 花川中)	小川 満 (千歳市 北斗中)	加藤 秀典 (石狩市 花川北中)	
	三浦 利章 (千歳市 千歳中)		木村 雅彦 (函館市 五稜郭中)	/					
研 修	佐竹 聡 (函館市 巴中)	富川 浩 (札幌市 羊丘中)	木村 和義 (寿都町 寿都中)	東海林 弘哉 (帯広市 南町中)	神成 浩 (新ひだか町 静内中)	笹川 恒春 (札幌市 発寒中)	三浦 英悟 (札幌市 東白石中)	吉本 将樹 (札幌市 稲積中)	
	越田 公美 (札幌市 信濃中)		田中 義彦 (旭川市 旭川中)	水野 秀哲 (標茶町 標茶中)	/				
対 策	竹森 茂雄 (当麻町 当麻中)	二本柳 千尋 (根室市 啓雲中)	岡本 清豪 (小樽市 長橋中)	長尾 真 (留萌市 留萌中)	福井 順一 (上ノ国町 上ノ国中)	井村 信 (岩見沢市 豊中)	井畑 靖彦 (美唄市 美唄中)	河村 克也 (滝川市 江陵中)	
	黒川 裕之 (小樽市 松ヶ枝中)		秋保 和久 (釧路市 幣舞中)	長江 教貴 (大樹町 大樹中)	/				
情 報	喜多 敦 (幕別町 幕別中)	海野 厚二 (北斗市 上磯中)	畠山 博次 (豊富町 豊富中)	鳥谷部 賢太 (滝川市 江部乙中)	/		伊藤 博明 (室蘭市 桜蘭中)	山田 誠一 (苫小牧市 沼ノ端中)	立花 和実 (伊達市 伊達中)
	木村 佳子 (札幌市 中央中)								
事 務 所	北海道中学校長会事務所 〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目 敷島プラザビル TEL : 011-251-1344 FAX : 011-251-1302 E-mail : dotyu-kotyokai@bz04.plala.or.jp						事務主事	尾崎 基	
							会計主事	高橋 寿輔	

編集後記

令和二年度版会誌「全道中」第90号が、皆様の多大なる御協力により
出来上がりました。ここにお届けいたします。

北海道教育委員会教育長 小玉俊宏様、北海道立教育研究所長 鈴木淳
様の「潮流」への御寄稿をはじめ、「特集」では、先進的な実践をされ
ている会員の皆様から御寄稿いただき、テーマに迫りました。

また、北海道中学校長会役員・理事、各地区役員はじめ多くの会員の
皆様に御協力をいただき、各地区の活動、論考、文芸そして各地区の風
土紹介など、多彩な内容を掲載することができました。会員の皆様の職
能向上や北海道における教育情報源の一助となれば幸甚に存じます。

最後になりますが、コロナ禍でより一層御多用にもかかわらず、快く
御協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

表紙に寄せて

「旧赤煉瓦の郵便局から望む臥牛山」

函館市・本通中学校

仲井靖典

本来であれば、研究主題『新たな時代を切り拓き、よりよい社
会を創り出していく日本人を育てる中学校教育』の潮流に歴史浪
漫が薫る函館から 遅しく未来を生きる子供を育てる学校経営の
のもと、第六二回北海道中学校長会研究大会が、ここ函館の地で
開催される予定でした。コロナ禍の深刻な状況の中、研究紀要の
発刊をもつて実践研究を交流する形となりました。

さて、歴史と観光の街、函館市には多くの見所がありますが、牛
が寝そべるような外観から別名「臥牛山（がぎゆうざん）」と呼ば
れる函館山の麓に、特に多くの歴史的建造物が集中しています。

その一つ、観光スポット「ベイエリア」にある赤煉瓦の「はこ
だて明治館」は明治四十四年に函館の郵便局として建てられまし
た。局舎移転に伴い、昭和三十七年に民間に払い下げられ、商社
の事務所・倉庫などとして再利用された後、昭和五十八年に
ショッピングモールへと生まれ変わります。例年ですとこの辺り
は、研究大会の時期、多くの観光客で賑わい、臥牛山の展望台か
ら望む夜景は、秋の澄んだ空気で一段と美しい光りを放ち、揺ら
します。

新型コロナウイルス感染症の一日も早い収束を祈念しますとと
もに、研究紀要へ寄稿して下さった方々、各分科会の提言を御
準備くださった校長先生はじめ、関係の皆様函館市中学校長会
員一同、心より感謝申し上げます。

全道中 第90号

発行 令和三年三月一日

発行者 北海道中学校長会

会長 鎌田浩志

札幌市中央区北一条西三丁目

札幌プラザビル内

電話(〇一一)二五一―一三四四

FAX (〇一一)二五一―一三〇二

編集 北海道中学校長会情報部

印刷所 佐藤印刷株式会社

札幌市北区北七条西八丁目一

電話(〇一一)七二六―三三四五

北海道中学校長会の歌

清水 弘 作詞
上元 芳男 作曲

北海道中学校長会の歌

Moderate mp

どーら こくーの いくさ をこえーて あ
ら いへーの きぼう ゆたけーく た

たーらしーき じだい をひらく お
のーもしーき わかき せだいの さ

おいなる ねがいにもえて われ
ちおおき みよのあけほの われ

らたちたり われらたちたり
らはたさん われらはたさ

mp

い く せいそう ひとつはかわれど

きょう いくの しめいとすじ

mf mp

さくほくに りそうかけて われつどえり み D.S.

2. v mf f molto rit > div

ん 道中 道中 はえあれ道～中

慟哭の いくさを越えて

新しき 時代を拓く

大いなる 理念に燃えて

吾ら 起ちたり(くり返し)

幾星霜 人は変れど

教育の 使命一筋

朔北に 理想をかけて

吾ら 集えり

未来への 希望豊けく

頼母しき 若き世代の

幸多き み代のあけぼの

吾ら 果たさん(くり返し)

道中 道中

栄あれ 道中